

三重大学国際交流センター

紀 要

第 15 号 (留学生センター紀要より通巻第 22 号)

目 次

研究論文

日本の中国観研究 (15) (2018.9-2019.8)

—比較文化的事例研究— …………… 藤 田 昌 志 (1- 16)

谷崎潤一郎と「支那趣味」 …………… 藤 田 昌 志 (17- 31)

フィラー的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」の

インタビュー談話における出現率について …………… 百 瀬 み の り (33- 47)

研究ノート

福本和夫論 —比較文化学の先駆者、福本和夫— …………… 藤 田 昌 志 (49- 61)

書 評

清水多吉 (2013) 『岡倉天心 美と裏切り』中央公論新社 …………… 藤 田 昌 志 (63- 71)

調査報告

「異文化理解」科目における共通教科書導入に向けて

—ドイツ語授業アンケート調査の分析を手がかりに— …………… 大 喜 祐 太 (73- 80)

実践報告

2018年度三重大学ベトナムフィールドスタディの意義と課題

…………… 奥 田 久 春・松 岡 知 津 子 (81- 94)

産学官連携によるSDGs教育とグローバル人材育成事業の実践

～中部国際空港協議会/県庁との海外渡航啓発事業第2弾～ …………… 栗 田 聡 子 (95-111)

三重大学国際交流センター紀要 [投稿規定] …………… (113)

三重大学国際交流センター紀要 [執筆要領] …………… (115)

執筆者一覧 …………… (117)

編集後記

三重大学国際交流センター

日本の中国観研究（15）（2018.9－2019.8）

—比較文化的事例研究—

藤 田 昌 志

Japanese “Perception of China”（15）（2018.9－2019.8）

—Case Studies in Comparative Culture—

FUJITA Masashi

〈Abstract〉

How did Japan think about and perceive China historically? It is very important for the Japanese to understand their history by considering Japan's relationship with neighboring countries. Moreover, it is also critical to know how Japan perceives China in the present as we grapple with desirable relations between Japan and China. I would like to examine the Japanese “Perception of China” in this study, as I have done in my previous research. I have identified books on China that excellently reflect Japan's “Perception of China”; these books have been published in Japan for this one year. In this study, I have classified these books into four categories, as I did in my past research, and studied each book and clarified the Japanese “Perception of China” in the present one year.

キーワード：文化大革命 精日 「日出処」「和漢の境を紛らかす事」【典拠】

1 序

北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長とアメリカのトランプ大統領の二回目の会談（2019年2月27日、28日の両日、ヴェトナムの首都ハノイで行われた）はうまくいかず、その結果、北朝鮮はロシアや中国に接近した。2019年6月下旬のG20が大阪で開催される一週間前の6月20日、中国の習近平国家主席は北朝鮮・平壤に到着し、二日間の訪問中、金正恩朝鮮労働党委員長と会談した。核の全面廃棄か部分廃棄かで北朝鮮とアメリカで考えが一致

しなかったことに起因するのであろう。G20 後の米朝サプライズ会談はトランプのイメージ戦略であろう。アメリカの二者択一的で、強圧的な態度は他国からも嫌悪されている。北朝鮮が核開発を本格的に行い始めたのは、1989 年の米ソ冷戦終結後である。中国もロシアも、緩衝地帯としての北朝鮮の崩壊を望みはしない。日本は天安門事件以降、アメリカのチャイナ・ウオッチャー的視点から中国を見るのが常態化している。かつての「尊崇」という中国観は今の日本には存在しないと言っても過言ではない。こうした状況のなかで、この一年の日本の中国観について、日本で出版された書籍の中から考察したいと思う。

2 日本の中国観研究 (2017.9-2018.8)

I 社会関連書籍 (政治・経済を含む) 考察

楊繼繩著 辻康吾編 現代中国研究会訳 (2019.1)『文化大革命五十年』
岩波書店

本書は楊繼繩氏の (2016)『天地翻覆-中国文化大革命史』香港・天地圖書有限公司 を底本として、氏がそれに大幅な改訂を加えた新稿、そして『天地翻覆-中国文化大革命史』の「導論」部分に手を加えたものを合わせて、氏の文革論として、辻康吾氏が構成した書である (編者 あとがき p.233)。

辻康吾氏は編者として、著者の提議した新しい文革認識に注目し、以下の 3 点について論評を加えている (同 pp.234-236)。第一に、従来の論では文革を造反派 (文革派) と実権派の抗争として、「加害者」としての前者の、「被害者」としての后者への迫害及び文物破壊として描いてきた (1981 年の「建国以来の党の若干の歴史的問題についての決議」と同じ) が、本書の著者である楊氏は文革後、実権派=官僚による特権独裁体制が全面的に復活、強大化し、それが現在中国であると文革後も視野に入れて考えている。第二に、文革時期の流血事件の凄まじさについてであり、公式では文革の犠牲者は死者 40 万人、被害者 1 億人とされているが、実際にはその数百倍の人々が犠牲になったことが明らかにされている。第三に、本書から得られた最大の教訓は、中国政治の本質は林彪が言ったと言われる「権があれば全てがある」(“有权就有一切”) という一言に尽きるということである。辻氏は文革を過去のこととしてではなく、現在中国との連続で捉えている。中国社会の矛盾の発露としての「文革」は、現在でも起こる可能性があると考えているようである。

本書の末尾は次のような言葉で終わっている。「権力の抑制均衡、そして資本を制御する制度を樹立することが社会の必然的要求である。その制度こそが立憲民主制度なのである」

(p.230)。世界の現状をみると、西型立憲民主制度が形式化し、国家、民主主義自体が富の圧倒的少数者への偏りに呼応して存亡の危機に瀕し、国家主義が台頭している現状で、「立憲民主制度」に解決を見出そうとするのは、果たして賢明であろうか。中国は、自らの平民発展時代と君主専制時代が併存していた（内藤湖南の説）宋代などの政治形態に学ぶべきではないだろうか。

古畑康雄（2019.1）『精日 加速度的に日本化する中国人の群像』講談社
講談社+α新書

古畑康雄氏は共同通信社編集局国際情報室次長。同社の中国語ニュースサイト「共同網」を企画・運営している（奥付による）。

中国の王毅外相は2018年3月の全国人民代表大会で“精日”について“中国人的败类”（＝「中国人のクズ、売国奴」）と言った（p.5 まえがき）。しかし、古畑氏によると“精日”とは元来は、日本社会の礼節や文化を敬愛し、日本人的な生活を送りたいと考えている人々のことだったが、中国政府により「日本軍服を着て、日中戦争を日本の側に立って肯定する、中国人にあるまじき、ならず者」というような定義を下された言葉である（p.56）。台湾の“哈日”には日本精神を持った「日本語世代」というバックボーンがあるが、中国の“精日”には「日本に対するネガティブなイメージが強い」（pp.41-42）。

“精日”の語源は“精趙”というネット流行語で、それは「本来は趙家（魯迅の『阿Q正伝』の地方の名家「趙家」が出典）の人間ではないが、精神的には趙家の人間だと思っている人（＝阿Q）」で、“权贵”（特権階級エリート、いわゆる「赤い貴族」）を隠語で「趙家人」と呼ぶのが流行っている（p.57）。“精日”とは「本来は日本人ではないが、精神的に自分を日本人と同一視している人」である（p.57）。中国の社会、政治、文化の発展の必然的結果が“精日”であり（p.109）、経済的に豊かな中国人ほど日本に対して好意的と言える（p.118）。

「中国」のネーションとは何か。“精日”は中国のネーションにとって一つの脅威となりうる。中国共産党を批判しない限り、アニメ、スポーツ、ライフスタイルなどの点で日本に親近感を持つ「マイルドな精日」は問題ないであろうが、自分を日本人と同一視して共産党政権下の中国への帰属意識を持たない「ハードな精日」（pp.73-74）は中国共産党によって批判されるであろう。そもそも「中国」のネーション（国家[ステート]としての一体感、共通意識を持つための統合の精神的、人的要素）とは何か、常にそのことが問われている。したがって、中国共産党は一貫してアナーキズム（無政府主義）を排斥し続けている。とはいうものの、中国の根底には“大一統”（統一を尊ぶ）とアナーキズム（無政府

主義)が錯綜しているのである。中国の多様性の尊重はアナーキズム(無政府主義)の尊重へ結びついていくのである。

藤村幸義 雷海濤 編(2019.4)『飛躍するチャイナ・イノベーションー中国ビジネス成功のアイデア100』中央経済社

本書は日本日中関係学会(会長:宮本雄二 元中国大使)の中に設けられている「中国ビジネス事情学会」での議論をベースにしたもの(はじめに V)で、藤村氏は拓殖大学名誉教授、元日本経済新聞論説委員、雷氏は桜美林大学教授、元東芝中国室長である。現実の日本と中国のビジネスにかかわっていた人たちが作った本である。

中国は「一帯一路」戦略のように積極的に「面」を作っていこうとするが、日本は「点」にこだわり、「点」に問題があると納得できず、しっかりした事前調査と詳細な計画書がないと動き出さない(p.47)。中国経済は第一段階=1978年末にスタートした改革開放政策を試行錯誤しながらも一步一步進めていった時期、第二段階=2001年のWTO(世界貿易機関)加盟をきっかけに、一気に高度成長の道を通った時期、第三段階=2010年代から中国人の生活水準が高まっていくが、経済成長率は減速し、以前のような高度成長は期待できない—という三段階を経てきている(p.159)。世界の経済大国となった中国に対する米国の警戒心が高まり、米中間での経済摩擦が一気に激化しているが、それはかつての日本が米国から受けた仕打ちと同じで、日本は経済成長を果たして世界第二位の経済大国となった1970年代以降に米国からの標的になり、繊維、自動車、ハイテクなど多くの分野で日米経済摩擦を引き起こされて、結果、日本は度重なる攻撃に耐えきれず、長期にわたる経済停滞の局面に入ってしまう。

日本の輸出入総額の相手国は2007年に中国が米国を抜いてトップに躍り出て、それから2017年までの10年間、中国は一貫してトップの座を占めて、中国との関係が重要であることは誰もが認めざるを得ない。「米国追従」だけでは日本の国益を損ねてしまうから、ほかの国ともバランスよく付き合っていく必要があり(p.162)、中国を無視することはできない。日本は「中国市場観」を大きく変えてしかなるべきなのに、現実には、日本企業が競争力、優位性を有していた1990年代の中国市場観が今でも日本には根強く残っている(p.48)。「上から目線」から抜け切れない日本(はじめに III)は東京オリンピック後の内需の落ち込みを考えて、巨大化していく中国市場を抜きにして、日本の将来像を描きにくいのではないか(はじめに V)と本書は言う。

まず、中国の現実を知ることから始めて、日本と中国の相違点、類似点を比較文化的に探求していく必要がある。日本は外国をランキング付けして、上のランキングの国のこ

としか考えないくらいがあるが、それでは今後の世界で上手くやっていけないであろう。

Ⅱ 語学・文学・歴史・哲学関連書籍考察

余華著 飯塚容^{ゆとり}訳 (2019.1) 『活^いきる』中央公論新社 中公文庫

本書は『活きる』(2002年3月 角川書店刊)に中島京子氏の解説を加え、文庫化したものである。(奥付けの前頁の記載による。)余華氏は1960年、杭州生まれ。伝統的なリアリズムの枠組みを打ち壊した新しさと実験性が小説にあったので、同時期に登場した若手作家、蘇童、格非らとともに「先鋒派」と呼ばれた。(訳者あとがき pp.316-317。)

『活きる』は余華の長編第二作目で、1993年に上梓され、翌年には張芸謀監督によって映画化され、同年、カンヌ国際映画祭で審査員特別賞と主演男優賞を受賞している。(「解説」 中島京子 p.323。)本作品は日中戦争後から国共内戦、中華人民共和国建国、毛沢東の大躍進、文化大革命を時代背景として、主人公の大地主の息子、福貴^{フクキ}が若いころの放蕩三昧から博打で土地を巻き上げられ、借りた5畝^ムの土地で農業を行い、妻の冢珍^{チヤーチェン}、愛娘の(口と耳が不自由な)鳳霞^{フォンシャ}、息子の有慶^{ヨウチン}、孫の苦根^{クケン}に病気や医療ミスで先立たれてもなお生き続ける姿を活写した小説である。中島氏は「解説」で『活きる』という小説には、ある種の諦念というか達観のようなものと思いに支えられた、突き抜けた明るさが描かれる(同 p.328)と作家的な鋭敏な感性でこの小説の本質を言いあてている。それは中国人の極貧層の中にも存在するであろう「静かな明るさ」(同 p.328)をこの小説の中に感じ取っている中島氏の言辞であり、日本の中国観としては、中国民衆の持つ底知れぬバイタリティーへの「尊崇」の念を表しているものと言っても過言ではないであろう。

李軼倫^{いっ} (2019.2) 『ちょこっと中国語翻訳 ネイティブらしく表現するコツ』白水社

本書は著者が白水社ウェブサイトに掲載した「ちょこっと中国語翻訳」を編みなおし、加筆したもので、簡単そうで意外と訳しにくい日常会話などを課題にして、読者から訳文の投稿を募り、それを添削・解説したものである(はじめに)。

全体は6章に分かれ、第1章 取捨選択し補足する 第2章 発想の違いを考慮する などを内容としている。第2章 解説4では、日本語は「うれしい、さびしい、くやしい」など、そのままの気持ちを表現するのに対して、中国語は「あなたがやさしい(だからうれしい)」／「これから行けなくなっちゃう(だからさびしい)」／「たった一点差で負けた(だからくやしい)」など、その気持ちにさせた原因についてコメントする傾向があるようだ(p.43)と述べている。このことは、日本語と比べて、中国語の表現が使役表現を多

用することを想起させる。

第5章 原文にとらわれすぎない の解説3 では、「(宝くじに) 当たったら人生変わっちゃいそうだね」→“要是中了, 肯定会改变人生啊。”(pp.126-129) の例を挙げ、日本語が断定を避けた言い方(「そうだ」)なのに、中国語は“肯定”(きっと、必ず)という断定の意味を表す副詞を使用することを述べている。これなどは日本語の、中国語表現に比べての、婉曲表現の多用という類型の一つとして括れるであろう。

ダイレクトな気持ちを表現する(日)のに対して、原因を述べることに重点を置く(中)、婉曲表現(日)より断定する表現を好む(中)などの類型・カテゴリーの下位分類として、上記の表現をとらえる、その他の日中語の表現もある種のカテゴリーの下位分類として位置付ければ、本書はもっと斬新な日中対照表現論となるであろう。日本語表現と対応する中国語表現の類型を、一つの上位概念の下に位置付けるということである。例えば、日本語の受身表現は中国語の①“被”表現②主客転換③存在句表現④“举行”型表現などと対応する。この「対応」は直接、表現が対応しない場合も含めての「対応」という概念である。受身は日本語の受身が中国語ではどのように表現されるのかといった視点から説明されるべきであるというのが、私の考えである。

宇野精一(2019.3)『孟子 全訳注』講談社 講談社学術文庫

本書は1973年に集英社より刊行された『全訳漢文大系 第二巻 孟子』から抜粋し文庫化したものである。(奥付の前頁の記載による。)本書の「解説」の三 孟子に関する評論では吉田松陰の『孔孟余話』を引用して、松陰が程伊川や張横渠おうきよの本然と気質とに分けて論ずる性説が学問的・論理的に優れていることを承認した上で「程張は議論上のことにて、孟子は事実上の教なり。孟子の人を教る、始終人の性善を引起すことを主とす。」「程張に至りては、孟子を後立にして、荀卿・揚雄・韓愈の徒と難を構るのみ。其説愈備りてその実愈疎なり。故に孟子の書を読者、真に心を斯に留め議論に涉らず、只事実を学ぶべし」としていることを「まことに孟子の立場をよく理解したものだ」と高く評価している(pp.489-490)。

吉田松陰の『孔孟余話』について福本イズムや『日本ルネッサンス史論』で有名な福本和夫は「孔子孟子の言説や行動ないし態度からは、「君、君たらずといえども、臣は臣たざらざるべからず。父、父たらずといえども、子は子たざらざるべからず」ということはとうてい演えきしがたい。それは儒教を根本理念において歪曲することによってのみ可能である。」、かの陽明学者の大塩平八郎も大いに孝を強調しても忠孝一致論、忠孝不二論ではなく「むしろ、君君たらざれば、臣は臣たらずとも可なり、とはっきり割切っていたにちが

いない。ここに松陰との顕著な相違がある。それゆえ、日本ではじめて、このような演えきというか、拡張解釈というか、いや端的に最もわかりやすくいうならば、儒教の歪曲をあえてすることによって、絶対主義理念の芽生を育成培養したものが、じつに松陰の松下村塾における『孔孟余話』であったといえる。」(福本和夫(昭和 42) p.768) と述べている。日本での『孟子』の解釈といってもさまざまである。

河上麻由子 (2019.3) 『古代日中関係史一倭の五王から遣唐使以降まで』 中央公論新社 中公新書

歴史学の中で、対外関係史は本流をなしたことがないが、①仏教がアジアの関係をどのようにとり結んだか②古代の王権を取り巻く政治状況一に注目したのが本書である (p.245)。607 年、小野妹子を使者として「日出処の天子」が記された著名な書状が隋皇帝煬帝に送られる。『隋書』東夷伝、倭国の条である。河上氏は「日出処」「日没処」の従来の理解(「日の出の勢いの国」対「夕日の沈む国」)は太平洋戦争から戦後も多く支持されたものであるが、近年、東野浩之氏によって『大智度論』という経論(仏の教えを記した「経」とその注釈の「論」)が「日出処」「日没処」の出典であり、「単に東西を意味する表現にすぎないことが証明された」と述べている (pp.76-77)。

「日出処天子」「日没処天子」の「天子」については、従来の中華思想上の(ただ一人の)意味ではなく、『金光明経』の「天子」の意味の如く「諸天に守護され、三十三天から徳を分与された国王」(複数)と解すべきである (p.89) と言う。煬帝が倭国の書状(「書を致す」は私信に多く用いられた文書形式だった (pp.79-80)) で倭王が「天子」を自称するのは仏教後進国の王のくせに不遜であると不快感を表したのも当然であった (pp.89-89) と解釈している。

「聖徳太子」「遣隋使」「外交」「国家の面子」「対等」などの語、概念が時代や国策によって変貌してきたことが本書によって、よくわかる。「中国」という概念、イメージも、現在の日本の首相の下では、「油断ならない」「民主主義」「自由主義」とは異なる異質な国家」というもののようなものである。防衛費の増大はそのことを如実に反映している (2019 年 4 月現在)。

村井章介 (平成 31.3) 『古琉球 海洋アジアの輝ける王国』 KADOKAWA 角川選書 616

村井章介氏は日本中世史、東アジア文化交流史専攻の東京大学名誉教授。史料を読み解き、その向こうを透視する中から出てくる古琉球史の面白さを記述したのが本書である

(p.24)。「古琉球」とは「沖縄学の父」伊波普猷（柳田国男の弟子）が造ったことばで、1609年（日本慶長14年・明万暦37年）に薩摩島津氏に征服される以前の琉球を指す（p.9）。古琉球はヤマトの影響のおよぶ限界的地域であると同時に、それ自身が独自に中国、朝鮮、東南アジア、そしてヤマトと関係を結び、新たな関係性＝地域を作り出した存在で、村井氏は「海洋アジア」と呼んでいる（p.19）。琉球の国家としての存立を支える軸は明との朝貢一回賜の関係にあつて、日本が十年一貢であったのに対し、琉球は一年一貢で、1475年に二年一貢とされたが、他の諸国に比して群を抜く進貢回数を誇り、それを海禁体制を布く明が、自国商人に頼らず、海外産品を入手するために、琉球という国家に貿易会社のような位置づけを与えていた結果だ（p.183）と村井氏は述べている。琉球は、明・日本・朝鮮との関係だけでなく、対外貿易港那覇を起点とする交易ルートはシャム・パレンバン・ジャワ・マラッカ・スマトラ・パタニ・安南・スンダなどの南アジア諸国に延びていて、これらの国から買い付けた胡椒・蘇木等の産物を明に朝貢として搬入し、回賜として得た磁器等の中国特産品をこれらの国々に運ぶ中継貿易こそ琉球の最大収入源だった（p.187）。

ここ数年、村井氏の古琉球研究は①視覚的資料とりわけ絵地図の活用②ジェンダー史の導入という二つの新しい方向を模索しつつある（あとがき p.413）。

中世のヤマト人について、村井氏は次のような深い認識を記している。「中世のヤマト人は天皇の清浄な身体を究極の中心に、それを内裏、洛中、畿内、日本国、境界が順に包み込み、外に行くほどケガレの度合いが強まる、といった世界像を持っていた。この浄一穢の同心円において、異域の住人は、国内の被差別民と同じケガレにまみれた存在とされる。だが、蔑みは恐れを返し、夷人はまた超自然的な力のもちぬしだ。この側面を肉づけしたものが「鬼」である」（p.61）。

「日本」の中国観は「古琉球」＝「海洋アジア」の中国観を含むことによって、より豊かなものになる。「国家」が西洋近代の産物であることを本書のネガとして認識できる。

Ⅲ 文化・比較文化関連書籍考察

福永光司（2018.9）『道教と日本文化〔新装版〕』人文書院

比較文化には影響関係を主とするものと、それにとらわれないものがあるが、前者が主流で、本書も道教の日本への影響を探求した書である。福永氏は道教研究の第一人者で、従来、中国が「神のない文明」とされていたことに対して、異議を唱え、「神のある文明」の具体例として道教をクローズアップした。

昊天^{こうてん}上帝、略して上帝は中国古代思想史で否定する方向として、孔子を始祖とする儒家があり、反対の有神論としては墨家があつて（pp.44-46）、孟子は墨家を目の敵にして攻

撃したが、孟子の儒学と漢代以後の儒教との大きな転換点となった董仲舒の「天人合一論」は墨子の「天志」の理論と同じ構造をとり、上帝の「義」「意志」に沿えば賞、沿わなければ罰というものになった（pp.47-48）と福永氏は言う。

福永氏の述べる道教の日本への影響として①岡倉天心の道教と②『莊子』の「庖丁」（養生主篇）は注意をひく。岡倉天心は道教を唯物的道教と哲学的道教に分けて、前者は仏教から礼拝や儀式を取り入れたが、後者は「些事」も「大事」と同様に重要と考え、「茶道」も「変装した道教」であるとして、哲学的道教を重視した（pp.174-177）。有名な「アジアは一つである」という『東洋の理想』の冒頭の一句は現実の「多」が「道」においては「斉しい」（p.185）という意味であると福永氏は言う。

『莊子』の「庖丁」の喩えは“技”より以上のもの、すなわち“道”の体得（p.203）を示唆しているものであり、日本の茶道、書道、柔道、相撲道、修験道も老荘の「技を根底から支え、技を技として生かすものは道である」（「道は技より進めり」（『莊子』養生主篇）という技能の哲学に基づく（p.249）。

道教は仏教が流布した日本では重んじられず、また戦前は、天皇崇拝の根源が中国由来のものであっては都合が悪い（「天皇」という言葉自体、「天皇大帝」＝道教の神学における最高神という道教の言葉である）こと及び西洋崇拝（＝東洋蔑視）から研究するのがはばかられたが、現在では研究が盛んで、その背景には神秘的なものへの憧憬のエトスが根底にあるように思われる。

彭丹（2018.10）『いにしへの恋歌 和歌と漢詩の世界』筑摩書房 筑摩選書 0166

和歌と漢詩は、後者を土台として前者が生まれたが、前者には恋歌が多く、後者には恋歌が少ない、両者は相通じながら、和歌は漢詩と異なる独自の世界を創りあげてきた、その和歌の独自の世界を漢詩との比較において探求したのが本書である（まえがき p.17）。

『詩経』「閔じよ睢」は正しき夫婦の恋の勧めという大義名分を背負わされた恋歌（p.36）である。中国では治国平天下の政治、文学が重んじられたが、日本では①女性の地位が高かったこと②平和であったこと——等により、天皇は「好色」（常に相手を新たにし、即興で恋歌を詠むという条件を満たしつつ、恋に情熱を燃やすこと（p.45））を重んじ、恋歌を詠み、『新古今集』などの勅撰和歌集を作った（p.49）。

彭丹氏は13世紀以降、異民族の元の統治によって、漢文化はその流れを大きく変え、和と漢の文化はそこから枝分かれしていったから、本書では13世紀以前の詩歌に的を絞って探求する（p.262）と言う。

和歌が漢詩と異なる独自の世界を創りあげてきた方法の一つとして、村田珠光の「和漢の境を紛らかす事」を援用し、和物・唐物に拘泥しないところから「わび」が生まれたように、和歌と漢詩も同様に、葛藤の中から和歌の世界に「もののあはれ」が現出した(p.265)と言う。和歌と漢詩の不滅の生命力の源は「人間の寂しさ」であるとする(p.265) 彭丹氏には大陸中国での苛酷な思い出(政治によって深く高い文化が踏みにじられた思い出)が根底にあるようだ。氏は異国で「和漢の境を紛らかす事」を行っている、自らを相対化する眼を持つ比較文化学者である。

小林忠(2018.11)『日本水墨画全史』講談社 講談社学術文庫

奥付によると、本書はペリカン社より1991年、1992年に刊行された『墨絵の譜—日本の水墨画家たち』全二巻を改題し、合本にして文庫化したものである。

24人の日本の水墨画家を取り上げ、論じているが、日中比較文化学的視点の論述もみられる。黙菴靈淵(もくあんれいえん)は「本朝最初的水墨画家」である。その「四睡図」は三人と虎の一团を描いているが、夢の中の世界のようにとらえどころがなく、中国の水墨画のように「物体の質量や空間の深淺が」「説得的に表現されている」(p.47)ということがない。「日本文人画の祖」である玉腕梵芳(ぎょくえんぼんぼう)の絵は「平面的で装飾性に流れやすく、軽薄なほどに新しさを好む傾向」があるが、それは中国人の「伝統を重んじ、しかも現実から離れようとしなない強固な保守的な体質がもたらした作画上の規範」=南齊謝赫の“画之六法”とは異なるものである(pp.56-57)。村田珠光(1423-1502)は「和漢の境をまぎらかす」ことを重視したが、それは15世紀末葉から16世紀初頭にかけての文化史的状況の特質であり、連歌、能楽、立花、水墨画はその体現であった(pp.100-101)。相阿弥も「和漢の境をまぎらかす」努力をした水墨画家であるが、さらに一步を進めて、「和」に居直り、「我」を表そうとすれば、相阿弥の水墨画はそのまま長谷川等伯の「松林図屏風」へ直接につながっていくだろう(p.106)と小林氏は述べている。

「中国の理詰め水墨画はその急所をついに日本人はつかめなかったようだ。叙事的な文章を苦手として抒情的な詩を得意としたこの国の人、墨おだやかに筆軽く、半島の人とこれだけは違って、淡白と清麗、そして時に豪奢、放胆の美質を愛してきた。」(p.472)と小林氏は日本の水墨画を総括している。やはり日本は感性文化ということであろうか。

別冊 炎 芸術(2018.12)『天目 てのひらの宇宙』阿部出版

福建建窯の黒釉茶碗の中で最も評価の高いのは曜変(漆黒の釉の上に銀色に輝く星のような斑紋が浮き出し、そのまわりに虹色の光彩があらわれた黒釉茶碗)で、日本で国宝に

指定されている陶磁器 14 点のうち、3 点が曜変であるのは、日本人がこの焼き物にいかにか魅せられてきたかを物語っているが、中国にはなく、日本にのみ残っている (p.28)。このことについて、法政大学の彭丹氏が著書 (2012) 『中国と茶碗と日本と』小学館で、曜変は中国では不吉の兆しとされて忌み嫌われ、窯から出るとすぐに壊されてしまったために中国には存在せず、日本にある曜変は壊されそうになったものを救い出した者から貿易商人の手を経て日本に運ばれたのではないかという斬新な説を示した (p.29) が、近年、中国で曜変の破片が発見され (2009 年 杭州出土 p.30 下写真)、彭丹氏の説は成り立たなくなってしまう (p.29)。

中国では喫茶法の変化 (点茶=大きな茶碗で粉状の茶に湯を注いで攪拌する方法 から泡茶=茶葉に湯を注ぐ方法 への転換)によって 14 世紀を境に黒釉茶碗の生産が急速に衰えたが、日本ではそれ以後も、古い喫茶法である点茶と黒釉茶碗の流行が続いた (p.31)。柳田国男の言語圏論を彷彿とさせる文化的事実である。日本はなぜ点茶を残したのか。古いものを残して失うことなしに、新しいものを迎え入れる不二一元論アドヴァイティズムの精神が日本にはあると言ったのは岡倉天心 (『東洋の理想』「理想の範囲」の章) であった。

武藤秀太郎 (2019.2) 『「抗日」中国の起源 五四運動と日本』筑摩書房 筑摩選書 0171

中国では「近代」と「現代」を区切る一大転換点として五四運動を位置づけ、毛沢東は (1940) 「新民主主義論」で「中国ブルジョア民主革命」は五四運動を境に担い手がプチ・ブルジョアジーとブルジョアジー (有産階級) からプロレタリアート (無産階級) へ変化したと言っている (pp.16-17)。竹内好は毛沢東の「新民主主義論」を基本的に踏襲し、デューイの五四運動論に準拠して、「内発的」な五四運動と「外発的」な明治維新という図式を (1961) 「方法としてのアジア」で提出している (pp.45-46)。それは日本人の、「尊崇」の中国観=自己卑下、自虐の日本観であった。

「反日」と「親日」(「親日」は中国では貶義語である)、「反日」と「哈日」(日本尊崇派) は二項対立的概念で、著者武藤氏は採らない。著者は「抗日」と「知日」を共存しうるものとしてとらえ (pp.52-53)、それら二つをキーワードにして、中国人の日本観を読み解いていく (p.53)。「抗日」は①侵略の歴史を直視せず、領土を不当に占拠する日本人②日本に媚びる裏切り者の中国人③不当な日本に怒りを爆発させる中国人の若者一という三つの要素によって成り立っている (p.28)。ブルース・リーの (1972) 『ドラゴン 怒りの鉄拳』も「抗日」の映画であった (p.24)。

五四運動と大正デモクラシー運動は密接不可分につながりあっていて、国家の枠組みを

超えたトランスナショナルな思想運動 (intellectual movement) であった (p.20)。明治維新後、日本が初等教育の充実に力を注いだのに対して、中国では清末の教育体制は高等・大学教育の充実が図られた (p.93)。中国の教育体制の充実や中国人留学生支援に東京帝大の服部宇之吉や服部の妻 (秋瑾の面倒を見た) が尽力している (pp.138-143)。

20世紀初頭に日本人教師も中国に渡り、1906年のピークには500~600人がお雇い外国人として中国で教え、一時、中国の教育分野でのお雇い外国人の座をほぼ独占した (pp.141-146)。もっとも、内容面や暴力など一部、問題教師はいた。

吉野作造は五四運動と日本の関係で無視できない人物で、袁世凱の息子、克定の家庭教師をして、1906年の初めから約三年間、中国に滞在した (p.216)。吉野は五四運動の際、中国人留学生を献身的に支援したが、それは吉野に留学生の動機への強い共感があったからである (p.253)。

本書は、五四運動の担い手を生み出した中国高等教育機関の成り立ちと日本との関係にスポットライトをあてた書である。ほかに、朝鮮の三一運動や中国国民党、軍閥、商工業者など、さまざまな観点から五四運動を描くことが可能であり、著者は本書が呼び水となって、100周年を迎える五四運動の研究が活発になることを願っている (あとがき p.289)。

本書は、日本と中国の人の往来を視野に入れて、中国人の日本観を明らかにすることを目論んだ、五四運動についての比較文化学的な書である。国際化時代の研究とは、こうしたものが中心になるのが本来の姿であろう。細かい「分析」だけではなく「総合」を視野に入れた研究が必要である。

王敏 (2019.4) 『平和の実践叢書 2 嵐山の周恩来 一日本忘れまじー』 三和書籍

日中比較文化学者、王敏氏の本書の眼目は1919年4月4日、5日の両日、周恩来が京都の嵐山を逍遥し「雨中嵐山」「雨后嵐山」の二詩を作ったことについてのフィールドワークと推定を述べた第一章「雨中嵐山」の誘い、第二章「雨中嵐山」の逍遥考にある。

1919年4月6日は清明節 (中国では祖先祭祀の日) で、4月4日、周恩来は偶然、日本の禹王・角倉了以の銅像に嵐山の亀山公園で遭遇し、さらに大悲閣千光寺 (黄檗宗の寺。日本の禹王・角倉了以の木造が安置されている。) の存在を知った、禹王への敬虔な気持ちをつのらせてもう一度、翌日、嵐山へ来ようという気持ちが周恩来の心に自然に生まれたのであろう (p.71)、翌4月5日の嵐山逍遥の目的は祖先祭祀と禹王を祀ることであった (p.79) と王敏氏は推定する。

嵐山のフィールドワークの結果、周恩来は1919年4月4日、京福電鉄嵐山駅下車の後、

天竜寺、亀山公園（現在、南口の近くに周恩来総理記念詩碑（正面に周恩来の「雨中嵐山」が刻まれている）があり、詩碑の近くに角倉了以（1554－1614）の銅像が立っている）と桂川右岸を遊覧し、翌4月5日の二日目、渡月橋を渡り、大悲閣千光寺まで登った（p.43）と王敏氏は推定する。

嵐山京福電鉄の古刹、名刹の漢字の並ぶ駅名（ex.鳴滝、帷子ノ辻、鹿王院等）に漢字圏の人間ならその美しい音色（発音）に魅せられる、2018年に800万人の中国人旅行者が訪日した背景に、こうした永久に衰えない京都の「漢字風」の魅力が根本にあると信じる（p.85）と王敏氏は言う。「漢字」で考える中国人。「漢字」と「カナ」の使い分けの日本人。

周恩来の4月5日の二作の詩作のうち、「雨中嵐山」の最後の部分“人間的万象真理，愈求愈模糊。一模糊中偶然见着一点光明，真愈觉娇妍”（世のもろもろの真理は求めるほどに模糊とするも一模糊の中にたまさかに一点の光明を見出せば真にいいよなまめかし）

（p.34）の“娇妍”の日本語「なまめかし」では意味が色っぽい感じとなり、適切でない。日本語としては「あでやかだ」ぐらいがいいのではないだろうか。その前の部分の“潇潇雨，霧蒙浓，一线阳光穿云出，愈见娇妍”（雨濛々として霧深く 陽の光 雲間より射していいよなまめかし）（pp.34－35）とある「なまめかし」も「あでやか」にしたほうが適切であろう。

蛇足ながら、筆者は1978年の周恩来総理記念詩碑建立に中国語の通訳補助として参加した。孫平化氏の流暢な日本語と柔和な笑顔が印象に残っている。

IV その他

E・シャヴァンヌ 菊地章太（2019.6）『泰山—中国人の信仰』平凡社 東洋文庫 895

本書はエドヴァール・シャヴァンヌ著（1910）『泰山—中国人の信仰に関する試論』のうち、第一章「泰山の信仰」第二章「泰山の史跡」第六章「泰山の民族」及び「結論」を訳出したものである（凡例 一 による）。

著者のシャヴァンヌは1865年10月5日にフランスのリヨンに生まれ、国立東洋語学校（現フランス国立東洋言語文化学院）の教授であったコルディエの勧めで中国史の研究を行い、1889年からフランス公使館員として4年の間、北京に滞在し、そのおり、司馬遷の『史記』の全巻の翻訳に着手して、最初に「封禪書」を訳し、ついで漢代画像石の研究を公刊している（pp.290－291）。1907年、シャヴァンヌは華北調査旅行を行い、その主要目的は一、漢代画像石の研究、二、北魏仏教石窟の研究、三、唐代陵墓彫刻の研究であったが、本書の泰山信仰の考察を漢代画像石や北魏仏教石窟、唐代陵墓彫刻の考察に先駆け、

堂々たる研究書として完成している（訳者 解説 pp.294—297）。

元来、泰山は一自然神で、それは本質的に自然とのつながりを重んじた宗教である道教的な信仰に属する神であったが、唐代の6、7世紀に仏教の影響で道教は因果応報的な心の領域にかかわるものを取り入れるようになり、一つは城隍神^{じょうごう}という都市を守護する神の信仰へ、もう一つは死者の魂を迎え入れる泰山の信仰という二つの方向へと展開した（pp.36—37）。泰山の山頂と山麓で行われた封禪のまつりについては史書にも幾たびか記されてきており、「封」のまつりは天に向けられ、「禪」のまつりは大地に向けられていて（p.38）、『史記』の秦の始皇帝の28年（BC219）の条にも「始皇帝は泰山の山頂にいたり、石を立ててみずからの徳をたたえ、封のまつりを成しとげたことを告げた」（pp.39—40）とある。封禪のまつりは前漢の武帝に始まり（BC110）、後漢の光武帝、唐の玄宗、則天武后も行っている（pp.40—41）。封禪のまつりの最も重要な目的は王朝の完成を天と地の神に告げることであった（p.43）。つまり、封禪のまつりは自らの「皇帝」としての地位を天下と天に告げる象徴的、かつ具体的行為であったと言えよう。こうした歴史を踏まえた象徴的、かつ具体的行為は中国的であると言ってよい。

村田右富実^{みぎふみ}（2019.6）『令和と万葉集』西日本出版社

本書は「令和」新年号と「典拠」の関係について書かれた本である。首相官邸発表では「令和」は「万葉集の梅の花の歌、三十二首の序文の「初春の令月にして 気淑く風和ぎ 梅は鏡前の粉を^{ひら}抜き 蘭は^{はいご}珮後の香を^{かおら}薫す」から引用したもの」（p.14）としているが、マスコミ報道は①「初めて国書から採られた年号だ」といったもの（首相官邸発表はその立場）②『万葉集』から採られたといっても、もとをたどれば中国文学じゃないか」といったもの——という大きく二つの流れに分かれていた（p.1）。①は日本の小中華主義の主張②は中国尊崇や引用淵源追及の立場からの主張であろう。村田氏は「令和」と、『万葉集』や『文選』（張衡『帰田賦』などが収められている）などとの関係を明らかにし、本書をきっかけとして『万葉集』に興味を持つ人が増えることを『万葉集』研究者として嬉しく思うと述べている（p.3）。

「令和」の【典拠】（村田氏は全体の枠組の典拠と部分的、直接的典拠を分けて、後者を【典拠】と表記している。）は天平元年（729年）の長屋王の変の翌天平二年（730年）、大伴旅人によって開催された梅花^{ばいかのえん}宴に関連した「梅花の歌三十二首併せて序（＝以下、「梅花歌の序」と記す）であり（pp.51—54）、その中の「時に初春の令月にして気淑く風和ぐ」が「令和」の出所であるが、その【典拠】は張衡『帰田賦』の「於是、仲春令月、時和気清」（是に、仲春の令月にして、時和し気清し）であり、「梅花歌の序」の全体的枠組の典

抛は王羲之の『蘭亭序』であると言う (pp.80-83)。「梅花歌の序」は詩序 (漢詩集などの序文) を文章の枠組にしつつ、状況的に類似する『蘭亭序』の表現を用いて、数多くの【典抛】を駆使して組み立てられていて (=換骨奪胎して)、その【典抛】の一つが『帰田賦』であると村田氏は言う (p.104)。

現代はオリジナリティを非常に重視するが、奈良時代の教養は【典抛】のある文章を書くことにあり、多様な【典抛】は友人との感覚共有のためにあったと言ってもよい (pp.115-122)。

『帰田賦』は「梅花歌の序」のたくさんある【典抛】の一つに過ぎず、『帰田賦』が政治家として失敗し、田舎に帰ろうという内容の文章で、陶淵明の「帰去来の辞」の先駆けとなる作品であろうと、典抛を持った表現は時間の経過とともに、その表現に典抛があったことすらわからなくなり、それが典抛のあるべき姿なのであるから問題はなく (p.121,p.111) 内容にこだわる必要はないと村田氏は述べている。

本書は文章の形式における伝統 (日本の奈良時代や、そのもととなる中国の伝統) と「元号という政治」 (p.35) の関係を明瞭に説明した、日本の小中華主義と中国尊崇の両方を立てた、調和志向の「令和」についての本である。図らずして、そこに日本の中国観 (尊崇、小中華主義) が顕現している。

3 結語

日本の中国観は大きくは「尊崇」「脅威」「小中華主義」の三つに分けられるが、「小中華主義」は時代の趨勢で支持されたこともあったことを河上 (2019.3) は教えてくれる。「尊崇」にしろ、微妙な差が生じて、日本的なものが生まれてきたことは彭丹 (2018.10) 小林 (2018.11) 別冊炎芸術 (2018.12) によって知ることができる。「脅威」の念の反対が軽侮の念であろうことは藤村 雷 (2019.4) を通して理解できる。日本の中国観の考察は、日本自体を自覚して知ることに通じている。

〔引用文献・参考文献〕

- (1) 福永光司 (2018.9) 『道教と日本文化 [新装版]』人文書院
- (2) 彭丹 (2018.10) 『いにしへの恋歌 和歌と漢詩の世界』筑摩書房 筑摩選書 0166
- (3) 小林忠 (2018.11) 『日本水墨画全史』講談社 講談社学術文庫
- (4) 別冊炎芸術 (2018.12) 『天目 てのひらの宇宙』阿部出版
- (5) 楊繼繩著 辻康吾編 現代中国研究会訳 (2019.1) 『文化大革命五十年』岩波書店
- (6) 古畑康雄 (2019.1) 『精日 加速度的に日本化する中国人の群像』講談社 講談社+α新書

- (7) 余華著 飯塚容訳 (2019.1) 『活きる』中央公論新社 中公文庫
- (8) 武藤秀太郎 (2019.2) 『「抗日」中国の起源 五四運動と日本』筑摩書房 筑摩選書 0171
- (9) 李軼倫 (2019.2) 『ちょこっと中国語翻訳 ネイティブらしく表現するコツ』白水社
- (10) 宇野精一 (2019.3) 『孟子 全訳注』講談社 講談社学術文庫
- (11) 河上麻由子 (2019.3) 『古代日中関係史—倭の五王から遣唐使以降まで』中央公論新社 中公新書
- (12) 王敏 (2019.4) 『平和の実践叢書2 嵐山の周恩来 —日本忘れまじ—』三和書籍
- (13) 藤村幸義 雷海濤 編 (2019.4) 『飛躍するチャイナ・イノベーション—中国ビジネス成功のアイデア100』中央経済社
- (14) E・シャヴァンヌ 菊地章太 (2019.6) 『泰山—中国人の信仰』平凡社 東洋文庫 895
- (15) 村田右富実 (2019.6) 『令和と万葉集』西日本出版社
- (16) 福本和夫 (昭和42) 『日本ルネッサンス史論』東西書房
- (17) 藤田昌志 (2010) 『日本の中国観—最近在日本出版中国関連書籍報告— (04.9—09.8)』朋友書店
- (18) 藤田昌志 (2015) 『日本の中国観Ⅱ—比較文化学的考察—』晃洋書房
- (19) 藤田昌志 (2018) 『比較文化学—日本・中国・世界—』朋友書店
- (20) 藤田昌志 (2007) 『日中対照表現論』白帝社
- (21) 藤田昌志 (2017) 『日中対照表現論Ⅱ—事例研究を中心として—』朋友書店

谷崎潤一郎と「支那趣味」

藤田昌志

谷崎潤一郎和《支那趣味》

FUJITA Masashi

【摘要】

谷崎潤一郎は文学史上継自然主義之后出現の耽美派旗手。日俄戦争后、緊張の対外局勢逐漸迟緩、日本社会中失掉目標、躲在自己小世界里的傾向愈发明显。文学史上自然主義の兴盛被认为是对此趋势的真实反映。谷崎の処女作《刺青》写于1910年、正值自然主義の衰落期。本稿在围绕谷崎の耽美主義、東方蔑視主義、異国情調等進行探討的同时、亦尝试对他的《支那の趣味》进行详细论述。

キーワード：耽美派 オリエンタリズム エキゾティシズム 支那趣味 エロティシズム

一 序

谷崎潤一郎は自然主義の後に現れた耽美派の旗手である。明治維新後、明治政府は「治外法権の撤廃」「関税自主権の回復」を目標として、日露戦争後、それらの目標は一応、達成された。しかし、日露戦争後、対外的緊張が弛緩し、目標を失った中、日本社会では「個」「自我」に閉じこもる傾向が強くなる。文芸上の自然主義の隆盛はその傾向の反映であったと考えられる⁽¹⁾。谷崎の實質的処女作「刺青」が描かれた1910年（明治43）は自然主義に翳りが見え始めた時である。以下、谷崎の耽美主義、オリエンタリズム、エキゾティシズム等に言及し、谷崎の「支那趣味」について論述したいと思う。以上、序とする。

二 谷崎潤一郎の特徴

日本の作家、文学は政治との関係を持つことを嫌う。既に日本における政治と文学の乖離については鈴木修二氏によって言及されて久しいが⁽²⁾谷崎の場合は更に従来、無思想作家という評価が存在した。中村光夫（2015）は「根本において彼の持った「西洋」は「思想であるより、むしろ感覚であり」⁽³⁾と述べ、谷崎の言う西洋は「實際は植民地にすぎな

かった⁽⁴⁾と批判する。それに対して、伊藤整はかつて「谷崎潤一郎を「思想のない作家」と決定することに私は反対である⁽⁵⁾」と言った。伊藤は「階級思想が思想であることと殆ど同じ強さと神聖さにおいて、一人の個人にとっては、彼の生涯に与えられた肉体の条件を基にして自己の存在を考えることが思想である⁽⁶⁾」とし、形而上的、抽象的な「思想」だけではなく「肉体」を基にして「自己の存在」を考えることも「思想」であると、「思想」の概念を拡大し、階級思想文学とともに、谷崎流の「思想」の文学も「両方とも近代日本での人間を考える上に省略できぬ重要性を持った思想の、文学における現われであった、と私は考えている。」⁽⁷⁾とプロレタリア文学と同等の地位を「肉体の問題」を描き批評した谷崎の文学に与えている。

伊藤は更に永井荷風が「谷崎潤一郎氏の作品」⁽⁸⁾で谷崎の作品の特質として見出した 1 肉体的恐怖から生ずる神秘幽玄 2 全く都会的なる事 3 文章の完全なる事——のうちの 1 の「肉体的恐怖」について、谷崎の思想の根本的形式であると思われる⁽⁸⁾として、「恐怖によって我々は自己の存在に目覚める」のであり、「刺青」の女主人公や「少年」の中の三人の少年たちが見出したような「自分の肉体の、心理の中には自分が気のつかなかった制御すべからざるものが存在していた、また発生しつつあるという怖れ」は「自分だと思ったものが実は本当の自分でなかったことの発見からくる怖れであり、真の自我の発見の怖れ」であり、この種の怖れは現代のヨーロッパやアメリの文学に多いテーマであるが（例えばサルトルやカミュの作品、古くはボッカチオの「デカメロン」、18,19 世紀の心理小説であるポオの「リージア」、ドストエフスキイの諸作品等、その後の精神分析学と第一次世界大戦後の残忍な人間像と結びつきの現実化による現代リアリズム文学の重要な領域となったもの）、こうした認識を第一次大戦後のヨーロッパ文学が日本に輸入する前に、また精神分析学が日本に紹介される前に描いたのが谷崎潤一郎である⁽¹⁰⁾と指摘している。伊藤整が谷崎は「肉体」を基にして「自己の存在」（そして他者、この世の他の存在）を考えたというのは重要な指摘で、谷崎は自らの目、耳、鼻、舌、身という五感によって感じたものを最重要視する作家であり、それこそが谷崎の耽美派たるゆえんであろう。

谷崎潤一郎は耽美派とされる⁽¹¹⁾。1908 年（明治 41）、自然主義が流行している最中、北原白秋らの脱退をきっかけとして「明星」はその百号に及ぶ歴史を閉じ、白秋らは芸術サロン「パン（牧羊）の会」を発足させ、高踏的芸術談義を行うことによって親睦関係を深めていった。彼らは墨田川河畔をセーヌ川になぞらえて、日常的写実主義とは一線を画した異国情緒、そして自然主義が芸術即人生と考えるのとは対極にある、独自の芸術至上主義を追い求めた。耽美派の拠点がここに形成された。やがて彼らは雑誌「スバル」を創刊し（1906 年（明治 42））、翌明治 43 年には永井荷風が「三田文学」を創刊したことによっ

て時代の勢力へと育てていく。

耽美派は「退廃」や「悪」の中に潜む、怪しく不思議な美の力に着目し、美は快樂の中にこそあるという信念を基本とし、人工的で都市的な情緒へと沈潜していった。自然主義と耽美主義は父と子の関係にあると中村光夫は言うが⁽¹²⁾ 支持層には大きな相違がある。封建的な「家」の桎梏に苦しんで、地方から上京した青年たちが自然主義を支えたのに対して、文明を享受する都会派が耽美派を支持した。既成道徳や因習への反逆という点では自然主義と耽美主義は共通点を持っているが、自然主義のように現実暴露にとらわれることなく、むしろ幻想的な感覺的情緒を追及したのが耽美派であった。

荷風は1903年（明治36）から5年間、アメリカとフランスに私費留学したが、帰国後は反自然主義に転じ、銀座の街並みに象徴される明治の新文明を嫌悪し、一貫して滅びゆく江戸文化を承継し続けた。荷風は大逆事件（1910年（明治43））に抗議できなかった反省から自分の芸術の品位を江戸の戯作者の地位まで引き下げたと後に（1919年（大正8））『花火』で自ら回想している。

1911年（明治44）、永井荷風が11月に「三田文学」に掲載した「谷崎潤一郎氏の作品」は谷崎を一躍、有名にした。永井は谷崎の独創性を賛美して次のように述べている。「明治時代の文壇において今日まで誰一人手を下す事の出来なかった、或は手を下そうともしなかった芸術の一方面を開拓した成功者は谷崎潤一郎氏である。語を替えて言えば、谷崎潤一郎氏は現代の群作家が誰一人持っていない特殊の素質と技能とを完全に具備している作家なのである」⁽¹³⁾。谷崎の創作活動は大略、五つの時期に区分することができる⁽¹⁴⁾。第一は耽美主義の時代。第二はモダニズムの時代。第三は「古典回帰」の時代。第四は戦争時期。第五は戦後の老熟期である。

第一の耽美主義の時代は処女作1910年（明治43）「刺青」で文壇に登場してからの明治の最後の3年間である。「麒麟」（1910年（明治43））、「信西」（1911年（明治44））、「悪魔」（1912年（明治45））などの作品がこの時期に描かれている。永井荷風の「谷崎潤一郎氏の作品」は1911年11月「三田文学」に掲載され、谷崎は一躍有名になった⁽¹⁵⁾（既述）。

第二はモダン主義の時代で、1923年（大正12）の関東大震災をはさむ大正年間のほぼ全般の時期であり、1917年（大正13）「異端者の悲しみ」などの自伝的作品が多いが、1924年（大正13）「痴人の愛」はこの時期の代表作である。谷崎は1918年（大正7）の10月から12月にかけて第一回中国旅行を行っている。また、1926年（大正15）1月から2月まで第二回中国旅行を行い、上海のみで一か月間を過ごしている。この第一回、第二回の中国旅行に触発され、谷崎は「支那趣味」の1921年（大正10）「鶴唳」などの作品を書いている。

第三は「古典回帰」の時代である。関東大震災の後、谷崎は関西に移住し、古典文学の世界に開眼し、1931年（昭和6）「吉野葛」などの傑作が生まれた。

第四は戦後期で、谷崎は1939年（昭和14）から「源氏物語」の現代語訳に着手し、1942年（昭和17）には「細雪」の執筆を開始するが、戦争中の発表はできず、完結も戦後の1948年（昭和23）であった。

第五は戦後の老熟期で、谷崎の晩年は母性思慕を描いた（昭和24～25）「少将滋幹の母」に始まり、（昭和36～37）「瘋癲老人日記」で終わる。

谷崎潤一郎という作家は東京の日本橋区蛸殻町に生まれた都会派の作家である。既述のように「退廃」や「悪」の中に潜む、妖しく不思議な美の力に着目し、美は快樂の中にこそあるという信念を基本とし、人工的で都市的な情緒へ沈潜していった耽美派の代表的な作家が1918年（大正7）、1926年（大正15）と二回の中国旅行を行ったのはモダニズムの目で再度、中国を見直して、新たな題材を得、新境地を開拓しようとした面があったことは否めないであろう。大正時代、「支那趣味」は谷崎から芥川龍之介、佐藤春夫へ伝播し、作家間で一種のブームの観を呈したが、次に、大正という時代との関係も視野に入れて、谷崎の「支那趣味」や他の作家の「支那趣味」をとらえ、「支那趣味」に関するオリエンタリズムやエキジチズムの問題を考えてみたいと思う。

三 谷崎潤一郎と「支那趣味」

大正文壇を主導していったのは前代から存続した自然主義と自然主義への反発によって生じた新しい動き一耽美派、白樺派、新思潮派（新理知派、新技巧派）一である三派であった。（自然主義が文壇を席卷していたのは1907年（明治40）から1910年（明治43）までのわずか数年間のことであった⁽¹⁶⁾。）

1910年は自然主義に翳りが見え始めた時である（既述）が、この年は大逆事件の起こった年である。荷風は大逆事件に抗議できなかった反省から自らの芸術の品位を江戸の戯作者の地位にまで引き下げた（既述）が、同時代の石川啄木は大逆事件後、「時代閉塞の現状」を執筆し、「時代閉塞の現状」が大逆事件を生んだのであり、その究極の責任は「強権」であると国家の「強権」を鋭く批判している⁽¹⁷⁾。大逆事件の同年、谷崎は「刺青」を書いているが、独自の芸術至上主義に基づいている点で大正文壇を主導していった三派に共通するものを描いたと言えよう⁽¹⁸⁾。

大正文壇のほぼ全般の時期は谷崎のモダン主義の時代であるが、一般的には大正モダニズムの時代、都市では電気・ガス・電話・道路・上下水道・学校・公園などのインフラ整備が進み、私鉄が郊外に延び、住宅地が造成され、衣服では洋服が流行し、食ではパン食

が始まり、カレーライス・コロッケ・トンカツという大正の三大洋食が広まった。文化の担い手は主として俸給生活者（サラリーマンである都市中間層）であった。

大正の大衆文化の特徴はアメリカの大衆文化と家や国家に対するコンフォーミティー（一致、順応）を基調とする伝統社会のモラルとの接ぎ木にある⁽¹⁹⁾とする考えがあるが、これに対して大正文化においてインテリを対象とした白樺派、大正教養主義の特徴は、ヨーロッパ文化と家に象徴される家父長制への反逆が結びついたところにあると言う。白樺派・大正教養主義の文学者、芸術家にとって家へのコンフォーミティを基調とする大衆文化は全く相容れないものであり、彼らはアメリカを軽蔑したが、もっとも大衆文化も白樺派・大正教養主義者も欧米文化を第一と考える点では共通しており、このことは逆に言えば、両者が朝鮮、中国など東洋の文化を鑑賞の対象として見たとしても、受容すべき対象として考えていなかったことを意味している⁽²⁰⁾。

耽美派の谷崎は白樺派・大正教養主義者のオリエンタリズムを回避し得たのであろうか。中国へのエキゾチシズムもあったであろう、新たな題材の獲得への模索もあったであろう、谷崎は1918年（大正7）と1926年（昭和元）の二回、中国旅行を行っている。

1918年（大正7）の10月から12月にかけて谷崎潤一郎は朝鮮・中国を旅行した。朝鮮から満州を経て北京へ出て、そして漢口へ、そこから揚子江を下り九江に寄って、廬山へ登り、南京から蘇州、そして上海へ行き、杭州から再び上海に戻り、日本へ帰ってくるという順序であった。中国旅行は谷崎の強い洋行願望の代替物として、また、中国的情緒を味わいたいという希望のなせる業であった⁽²¹⁾。

翌年の1919年（大正8）、谷崎は前年の中国旅行を題材にして「蘇州紀行」（2・3月）「秦淮の夜」（2月）「青磁色の女」（6月。のちに「西湖の月」と改題）「天鷲絨の夢」（11～12月）などの中国旅行のみやげの作品を多く書いている⁽²²⁾。

第一回中国旅行から約7年後の1926年（大正15）に谷崎は再度、中国旅行を行っている。この第二回目の中国旅行が「谷崎のオリエンタリズムにもとづいた中国観に大きな変更を迫り、「支那趣味」の文学を放棄するにいたらしめたと考える⁽²³⁾」のが従来の通説であった。もっとも、最近清水良典（2016）「「お伽噺」としての谷崎文学—「オリエンタリズム」批判再考⁽²⁴⁾」や山口政幸（2016）「陰翳礼讃の端緒としての「西湖の月」⁽²⁵⁾」といった、「関西移住後の円熟期の作品の萌芽となる要素が、すでに「支那趣味」の作品群に散見される」とする見方（清水 p.46）や、「西湖の月」（第一回中国旅行後に書かれたものであるが）に「陰翳礼讃」の「美学の応用」をみる考え方（山口 p.64）も提出されており（後により詳しく述べる）、西原（2003）の谷崎第二回中国旅行オリエンタリズム・「支那趣味」文学放棄論は谷崎の他の要素の連続性や萌芽を見る視点によって再検討されつつある。

谷崎の第二回中国旅行は1926年1月6日から2月19日まで行われ、上海しか谷崎は訪れていない。第二回中国旅行に触発されて(1926)「上海見聞録」(同)「上海交遊記」(1942)「きのうきょう」等の文章が書かれている。谷崎は「上海見聞録」で「支那人の風俗なども、悪く西洋かぶれがして、八年前に来た時とは大分違った印象を受けた。(中略)私は、大いに失望して帰った。西洋を知るには矢張り西洋へ行かなければ駄目、支那を知るには北京へ行かなければ駄目である。」⁽²⁶⁾と述べ、中国への失望を吐露している。また「上海交遊記」では郭沫若(、田漢)が日本の苦悩と中国の苦悩は異なり、中国の苦悩は「独立国」ではなく、「外国人が勝手にやってきて」中国に都会を作り、工場を建てるのを「見ながらどうすることも出来ないで踏み躪られて行く」ことであり、自分たちの「絶望的な、自滅するのをじーいっと待ってるような心持」は日本人には「とてもお分かりにならない」でしょうと言うのを聞き、谷崎は「両君の言説は世の更ける迄縷々として尽きない。私は一々尤もであると思った。(中略)両君の胸を暗くしている悩みそのものは、尊重しなければならないものである。」⁽²⁷⁾と述べている。西原(2003)の「谷崎のオリエンタリズムにもとづいた中国観に大きな変更を迫り」云々と言うのはこうした谷崎の体験に基づく西原(2003)は考えているようである⁽²⁸⁾。

オリエンタリズムについて西原(2003)は次のようにまとめている。①オリエンタリズムの前提として近代の植民地主義または帝国主義がある②オリエンタリズムは近代日本にも適応(筆者注:適用? 以下同じ)可能である③オリエンタリズム論は主体の客体に対する言説を明らかにするものであって、作品の文学的価値はそれとは別種のものである—これら三点を要約すれば、西原(2003)の言うオリエンタリズムとは「植民地主義あるいは帝国主義を前提とした、帝国による、被支配国並びにこれに類する地域に関する言説で、西洋のみならず日本にも適応(用?)可能な概念」⁽²⁹⁾である。

③の、「言説」と「文学的価値」を別種のものとするのは、日本の伝統的な、政治と文学の乖離観念を表象していると考えられる。西原(2003)はエドワード・サイードの(1978)『オリエンタリズム』を援用して、以上のようにオリエンタリズムを要約、定義しているが、谷崎の「支那趣味」の作品について①西洋のロマン派のエキゾチックな美術や文学、または東洋学という長期間における「オリエンタリズム」の第一の意味において「日本のオリエンタリズム」であり、②「オリエンタリズムを支配し再構成し威圧するための西洋の様式」というサイードの定義における「オリエンタリズム」の言説が豊富に含まれている⁽³⁰⁾—と言う。

西原(2003)は大正時代から盛んになった「支那趣味」を学びの対象としてではなく、「同時代の中国の習俗や文物、遺跡などに興味を持ちそのエスニックな美を楽しむこと」⁽³¹⁾

とし、上記の②の意味のサイド的定義における「オリエンタリズム」の言説が充満している⁽³²⁾と述べている。基本的に「支那趣味」について否定的であるのが西原（2003）の特徴である。

元来、「支那趣味」には①中国人の趣味②日本人の漢学の素養、文人的教養③日本人が中国のモノや事物が発する異国的雰囲気憧れ、熱中すること—の三つの意味があり、谷崎は②の意味で使用している⁽³³⁾が、③が現在の「支那趣味」の意味に最も近いもの⁽³⁴⁾であることに異論はないであろう。

川本三郎（1991）は大正の作家たちの「支那趣味」とは「文明開化、明治日本へのささやかな批判」であり、「古き良き文化への回帰という意味を持っていたと同時に“古いものを語るのが新しい、”という、いまふうにいえばレトロ趣味の要素も持っていた」もので、新しい国（アメリカ）への憧憬と古い国へのノスタルジーがないまぜになった、大正的モダニズムの一表現」だった⁽³⁵⁾と述べている。川本（1991）は別のところで「支那趣味」はまた「日清戦争に勝利した日本人の優越意識とその裏に隠された文化的コンプレックスの複雑な融合意識である」⁽³⁶⁾とし、「たとえば谷崎潤一郎が「支那料理」の素晴らしさを語る時、そこには“中国の深い食文化の歴史にはとても日本人として太刀打ちできない、”というコンプレックスと同時に、“そういう支那料理の素晴らしさが理解できるのは実は支那人ではなく、我々戦勝国の日本人なのだ、”という優越意識・傲慢も隠されている筈だ。そのコンプレックスと優越感の錯綜した感情は、たとえば、江戸情趣が残っている（と外部の人間には意識された）下町に対して特別の愛情を持った永井荷風の複雑な感情—つまり、下町に対するコンプレックスと優越感の錯綜—と通じ合うものがある。」⁽³⁷⁾と述べている。これは西原（2003）のオリエンタリズムの定義と一部、重なり合う見解である。もっとも川本（1991）は大正期の作家たちの「淡い幻想性」の背後に大正時代の物質的豊かさ、モダニズム、ロマン的な雰囲気を見出し⁽³⁸⁾大正の「支那趣味」もモダニズムの一つとしてとらえているのであり、サイド的定義における「オリエンタリズム」や西原（2003）の同種の見解に拘泥しているだけではない。

以上、見たように大正の「支那趣味」は「回帰」や「異国的雰囲気」と親和性が高い。最後に、関連する谷崎のエキゾチズムについて若干述べておきたい。野口武彦（昭和48）は谷崎のエキゾチズムの「独特の意味」として、関西は谷崎の後半生にとって故郷としての「江戸」以上に自らの精神的故郷になり、しかもなお京阪神の風土にエキゾチズムを感ずる心情を失わなかった⁽³⁹⁾ことを挙げているが、他所で「谷崎のエキゾチズムは基本的にいって未知の空間の遍歴の涯に、世界のどこかに残されているはずの時間の孤島を発見しようとする探求行であった」⁽⁴⁰⁾とも述べている。西洋ロマンチズム文学の有力な

主題であるロマンチズムは古典主義の文化的画一性、文明論上の西欧地方主義を解体させて文化的価値の多様性というロマン主義的概念を成立させるための重要な要素であった⁽⁴¹⁾、つまり「文化の相対性」を認めたが、一方でまた「文化的ナショナリズム」を主張する立場であった、すなわち「ロマン主義におけるエキゾチズムの要素、「旅」の主題は、ちょうど遠心運動がその出発点としてかならず中心を前提としているのと同様に、根本に自己同一性への志向、いわば「帰郷」のモメントを内在させているのである⁽⁴²⁾。

エキゾチズムは「外に向って拡散する自己回帰」⁽⁴³⁾であり、谷崎の西洋エキゾチズムが関西エキゾチズムと比重を交換するにあたり、重大な役割を果たしたものとして野口（昭和 48）は 1926 年（大正 15）初頭の第二回目の中国旅行⁽⁴⁴⁾を位置付ける。第二回目の中国旅行＝上海旅行で上海を「西洋かぶれした都会」（「上海交遊記」）と呼ぶ谷崎は「上海を鏡にして自国の欧風文化を写し出す一種の文明批評的視点」⁽⁴⁵⁾を持つに至り、欧陽家の年越しに招かれた際に、その家の老母になつかしい「母」のイメージを持ち、帰国後、『日本』は何處にあるかと云えば、大阪から中国に至る本土の西半部なのである（「私の見た大阪及び大阪人」という日本再発見を行い、「古典回帰」の道を歩いていく。エキゾチックな事物は「好奇心の対象」であるとともに「郷愁ノスタルジアの源泉なのであり、言いかえれば「あらゆるエキゾチズムの根底には、自己と未知の存在との根源的な同一性を探ろうとするエロティズムが横たわっているのである」⁽⁴⁶⁾と述べる野口（昭和 48）は谷崎の「西洋崇拜」も本質的にエロティックな憧憬だったのであり、「今は失われているが、かつて存在していた根源的な自己同一性、自分が自分を包みこむものと、完全に合体していた状態の回復を目指すこの志向（筆者注:エキゾチズム）が、基本的に官能的なものであることはいうまでもない。エキゾチズムがその本質においてエロティズムであるとするゆえんはここにある。」⁽⁴⁷⁾とエキゾチズムの本質を自己同一性、他者と自己の一体性に見出し、エキゾチズムはエロティズムと等価であるとしている。谷崎の「支那趣味」のエキゾチズムも官能的なもの、エロティズムへの志向性を持つというのである。

四 谷崎の「支那趣味」の作品について

次に谷崎の「支那趣味」の作品について言及してみたい。「秦淮しんわいの夜」「西湖の月」「鶴唳」を取り上げて、論じたいと思う。

「秦淮の夜」は 1919 年（大正 8）の作で、続稿原題は「南京奇望街」として（大正 8 年 2 月）「中外」（大正 8 年 3 月）「新小説」に掲載されている⁽⁴⁸⁾。

「秦淮の夜」に描かれた「支那趣味」は「遊女」である。これが谷崎のオリエンタリズムの表象の一つであることは否めない。そのエキゾチズムが本質においてエロティシ

ズムであることは小説の末尾から明瞭に見て取れる。

「花月樓、花月樓」

と私は纔かに彼女の名前を支那音で呼び続けつつ、両手の間に細長い顔を抱き挟んだ。挟んで見ると掌の中にすっぽり隠れてしまうほどな小さな愛らしい顔であった。力をこめてぎゅっと圧したらば、壊れてしまいそうな柔らかな骨組であった。大人のように整った、赤子のように生々しい目鼻立ちであると私は思った。私は急に、挟んだ顔をいつまでも放したくないような、激しい情緒の胸に突き上げてくるのを覚えた⁽⁴⁹⁾。

小谷野敦（2006）は当時の谷崎が「新しい創作の源を求めてしなやせいにこつてみただけ」で、その「支那趣味」も「通り一遍の異国趣味に終わった感がある」と谷崎の「支那趣味」について否定的であるが、紀行とも小説ともつかない「秦淮の夜」だけは秀作であると評価し、「谷崎は荷風を崇拜していたが、売春の情景を描いたものは、これくらいしかない。そして全体に、女を買うことへの谷崎の逡巡が見出される」⁽⁵⁰⁾と露骨な言い様である。

清水良典（2016）は谷崎の「支那趣味」についての「オリエンタリズム」批判を再考し、（芥川龍之介とは異なり）現実にあえて目を閉じ、美しい世界を守護しようとした谷崎文学の本質的な世界観が胚胎していた⁽⁵¹⁾とし、「支那趣味」の作品には、関西移住後の円熟期の作品の萌芽となる要素が散見されるとしている。例えば「秦淮の夜」には、のちの絶頂期の谷崎の美学を形成した「陰翳」「闇」の発見が見出せる⁽⁵²⁾とする。秦淮の闇は当時の「革命騒ぎ」によって市街にあふれている「兵隊」から「芸者達」（＝遊女達）を遠ざけ、「母を恋ふる記」で「漂^{ひょうみょう}渺たる月の光」の下をさまよう「私」が見つけた母の白い顔は秦淮の路地奥の女と見え方がそっくりで、秦淮での「陰翳」と「闇」の経験が谷崎の感受性に深く刻印され、「その「闇」という秘策が谷崎の「お伽話」を包み込み、後の「蓼喰う虫」（改造社1929年）のお久をはじめ「盲目物語」「春琴抄」「陰翳礼讃」で最高度に発揮されていたことは誰しも認めざるを得ないだろう」⁽⁵³⁾と清水（2016）は谷崎の「支那趣味」の作品である「秦淮の夜」をオリエンタリズム的批判ではなく、後の作品との連続性で見、評価して、その「陰翳」と「闇」の発見に注目している。

「西湖の月」は1919年（大正8）、「秦淮の夜」の後に、最初「青磁色の女」（6月「改造」）として掲載された後、「西湖の月」と改題された作品である。「西湖の月」の「支那趣味」は中国古典の世界であり、それを眼前の対象に置き換えての再現意図が看取される。

具体的に言うと、杭州の西湖で目にしたと思われる（大正7年の第一回中国旅行で訪れている）風景をもとにして、西湖で死んだ六朝の名妓蘇小々を悼んだ死のイメージを重ねて、上海から杭州行きの列車の中で見かけ、ホテルの隣室に泊まっていた若い美女の西湖での自殺死を描いている⁽⁵⁴⁾。

さらに中国文人の美食主義、快樂主義という「支那趣味」へのオリエンタリズム的言説も以下のように述べられている。「蘇東坡というと何だかひどく脱俗超凡の詩人のように聞こえるけれど、あの濃厚な肉（筆者注：東坡肉）を肴に酒を飲みながら、朝な夕なお気に入りの妾の朝雲を相手に舟遊びをしていたのかと思うと、中国人の趣味というものが大概わかるような心理がする」⁽⁵⁵⁾。

西原（2003）は「西湖の月」という「小説の主眼はむしろ美しい西湖の風景等の描写にある」⁽⁵⁶⁾と述べているが、山口政幸（2016）はそれに対して、陰翳礼讃の端緒として「西湖の月」をとらえている。オリエンタリズム以外の要素を見出そうとする視点は清水良典（2016）と通底するものがある。

まず山口政幸（2016）は谷崎が昼の西湖を描かなかったことに注目し、更に著名すぎる西湖の名所旧跡を切り捨てることで物語世界を作り上げた、いや現実の「西湖」からいったんは逃れ、距離をとる必要があった⁽⁵⁷⁾と言う。

芥川龍之介によって直写された「西湖」の俗化は谷崎にとって織り込み済みで、芥川のような直写を前提のように排除する谷崎が採った方法は「明らかに昭和期の彼の文学的営為を支えることになる「陰翳礼讃」の美学の応用であり、その理論化されない以前の端緒としてのオペレーションと考えられる」⁽⁵⁸⁾と言うのは山口政幸（2016）が「西湖」俗化からさせた視点で醜、マイナスを美、プラスとすることを「陰翳礼讃」の美学の応用と呼び、その端緒を谷崎の「西湖の中」に見出しているからであろう。

更に、山口政幸（2016）が「なおかつ、それまでの中国文人が描くことのなかった西湖の「水」を表象することで、彼なりに過去の文人たちへの隠されたオマージュをささげたというのが、現時点で論者が広げて見せたい方向性に他ならない」⁽⁵⁹⁾とするのもオリエンタリズム以外の要素を「西湖の月」が持っていることを論究することへの志向性の表れであろう。

「鶴唳」は1921年（大正10）7月、「中央公論」に発表された谷崎の「支那趣味」の作品である。この作品の「支那趣味」は中国への「憧れ」「恐怖」、そして中国の「隠遁思想」として表れている。

「鶴唳」の登場人物である靖之介は「自分は支那の文明と伝統の中で生き、そこで死にたい」⁽⁶⁰⁾と言い、日本を捨てて、中国へ行く。そこには中国への「憧れ」としての「支那

趣味」が昂じた姿が述べられている。谷崎の西洋エキゾチシズムは中国エキゾチシズムへ、そしてやがて日本回帰へと移行した。靖之助の中国への「憧れ」は持続し続けるのかと思いきや、彼は突然、日本に帰ってくる。靖之助は鶴と女性を伴っていて「自分が憧れる「支那」のすべては今では此の女と鶴にあるのだ」⁽⁶¹⁾ と言う。

中国への「恐怖」は谷崎の(1922)「支那趣味と云うこと」でも「芸術上の勇猛心を銷磨させ、創作的熱情を麻痺させるような気がする」⁽⁶²⁾ 中国の文物に「一種の怖れ」を抱いていることが述べられているが、林茜茜(2016)は『鶴唳』は鶴の鳴き声の意味であるが、漢語「風声鶴唳」の影響で、『鶴唳』は些細なことにもおじけづくこと」のたとえとなっている。『鶴唳』は一見、中国への極端な憧れを描く作品のように見えるが、そのタイトルに込められているように、中国文化への恐怖も作品の根底に流れているのだと思われる。⁽⁶³⁾ と中国文化への谷崎の「恐怖」を指摘している。

「鶴唳」の最後の「支那趣味」として中国の「隠逸思想」がある。他の作品の「支那趣味」が古典、神秘、官能などのオリエンタリズム的なものであるのに対して、「鶴唳」の「支那趣味」は具体的、直感的なものではなく「意識の内部のもの」である、つまり「形而下から形而上への転換」が見られ、中国哲学の「隠逸」思想というテーマが終始一貫して存在し、それは谷崎の芸術至上主義(やその現実との葛藤)と呼応したものである⁽⁶⁴⁾ と銭曉波(2016)は大略、述べている。

隠逸思想には①専制政治への対抗、逃避によって自ら身を隠し、世間と隔離する②清い自然を愛し、濁世を離れ、隠居生活を求める③俗世の煩惱、雑念から逃れ、孤独な生活を求め現実逃避する—と言ったいくつかのパターンがあるが、隠遁者は「心の潔癖症を患い、世間と融合することを拒み、自ら魂の解放を求める修道者」⁽⁶⁵⁾ である。「鶴唳」の星岡靖之助は「隠逸」思想を一貫して志向して「鎖瀾閣」で中国婦人と暮らし、生活環境を中国一色にして、自ら小さな理想郷を構築するが、これもひっきょう、現実との矛盾や心の葛藤を表しているものであり、谷崎の心情の星岡靖之助への移植であったと銭曉波(2016)は言う⁽⁶⁶⁾。小説の末尾は以下のようなものである。「照子(筆者注: 靖之助の実の子)は(中略)、日本語で「お母さんの敵」と云って、彼女(筆者注: 中国婦人)の喉へ、ブツリと短刀を突き刺しました。／殺される時の支那の女の悲鳴がそれがまた、鶴の唳き声にそっくりだったと云う話です」⁽⁶⁷⁾。理想郷は現実によって復讐されたのである。

五 結語

以上、谷崎潤一郎と「支那趣味」について考究してきたが、谷崎がオリエンタリズムを持ったのは「帝国」としての日本が植民地主義を採用したことによる必然的結果であるが、

既にその位置だけに留まることに異議を申し立てる清水良典氏や山口政幸氏の論考も出てきている。「支那趣味」についてもオリエンタリズム的なものから谷崎の耽美派としての特徴からとも考えられる（＝芸術至上主義とその現実との葛藤からとも考えられる）中国伝統の隠逸思想と親和性の高いものまで多様である。このことは日本の中国観が「尊崇」「脅威」「小中華主義」と多様である⁽⁶⁸⁾ ことと並行関係にあると思われる。谷崎の「支那趣味」からそうした比較文化的な「傾向」を見出したことを最後に述べて本稿を終わりたいと思う。

〔注〕

- (1) 藤田昌志 (2016) a p.10
- (2) 鈴木修二 (昭和 53) p.18
- (3) 中村光夫 (2015) p.155
- (4) 中村光夫 (2015) p.142
- (5) 伊藤整 (1953) 谷崎昭男他著 (1991) 所収 p.57
- (6) 伊藤整 (1953) 谷崎昭男他著 (1991) 所収 p.57
- (7) 伊藤整 (1953) 谷崎昭男他著 (1991) 所収 p.58
- (8) 大正 2 年 8 月 永井壮吉 (昭和 56) 所収 po.275-285
- (9) 伊藤整 (1953) 谷崎昭男他著 (1991) 所収 p.59
- (10) 伊藤整 (1953) 谷崎昭男他著 (1991) 所収 p.60
- (11) 以下の耽美派の記述は安藤宏 (2001) 8 小説—大正文壇の小説 野山嘉正・安藤宏編 (2001) 放送教育教材 『改訂版 近代の日本文学』放送大学教育振興会 発行 所収 pp.119-123 による。
- (12) 中村光夫 (2015) p.73
- (13) 永井壮吉 (昭和 46) 所収 p.276
- (14) 以下の記述は主として野口武彦 (2005) 畑有三・山田有策編 (2005) 所収 pp.25-34 による。
- (15) 谷崎の評伝、年代記は千葉俊二 (2002) 千葉俊二編 (2002) 所収 を主な資料とした。
- (16) 安藤宏 (2001) 野山嘉正・安藤宏編 (2001) 所収 p.119
- (17) 藤田昌志 (2016) a p.131
- (18) 安藤宏 (2001) 野山嘉正・安藤宏編 (2001) 所収 p.119
- (19) 竹村民郎 (2004) p.126
- (20) 竹村民郎 (2004) pp.126-127 藤田昌志 (2016) b 三重大学国際交流センター (2016) 所収 p.115

- (21) 西原大輔 (2003) p.147
- (22) 千葉俊二 (2002) 「編年体・評伝谷崎潤一郎」 千葉俊二編 (2002) 所収 p.152
- (23) 西原大輔 (2003) p.213
- (24) 千葉俊二・銭暁波編 (2016) 所収 pp.46-54
- (25) 千葉俊二・銭暁波編 (2016) 所収 pp.55-64
- (26) 「上海見聞録」 谷崎潤一郎 (昭和 42) 所収 p.559
- (27) 「上海交遊記」 谷崎潤一郎 (昭和 42) 所収 pp.578-580
- (28) 西原 (2003) p.255
- (29) 西原 (2003) pp.18-21
- (30) 西原 (2003) pp.14-16
- (31) 西原 (2003) p.16
- (32) 西原 (2003) p.16
- (33) 谷崎潤一郎 (大正 11) 「支那趣味と云うこと」 谷崎潤一郎 (昭和 43) 第二十二卷 所収
- (34) 西原 (2003) p.30
- (35) 川本三郎 (1991) p.176、 p.182
- (36) 川本三郎 (1991) p.181
- (37) 川本三郎 (1991) pp.181-182
- (38) 川本三郎 (1991) p.315
- (39) 野口武彦 (昭和 48) 第四章 故郷としての異郷—関西移住と「古典回帰」をめぐって 野口武彦 (昭和 48) 所収 p.136
- (40) 野口武彦 (昭和 48) p.163
- (41) 野口武彦 (昭和 48) p.143
- (42) 野口武彦 (昭和 48) p.144
- (43) 野口武彦 (昭和 48) p.145
- (44) 野口武彦 (昭和 48) p.139
- (45) 野口武彦 (昭和 48) p.140
- (46) 野口武彦 (昭和 48) p.143
- (47) 野口武彦 (昭和 48) p.145
- (48) 千葉俊二編 (2002) p.91
- (49) 谷崎潤一郎 (昭和 42) 第六卷 p.270
- (50) 小谷野敦 (2006) p.116
- (51) 清水良典 (2016) 千葉俊二・銭暁波編 (2016) 所収 p.46

- (52) 清水良典 (2016) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収 p.51
- (53) 清水良典 (2016) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収 p.52
- (54) (2002) 谷崎潤一郎全作品事典 千葉俊二編 (2002) 所収 pp.92-93
- (55) 谷崎潤一郎 (昭和 42) 第六卷 pp.340-341
- (56) 西原 (2003) p.203
- (57) 山口政幸 (2016) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収 pp.63-64
- (58) 山口政幸 (2016) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収 p.64
- (59) 山口政幸 (2016) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収 p.64
- (60) 谷崎潤一郎 (昭和 42) 第七卷 p.396
- (61) 谷崎潤一郎 (昭和 42) 第七卷 p.398
- (62) 谷崎潤一郎 (昭和 42) 第二十二卷 p.122
- (63) 林茜茜 (2016) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収 p.71
- (64) 銭曉波 (2016) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収 pp.73-83
- (65) 銭曉波 (2016) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収 p.81
- (66) 銭曉波 (2016) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収 pp.81-82
- (67) 谷崎潤一郎 (昭和 42) 第七卷 p.402
- (68) 藤田昌志 (2015)

【引用文献・参考文献】

- (1) 藤田昌志 (2016) a 『明治・大正の日本論・中国論—比較文化学的研究—』 勉誠出版
- (2) 鈴木修二 (昭和 53) 『中国文学と日本文学』 東京書籍
- (3) 中村光夫 (2015) 『谷崎潤一郎論』 講談社 講談社文庫
- (4) 伊藤整 (1953) 「谷崎潤一郎の芸術と思想」 谷崎昭男他著 (1991) 所収
- (5) 谷崎昭男他著 (1991) 『群像 日本の作家 80 谷崎潤一郎』 小学館
- (6) 伊藤整 (大正 2 年 8 月) 「谷崎潤一郎氏の作品」 永井壮吉 (昭和 56) 所収
- (7) 永井壮吉 (昭和 56) 『荷風随筆一』 岩波書店
- (8) 安藤宏 (2001) 8 小説—大正文壇の小説 野山嘉正・安藤宏編 (2001) 所収
- (9) 野山嘉正・安藤宏編 (2001) 放送教育教材 『改訂版 近代の日本文学』 放送大学教育振興会 発行
- (10) 野口武彦 (2005) 「第二節 谷崎潤一郎」 畑有三・山田有策編 (2005) 所収 pp.25-34 による。
- (11) 千葉俊二 (2002) 「編年体・評伝谷崎潤一郎」 千葉俊二編 (2002) 所収

- (12) 千葉俊二編 (2002) 『谷崎潤一郎必携』 學燈社
- (13) 畑有三・山田有策編 (2005) 『日本文芸史—表現の流れ 第六卷 近代Ⅱ』 河出書房新社
- (14) 竹村民郎 (2004) 『大正文化 帝国のユートピア 世界史の転換期と大衆消費社会の形成』 三元社
- (15) 藤田昌志 (2016) b 「大正時代について—比較文化学的考察—」 三重大学国際交流センター (2016) 所収
- (16) 三重大学国際交流センター (2016) 『三重大学国際交流センター 紀要 第11号』
- (17) 西原大輔 (2003) 『谷崎潤一郎とオリエンタリズム 大正日本の中国幻想』 中央公論新社 中公叢書
- (18) 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 『谷崎潤一郎 中国体験と物語の力』 勉誠出版
- (19) 谷崎潤一郎 (昭和42) 『谷崎潤一郎全集』 第十卷 中央公論社
- (20) 谷崎潤一郎 (大正11) 「支那趣味と云うこと」 谷崎潤一郎 (昭和43) 第二十二卷所収
- (21) 谷崎潤一郎 (昭和43) 『谷崎潤一郎全集』 第二十二卷 中央公論社
- (22) 川本三郎 (1991) 『大正幻影』 筑摩書房 筑摩文庫 を使用した。
- (23) 野口武彦 (昭和48) 第四章 故郷としての異郷—関西移住と「古典回帰」をめぐって 野口武彦 (昭和48) 所収
- (24) 野口武彦 (昭和48) 『谷崎潤一郎論』 中央公論社
- (25) 千葉俊二編 (2002) 「谷崎潤一郎辞典」 千葉俊二編 (2002) 所収
- (26) 千葉俊二編 (2002) 『谷崎潤一郎必携』 學燈社
- (27) 谷崎潤一郎 (昭和42) 『谷崎潤一郎全集』 第六卷 中央公論社
- (28) 小谷野敦 (2006) 『谷崎潤一郎伝—堂々たる人生』 中央公論社
- (29) 清水良典 (2016) 「「お伽噺」としての谷崎文学—「オリエンタリズム」批判再考」 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収
- (30) (2002) 谷崎潤一郎全作品事典 千葉俊二編 (2002) 所収
- (31) 谷崎潤一郎 (昭和42) 『谷崎潤一郎全集』 第七卷 中央公論社
- (32) 林茜茜 (2016) 「十年一覚揚州夢—谷崎潤一郎『鶴唳』論」
- (33) 銭曉波 (2016) 「「隠逸思想」に隠れる分身の物語—『鶴唳』論」 千葉俊二・銭曉波編 (2016) 所収
- (34) 藤田昌志 (2015) 『日本の中国観Ⅱ—比較文化学的考察—』 晃洋書房

谷崎の文章等は基本的に新字体、新仮名遣いにし、適宜、振り仮名を補った。(昭和41-45) 『谷崎潤一郎全集』 中央公論社を使用した。

研究論文

フィラー的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」のインタビュー談話における出現率について

百瀬 みのり

Frequency of Fillers *de*, *anoo*, *ee*, *maa*, on Spoken in Television Interviews

MOMOSE Minori

〈Abstract〉

This paper explains how the Japanese fillers *de*, *anoo*, *ee*, and *maa*, respectively, and shows their frequency in sentences spoken in television interviews.

The following three observations are made:

Firstly, the Japanese fillers are constituted conjunctives, demonstratives, interjections, and adverbs systems, and they are universal from the 1960s to the 2010s.

Secondly, the foams top 3 about the frequency of each system covers top 70% or more.

Thirdly, I recommended studying the conversation guidance including the fillers *de*, *sonoo*, *ee*, *aa* and *maa* on Japanese language education.

キーワード：フィラー、インタビュー資料、出現率、会話モデル、会話練習

1. はじめに

本論は、フィラー的用法を持つ「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」の、インタビュー談話における出現率について考察し、その結果から日本語教育の会話指導に提言を行うことを目的とするものである。

フィラーについては、「話そうとして、ことばを探したり、会話の順をとるために声出しをししたり（略）また、一時的に文を述べることを中断してしまう」ような「そうしたときに、「あう」とか「えーと」というようなことばを発する。これを「言いよどみ」（フィラー filler）と呼ぶ（森山，2005，p.188）。」と、本論では考えることとする。本論ではインタビュー談話を資料としてそこに現れるフィラー的用法を持つことばについて調査を行い、それらの出自別に頻出する形式を確認したところ、その出自が接続詞、指示詞、感動詞、副詞であるフィラー的用法を持つ形式については、頻出する形式の上位3位までの形式によって出自別の出現率の70%以上をカバーしていることが分かった。そこでこれらについて資料中の用例を用いて確認を行い、その結果を日本語教育の会話指導への提言と

することを試みたい。

なお、本論中の用例は、テレビのインタビュー番組の対話音声をその採集資料とするものである。資料については本論では「インタビュー資料」とし、資料の内容については論末に挙げる。このインタビュー資料については、NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル 2017 年度第 2 回閲覧採択課題「NHK インタビュー番組中の談話に見られるフィラーのはたらきをもつ接続詞について～その発生の経緯、種類、機能、表現効果から戦後の日本語談話の変遷を考える～」の一部を使用した。

2. 先行研究と問題の所在

まず、フィラーの研究史を確認する。フィラーの研究の歴史は三つの時期に分けて考えることができる。

初期の 1930 年代から 40 年代にはフィラーを指す特段の呼称はなく、それを品詞名で呼んでいた (山田, 1908, p.128-136、橋本, 1948, p.56-67)。この時期はフィラーの機能がいまだ注目されていなかったことを示唆していると思われる。

次に、50 年代から 80 年代初頭にかけてフィラーの呼称が現れ出した時期が到来する。しかしこの時にはまだフィラーを「知的な命題を構成するものではな」(小出, 1983, p.83) いと、語間の場つなぎに用いられるもの (伊佐早, 1953、遠藤, 1953、塩沢, 1979、小出 1983) ととらえていた。

そして、80 年代以降にフィラーは言語研究の場でその役割を積極的に認識されるようになる。メイナード (1992) はフィラーの会話管理上の意義について述べた (メイナード, 1992, p.117)。山根 (2002) はフィラーの機能を「話し手の情報処理能力を表出する機能」、「テキスト構成に関わる機能」、「対人関係に関わる機能」の三種に分けて考察した (山根, 2002, p.220)。この 80 年代以降の時期から、フィラーは単なる「つなぎのことば」から「談話構成に関わる機能を持つ談話標識」として認められていく。本論でもこの考えを踏襲し、フィラーを談話構成に関与する要素として積極的に捉えていくこととしたい。

次に本論で考察するフィラー的用法を持つ形式について扱った先行研究を、形式の出自別に見ていく。談話中でフィラー的用法をもってはたらく接続詞「で」に注目した先行研究には、平川 (1991)、石黒 (2010) などがある。これらはいずれも大学の講義の談話を資料としており、そこでは接続詞の縮約形、特に「で」の使用率が高いこと (平川, 1991, p.99)、「で」が講義で使用される接続表現中で圧倒的に多く、全体の 44.7% を占める」こと (石黒, 2010, p.140-143) が述べられている。

談話中でフィラー的用法をもってはたらく指示詞の「あの (一)」、「その (一)」につい

フィラー的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」のインタビュー談話における出現率については小出(2009)、大工原(2008)などが扱っている。小出は、「「そのー」は「談話参加者と談話内容の領域との関係表示」、「あのー」は「コミュニケーションの開始、談話ステップの移行、談話形成に関する対人的調整」を表す(小出, 2006, p.24-25)と述べ、大工原は、金水・田窪(1992)が述べる談話管理理論を踏襲した上で、「「あの(ー)」は直接経験領域内の情報の参照に、「その(ー)」は間接経験領域内の情報の参照に、それぞれ対応している。具体的に言えば、「あの(ー)」は、(略)おおむね、「自分の意図や気持ちを十分にふまえて言語形式を製作する」(略)。一方、「その(ー)」は、(略)おおむね、「言語的文脈を十分にふまえて言語形式を製作する」という行動に対応する(大工原, 2008, p.55)。」と、その談話内の機能についての整理を行った。

また、フィラー的用法の指示詞「あの(ー)」とフィラー的用法の感動詞「ええと」について定延・田窪(1995)は、「「ええと」「あの(ー)」は、話し手が何らかの心的操作をおこなっている間に発話される心的操作標識である」とした上で、「「ええと」は話し手が心的操作のために聞き手とのインターフェイスを一時遮断する宣言として働く」とし、「「あの(ー)」は、話し手が聞き手とのインターフェイスを遮断するというよりも、むしろ継続・保持しようとしている宣言として働く」とその差異を述べる(定延, 田窪, 1995, p.74-79)。また、さらにこれを発展させて田窪・金水(1997)は「感動詞・応答詞の類は、心的な情報処理の過程が表情として声に現れたものと言える。」とし、その上で、「「ええと」は基本的には、話し手が知識の検索或いは知識を用いた演算に入る時、あるいは、すでに入っている時に用いられる。つまり、演算領域を確保するために集中したり、聞き手とのインターフェイスを一時的に断絶する際に用いられる。これに対して、「あのー」は、基本的には話し手が聞き手に向けての適切な表現形式(モノの名前等も含む)の検索/作成に入っている時に用いられる。したがって聞き手を必ず予定しひとりごとには現れない」(田窪, 金水, 1997, p.257-275)とまとめる。

また、フィラー的用法をもってはたらく副詞「ま(ー)」について魏(2015)は、「統語的には「ま(ー)」の前の要素が独立性の高い場合に、談話的には「ま(ー)」の前の要素が談話運営上発話者に有利になるように機能する場合に、「ま(ー)」に対偶差が反映される」(魏, 2015, p.75)とした。

これらの先行研究はいずれも、教室での談話のような、限られた空間における談話を対象としていたり(平川, 1991)、(石黒, 2010)、形式は異なるが用法が類似しているフィラーどうしの差異を理論として述べるものであり(定延, 田窪, 1995)、(田窪, 金水, 1997)、(魏 2015)、広く対人的な談話を対象としてそこに出現するフィラーについて、その出自の差異別に統計的な考察を行ったものではない。そこで本論ではインタビュー談話に出現

するフィラー的用法を持つ形式を、その出自の差異別に統計的に考察してその出現率を示した上で、出自別に出現頻度が高い形式を示し、その上位 3 位までの形式で出自別のフィラー的用法を持つ形式の 70%以上を占めることを述べ、先行研究を補う。さらにこの結果を日本語教育に還元して、日本語会話教材のフィラー指導に対しての提言を行うことを目指したい。

3. インタビュー番組でのフィラー的用法の出現状況

3.1. 全フィラー的用法中における品詞別フィラー的用法

ここではまず、本論でフィラー的用法をもって文中で機能していると考えられる語を提示する。具体的には、I. 統語的条件、II. 第三者による認定の二段階の選抜を設け、各段階の選抜の条件を満たした形式のみをフィラー的用法をもってはたらく形式として認めることとした。

I. については、本来の品詞としての統語的条件とは異なる位置に置かれ、それが命題的・構文的意味を有していない形式であるとき、それをフィラーとするものである。例を示す。() 内の番号については論末に挙げた資料番号を表す。

I. 統語的条件による選抜

〈接続詞かフィラーか〉

- ・「その時、雨が降ってきた。で、傘をさして、」(⑥)

→上記文の「で」は文頭に置かれ接続詞として機能していると考えられるため、これを接続詞とする。

- ・「僕だって、で、それからいろいろあって、で、どうしようもなかったから。」(③)

→上記文の「で」は文中に置かれて接続詞としてではなく発話をつなぐ形式として機能していると考えられるため、これをフィラーとする。

〈指示詞かフィラーか〉

- ・「あの頃は、まだ子どもも小さかったのね、」(①)

→上記文の「あの」は、指示詞「あの」に名詞「頃」が後続しており、「あの」が名詞の連体修飾語として機能していると考えられるため、これを指示詞とする。

- ・「あの、僕としては、昼間から仕事はしないし…。」(⑨)

→上記文の「あの」は、「あの」に人称代名詞「僕」が後続しているが、この「あの」は人称代名詞「僕」の連体修飾語として機能していないため、これをフィラーとする。

フィラー的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」のインタビュー談話における出現率について

〈感動詞かフィラーか〉

- ・「えー、それはないですよ。」(⑪)

→上記文の「えー」は、文の命題から外れて独立語として機能していると考えられるため、これを感動詞とする。

- ・「そこへ、えー、いわゆる、心臓カテーテル、えー、いわゆる『心カテ』を」(⑫)

→上記文の「えー」は独立語としてではなく発話をつなぐことばとして機能していると考えられるため、これをフィラーとする。

〈副詞かフィラーか〉

- ・「まーいいやって思って、それで」(⑬)

→上記文の「まー」は、後続語の「いい」の連用修飾語として機能していると考えられるため、これを副詞とする。

- ・「こういうところは、まー、私の、まー、性分、性分ですね。」(⑭)

→上記文の「まー」は、後続語の「私の」、「性分」の連用修飾語としてではなく発話をつなぐ形式として機能していると考えられるため、これをフィラーとする。

〈その他〉

- ・「その時、「あんた、まだ若いんだからいいさ、いいさ。」って言うてくれて。」(⑮)

→上記文の「あんた」は、文の主語として機能していると考えられるため、これを人称代名詞とする。

- ・「そしたら祖母が「だって、あんた、そりゃ、あんた、うどんだもの。」って。」(⑯)

→上記文の「あんた」は、文の主語としてではなく、発話をつなぐ形式として機能していると考えられるため、これをフィラーとする。

Ⅱ. 第三者による認定

インタビュー資料の元であるインタビュー番組を文字起こした原稿について、6名の男女(男性3名、女性3名、いずれも20~50代の成人。東京都23区内出生者)に「この語がなくても文意が分かる箇所に印を付けて」と依頼し、6名の印が重複したものをフィラーとした。

以上、Ⅰ.とⅡ.の二段階の選抜を設け、各段階の選抜の条件を満たした形式のみをフィラー的用法をもってはたらくことばとして本論では認めることとした。

上記のようにして選抜した、本論でフィラー的用法を持つとして考える語例を挙げる。

ここでは各フィラー的用法をその品詞から、接続詞系、指示詞系、感動詞系、副詞系、その他として分類して示す (中根, 2002, p.76) (石黒, 2010, p.141-142)。

●接続詞系フィラー的用法を持つ語

「で (ー)」、「だから」、「それから」、「やっぱり」、「ですから」、「やはり」、「そして」、「ほいで」、「それで」、「そいで」、「だけど」、「じゃ (ー)」、「ほれから」、「ほんで」、「すると」、「そうすると」、「あとは」、「なので」、「でも」、「でもね」、

●指示詞系フィラー的用法を持つ語

「あの (ー)」、「その (ー)」、「この (ー)」、「なんか」、

●感動詞系フィラー的用法を持つ語

「あ (ー)」、「い (ー)」、「う (ー)」、「え (ー)」、「お (ー)」、「うーん」、「うーんと」、「えーと」、「えーとですねえ」、「やあ」、「いや (ー)」、「ね (ー)」、「ん (ー)」、

●副詞系フィラー的用法を持つ語

「ま (ー)」、「もう」、

●その他

「あなた」、「あんた」、

なお、上記の中の「●その他」に分類された「あなた」、「あんた」については用例数が少ないため (全 2 例)、本論では考察の対象とはしない。

(表 1) に資料中に見られた品詞別フィラー的用法のことばの出現数を示す。

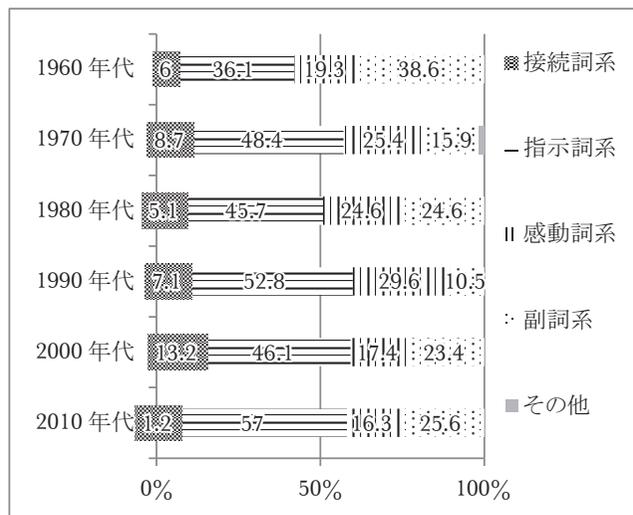
(表 1) は縦に年代別、横に系統別のフィラー的用法の出現数を表す。本論で資料としたインタビュー番組の談話は、話し手と聞き手が固定しておりターンテイキングがない場面での対話、40 分間の部分を各番組使用した。この部分の総文数は 5021 文である。三資料ずつの区切りは①～③が 1960 年代、④～⑥が 1970 年代、⑦～⑨が 1980 年代、⑩～⑫が 1990 年代、⑬～⑮が 2000 年代、⑯～⑲が 2010 年代の資料である。(表 1) を元に全フィラー的用法における品詞別フィラー的用法の比率を、年代別にグラフで示す。

(グラフ 1) より、1960～2010 年代のインタビュー談話におけるフィラー的用法は総じて、接続詞系が 5.2～12.1%、指示詞系が 36.4～53.3%、感動詞系が 15.2～29.6%、副詞系が 10.5～39.0%と、全体を 100 と見ると、接続詞系 7.3、指示詞系 47.4、感動詞系 22.1、副詞系 23.0 の比率を示していると考えられる。これは今回資料とした 1960～2010 年代の

フィラー的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」のインタビュー談話における出現率について

(表1) <品詞別フィラー的用法の形式の出現数>

資料年代	資料種類	接続詞系	指示詞系	感動詞系	副詞系	他	計
1960年代	①	2	13	17	20	0	52
	②	2	17	6	10	0	35
	③	10	54	22	60	0	146
計		14	84	45	90	0	233
1970年代	④	1	2	3	0	0	6
	⑤	4	24	16	8	2	54
	⑥	6	35	13	12	0	66
計		11	61	32	20	2	126
1980年代	⑦	6	33	22	12	0	73
	⑧	2	23	15	23	0	63
	⑨	1	24	6	8	0	39
計		9	80	43	43	0	175
1990年代	⑩	7	50	39	10	0	106
	⑪	7	37	4	4	0	52
	⑫	9	84	53	20	0	166
計		23	171	96	34	0	324
2000年代	⑬	3	10	7	8	0	28
	⑭	7	40	20	21	0	88
	⑮	12	27	2	10	0	51
計		22	77	29	39	0	167
2010年代	⑯	0	11	0	1	0	12
	⑰	1	12	3	6	0	22
	⑱	0	26	11	15	0	52
計		1	49	14	22	0	86
品詞別合計		80	522	259	248	2	1111



(グラフ1) <全フィラー的用法における系統別フィラー的用法の比率>
 ※数値は%を表す。(四捨五入の調整のため、合計は100.0%ではない。)

間大きく変化せず、戦後の日本語インタビュー番組でのフィラー的用法の系統について普遍的な面を表していると思われる。

これより、日本語インタビュー番組でフィラー的用法を以て機能するのは接続詞系、指示詞系、感動詞系、副詞系の語、特に指示詞系、感動詞系、副詞系の語が中心であることが、戦後のインタビュー談話におけるフィラー的用法使用の一つの型であると見て良いかと考えられる。

3. 2. 各系統別に見た、高出現数のフィラー的用法

ここでは (表 1)、(グラフ 1) を基に、各系統別の、高出現数のフィラー的用法を見る。まず、各系統別に出現したフィラー的用法の形式の数値を (表 2)～(表 5) に示す。表中の各フィラー的用法の前に付した丸囲みの数字は出現数の順位を表す。さらに、(表 2)～(表 5) を元に高出現数のフィラー的用法の形式を系統別に (グラフ 2) に示す。

〈各系統別に見た、高出現数のフィラー的用法の形式の数値〉

(表 2) [接続詞系]

年代 \ フィラー	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計
①で	6	5	2	21	11	1	46
②それから	1	4	1	1	0	0	7
③だから	1	1	1	0	2	0	5
③やはり	0	0	3	1	1	0	5
④やっぱり	0	0	0	0	4	0	4
⑤そいで	2	1	0	0	0	0	3
⑥ほいで	2	0	0	0	0	0	2
⑦そして	0	0	1	0	0	0	1
⑦それで	0	0	0	0	1	0	1
⑦だけど	0	0	1	0	0	0	1
⑦じゃ (一)	0	0	0	0	1	0	1
⑦ほれから	1	0	0	0	0	0	1
⑦ほんで	1	0	0	0	0	0	1
⑦そうすると	0	0	0	0	1	0	1
⑧あとは	0	0	0	0	1	0	1
計	14	11	9	23	22	1	80

フィラー的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」のインタビュー談話における出現率について

(表3) [指示詞系]

年代 \ フィラー	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計
①あの(ー)	53	36	40	137	39	32	337
②その(ー)	21	22	37	34	27	10	151
③この(ー)	10	1	1	0	7	0	19
④なんか	0	2	2	0	4	7	15
計	84	61	80	171	77	49	522

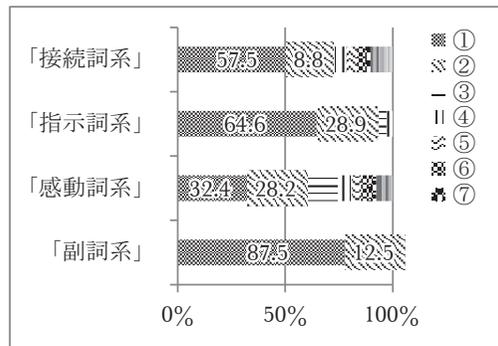
(表4) [感動詞系]

年代 \ フィラー	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計
①え(ー)	12	9	25	32	6	0	84
②あ(ー)	11	3	5	40	9	5	73
③お(ー)	7	3	4	18	4	0	36
④うーん	3	7	3	1	1	2	17
⑤ん(ー)	1	5	1	2	2	0	11
⑥う(ー)	5	0	2	1	1	0	9
⑥ね(ー)	4	1	1	0	2	1	9
⑦やあ	1	2	1	0	3	0	7
⑧い(ー)	1	1	1	0	0	1	4
⑧いや(ー)	0	1	0	0	1	2	4
⑨えーと	0	0	0	0	0	3	3
⑩えーとですねえ	0	0	0	1	0	0	1
⑪うーんと	0	0	0	1	0	0	1
計	45	32	43	96	29	14	259

(表5) [副詞系]

年代 \ フィラー	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計
①ま(ー)	74	20	37	33	35	18	217
②も(ー)	16	0	6	1	4	4	31
計	99	20	43	34	39	22	248

(グラフ2)によれば、接続詞系では「で」57.5%、指示詞系では「あの(ー)」64.6%、感動詞系では「え(ー)」32.4%、副詞系では「ま(ー)」87.5%が、系統別に見た際に最高出現数を示すフィラー的用法のことばであると言える。さらに、フィラー的用法の形式の中で出現率が高いもののうち、上位3位を系統別に(表6)に示す。グラフ中の丸印はその系統中での出現順位を表す。



(グラフ 2) 〈高出現数のフィラー的用法の形式 (系統別)〉

(表 6) 〈出現率上位 3 位までのフィラー的用法の形式 (系統別)〉

	フィラー的用法の形式の中で出現率が高いもののうち、上位3位 (系統別)	合計
「接続詞系」	①「で」57.5% ②「それから」8.8% ③「だから」・「やはり」共に6.3%	78.90%
「指示詞系」	①「あの (-)」64.6% ②「その (-)」28.9% ③「この (-)」3.6%	97.10%
「感動詞系」	①「え (-)」32.4% ②「あ (-)」28.2% ③「お (-)」13.9%	74.50%
「副詞系」	①「ま (-)」87.5% ②「も (-)」12.5% ③ -	100.00%

(表 6) より分かったことをまとめる。フィラー的用法の形式の中で出現率が高いものを系統別に見た場合、まず、出現率の 1 位と 2 位の間、また 2 位と 3 位の間にはそれぞれ大差があることが分かる。1 位と 2 位の間について言えば、「接続詞系」で約 6.5 倍、「指示詞系」で約 2 倍、「感動詞系」で約 1.2 倍、「副詞系」で約 7 倍の差がある。また、2 位と 3 位の間について言えば、「接続詞系」で 1.4 倍、「指示詞系」で 8.0 倍、「感動詞系」で 2.0 倍の差がある。これは、それぞれの系統で頻出するフィラー的用法のことがかなり固定的であることを表している。

さらに、各系統の上位 3 位までのフィラー的用法の形式が全体に占める割合を見ると、「接続詞系」(「で」、「それから」、「だから」・「やはり」) で 78.9%、「指示詞系」(「あの (-)」、「その (-)」、「この (-)」) で 97.1%、「感動詞系」(「え (-)」、「あ (-)」、「お (-)」) で 74.5%、「副詞系」(「ま (-)」、「もう」) で 100.0% であり、本論で扱った資料においては、各系統とも出現率が上位 3 位までの形式によって全体の 70%以上がカバーされていることが分かる。

これらより、フィラー的用法の形式はその出自の系統別に見ると、使用される形式がほぼ固定的であること、系統別に見た際の出現率が高い上位 3 位までの形式で、その系統のフィラー的用法の形式の 70%以上がカバーできるということが言える。

フィラー的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」のインタビュー談話における出現率について

フィラー的用法のことばには個人の話し方の癖などが現れやすいと思われるが、実際の言語運用を考えた際には高い頻度で使用されるものはほぼ固定的であり、その中でも先述した(表6)のとおり、接続詞系の「で」と副詞系の「ま(ー)」は、フィラー的用法を持つ形式全体の中での出現率において卓出している。しかも(表2)、(表5)によれば、「で」と「ま(ー)」の高い出現率は1960年代から2010年代までの戦後のインタビュー番組中の談話において安定的に観察できる。

以上を確認した上で、この調査結果を日本語教育の教授活動に還元することを試みる。具体的には会話指導のテキスト中で、上述したフィラー的用法の形式がどのように扱われているかを確認し、会話指導への提言を行いたい。

3.3. 現行日本語テキストで取り上げられたフィラー

以下に示したのは、現行日本語テキストの会話と問題部分で取り上げられているフィラーである。

(表7) 〈現行日本語テキストで取り上げられたフィラー〉

テキスト		フィラー	
		「あの(ー)」	「えーと」
A. 『みんなの日本語』	初級Ⅰ(第2版)2014年 本冊	●	●
	初級Ⅱ(第2版)2014年 本冊	●	●
	中級Ⅰ(初版)2008年 本冊	●	
	中級Ⅱ(初版)2012年 本冊	●	
B. 『新日本語の基礎』 『新日本語の中級』	I・II(初版)1993年 本冊	●	●
	(初版)2000年 本冊	●	●
C. 『初級日本語げんき』	I (第6版)2011年	●	
	II (第2版)2011年		●
D. 『できる日本語』	初級(初版)2011年版 本冊	●	●
	初中級(初版)2012年版 本冊	●	●
E. 『まるごと初級』	初級1, A2, りかい 2014年版	●	●
	初級2, A2, りかい 2014年版	●	●
	初級2, A2, かつどう 2014年版	●	

※1 ●はそのフィラーが取り上げられていることを表す。

※2 フィラーの「あの(ー)」には「あのう、」、「あのう」、「あの、」を、「えーと」には「えーと…」、「えーと、」、「ええと、」、「ええと…」、「ええっと」を含む。

※3 出現位置は全例文頭であった。

(表7)に挙げた日本語テキスト中で採用されているフィラーは「あの(ー)」(「あのう」、「あの」含む。)と、「ええと」(「ええっと」含む。)の二種であるが、(表6)で示し

たようにインタビュー資料では、接続詞系フィラーの「で」、指示詞系フィラーの「その(一)」、感動詞系フィラーの「え(一)」、「あ(一)」、副詞系フィラーの「ま(一)」なども 20%以上見られる。そこでこれらのフィラーも含めた会話モデルを提案したい。

接続詞系フィラーの「で」については、

- ・「僕だって、で、それからいろいろあって、で、どうしようもなかったから。」(③・再掲)
- ・「我々は一、で一、筋肉というものがあるから、で一、立っていられるんですよ。」(⑱)

のように、文中に置かれて話をつなげる目的で使用される例がインタビュー資料では見られる。このようなフィラーは、話し手にターンを保持させて発話の続行を示す目的で使用されている。

指示詞系フィラーの「その(一)」については、

- ・「暢気すぎるって言って、みんなからその一、言われたとかですねえ、」(⑥・再掲)などの例が見られ、また、
- ・「最近ではあの一その一、スタジアム、うー、ドームのスタジアムが、」(⑩・再掲)と、「あの一」に連続して「あの一その一」の形式で使用される例もある。

感動詞系フィラーについては、日本語テキストでは「えーと」を採用しているが、インタビュー資料では(表4)のとおり、「えーと」よりも「え(一)」、また「あ(一)」の使用の方が見られる。

- ・「そこへ、え一、いわゆる心臓カテーテル、え一、いわゆる『心カテ』を」(⑫・再掲)
- ・「フカかサメか、あ一、はたまたトビウオかっていう…」(⑬)

これらは先述のフィラー「で」と同じく、話し手のターン保持と発話の続行の提示が目的での使用であり、特にビジネス会話でのスピーチ、プレゼンテーション等の場面での使用も想定できると考えられる。

副詞系フィラーの「ま(一)」は、

- ・「こういうところは、ま一、私の、ま一、性分、性分ですね。」(⑤・再掲)

等の使用が見られる。今回調査した日本語テキストでは「え(一)」、「あ(一)」、「ま(一)」などのフィラーは提出されていないが、これらのフィラーも含めた会話モデルをそのテキストの主旨(総合、会話、聴解等)に沿って採用することで、実際の日本語のやりとりにより一層近い会話練習が行えると考えられる。日本語テキスト執筆者の方々にはぜひご一考を願うものである。

フィラー的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」のインタビュー談話における出現率について

4. まとめ

以上、本論での主張をまとめる。本論では、まずインタビュー談話に出現するフィラー的用法をもつ形式を、接続詞系フィラー、指示詞系フィラー、感動詞系フィラー、副詞系フィラーと、その出自の系統別に統計的に考察し、1960～2010年代のテレビで放送されたインタビュー番組での全フィラー的用法におけるその出現率を示した。その結果、全フィラー的用法中に、接続詞系フィラーが5.2～12.1%、指示詞系フィラーが36.4～53.3%、感動詞系フィラーが15.2～29.6%、副詞系フィラーが10.5～39.0%と、全体を100と見ると、接続詞系7.3、指示詞系47.4、感動詞系22.1、副詞系23.0の割合で見られた。これは1960～2010年代の間大きく変化しておらず、即ち、戦後の日本語インタビュー番組で見られる談話のフィラー的用法の系統について普遍性があることを示した(3.1.)。

またそれを踏まえ、フィラー的用法の形式の出自の系統別に出現頻度が高い形式を示した。それらは、接続詞系フィラーが①「で」(57.5%)、②「それから」(8.8%)、③「だから」・「やはり」(共に6.3%)、指示詞系フィラーが「あの(ー)」(64.6%)、②「その(ー)」28.9%、③「この(ー)」3.6%、感動詞系フィラーが①「え(ー)」32.4%、②「あ(ー)」28.2%、③「お(ー)」13.9%、副詞系フィラーが①「ま(ー)」87.5%、「も(ー)」12.5%で、出現率が上位3位までの形式で、その系統のフィラー的用法の形式の出現頻度が高いものの70%以上をカバーすることが分かった(3.2.)。

その結果を元に既存の日本語テキストでのフィラー的用法として採用されている形式を確認したところ、「あの(ー)」(「あのう」、「あの」含む。)と「ええと」(「ええっと」含む。)以外の形式については採用の実態が見られないことが分かった。そこで、インタビュー資料では頻出の形式であった接続詞系フィラーの「で」、指示詞系フィラーの「その(ー)」、感動詞系フィラーの「え(ー)」、「あ(ー)」、副詞系フィラーの「ま(ー)」なども含めた会話モデルをそのテキストの主旨(総合、会話、聴解等)に沿って採用すれば、実際の日本語のやりとりにより一層近い会話練習が行えると考えられるとし、日本語教育の会話指導に提言を行った(3.3.)。

[参考文献]

- 伊佐早敦子(1953)「はなしことば序—不整表現を中心として—」『国語国文』第22巻第3号(通巻223号), 京都大学国文学会, pp. 183-201.
- 石黒圭(2010)「講義の談話の接続表現」佐久間まゆみ編『講義の談話の表現と理解』, くろしお出版, pp. 138-152.
- 遠藤嘉基(1953)「話し言葉と書き言葉」『言語生活』第21号, 国立国語研究所内『言語生活』編集部, 筑摩書房, pp. 22-29.

- 金水敏・田窪行則 (1992) 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」, 金水敏・田窪行則編『指示詞』(日本語研究資料集第 1 期第 7 巻), ひつじ書房, pp. 123-149.
- 魏春娥「談話におけるフィラー「ま(一)」の待遇差に関する予備的考察」『東アジア研究』(13) 山口大学大学院東アジア研究科, pp. 75-93.
- 小出慶一 (1983) 「言いよどみ」水谷修編『講座日本語の表現[3] 話しことばの表現』, 筑摩書房, pp 81-88.
- 小出慶一 (2006) 「フィラー「この一」「その一」「あの一」について: その由来、機能、相互関係」『埼玉大学(教養学部)紀要』第 42 巻第 2 号, 埼玉大学教養学部, p.15-27.
- 小出慶一 (2008) 「発話行動における「で」の役割—「で」のフィラー化をめぐる—」『埼玉大学(教養学部)紀要』第 44 巻第 2 号, 埼玉大学教養学部, pp. 27-40.
- 佐久間鼎 (1936) 『現代日本語の表現と語法』, 厚生閣.
- 佐久間まゆみ編 (2010) 『講義の談話の表現と理解』, くろしお出版.
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(一)」—」『言語研究』108, 日本言語学会, pp. 74-93.
- 塩沢孝子 (1979) 「日本語の Hesitation に関する一考察」, F・C・パン編『社会言語学シリーズNo. 2 ことばの諸相』文化評論出版, pp. 151-166.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」, 『文法と音声』, 音声文法研究会, くろしお出版, pp. 257-279.
- 大工原勇人 (2008) 「指示詞系フィラー「あの(一)」・「その(一)」の用法」, 『日本語教育』138 号, 日本語教育学会, pp. 53-62.
- 中島悦子 (2011) 『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞—』, おうふう.
- 橋本進吉 (1948) 『国文法研究』, 岩波書店.
- 平川八尋 (1991) 「理工系講義に現れる接続表現の分析—教材作成のための基礎資料分析—」, 『長岡技術科学大学 言語・人文科学論集』5, 長岡技術科学大学, pp. 93-102.
- メイナード・K・泉子 (1992) 『柴谷方良・西光義弘・影山太郎編集日英語対照研究シリーズ (2) 会話分析』, くろしお出版.
- メイナード・K・泉子 (1997) 『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』くろしお出版.
- 森山卓郎 (2005) [項目: ■「アノ・エート・マア—フィラー」]、『新版日本語教育事典』, 日本語教育学会, pp. 188.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館出版.
- 山根智恵 (2002) 『日本語研究叢書 15 日本語の談話におけるフィラー』, くろしお出版.
- 『新版日本語教育事典』(2005) 日本語教育学会, 大修館書店.

[本論で使用したインタビュー資料]

- ① 『時の表情 死の灰をかぶって 10 年 第 5 福竜丸』(1964 年 2 月 28 日・総合)
- ② 『婦人の時間「この人この道」～鈴木大拙～』(1964 年 5 月 21 日・総合)

フィルター的用法の「で」、「あの(ー)」、「え(ー)」、「ま(ー)」のインタビュー談話における出現率について

- ③『人間国宝（ルポとインタビュー）（1966年11月3日・教育）
- ④『人間列島 18歳男子』（1971年6月10日・総合）
- ⑤『カメラリポート（L）「龍のふるさと」～千葉県北部～』（1976年1月6日・総合）
- ⑥『人 その世界第2回』（1979年12月30日・総合）
- ⑦『訪問インタビュー 80年代への対話（1）』（1980年1月1日・教育）
- ⑧『ビジネスウイークリー トップリポート 繊維カンバン方式をめざせサンデー・インタビュー 大隈武雄』（1986年9月28日・教育）
- ⑨『日曜インタビュー 作家 宮本輝』（1989年11月19日・総合）
- ⑩『産業インタビュー トップインタビュー』（1990年1月12日・教育）
- ⑪『ETV 特集 インタビュー ピカは人が落とさなきゃ落ちてこん』（1994年8月22日・教育）
- ⑫『ホリデーインタビュー 脳神経外科 若林利光』（1999年9月15日・総合）
- ⑬『BS フォーラム 新世代デザインが暮らしを変える』（2001年1月27日・BS）
- ⑭『食彩浪漫 祖母のうどんは僕の原点』（2006年10月8日・総合）
- ⑮『知る楽 仕事学のすすめ 勝間和代 働く女性 課題克服仕事論 第2回「チームと調和する」』（2009年8月13日・教育）
- ⑯『さわやか自然百景 新春スペシャル「森の国 日本」』（2012年1月2日・総合）
- ⑰『SWITCH インタビュー 達人達（たち）「夏木マリ×澤穂希～カッコいい女の条件～」』（2014年5月10日・教育）
- ⑱『ハートネット TV 山田賢治のメンタルヘルス入門#1「ナルコレプシー」』（2016年2月2日・教育）

福本和夫論

—比較文化学の先駆者、福本和夫—

藤田昌志

福本和夫論

—比較文化学の先駆者、福本和夫—

FUJITA Masashi

【摘要】

福本和夫（1894-1983 享年 89 歳）は比較文化学の先駆者。他一時在日本共産党員と積極分子之間具有圧倒性的影響力、可是由于 1927 年共产国际的‘27 年纲领’被批判而喪失地位。1928 年 6 月因 3・15 案件的連坐而被逮捕、一直到 1942 年在獄中過了十四年。他在獄中獲得启发、开始构思“日本文藝復興”研究、后于 1967 年經東西書房出版《日本文藝復興事論》。《日本文藝復興史論》（1967）是就有关日本、中国（明、清）、西洋的“学藝復興”进行综合、比較的研究、是比較文化学的著作。福本和夫可謂是比較文化学的先驅者之一。

キーワード：人間性の回復 日本ルネッサンス 学芸復興 総合・比較研究

1 はじめに

福本和夫（1894 年－1983 年、89 歳没。）は比較文化学の先駆者である。山川均を批判し、理論闘争による前衛党の樹立を提唱（＝福本イズム）し、一時、共産党員や活動家の間で圧倒的な影響力を持ったが 1927 年のコミンテルンの「27 年テーゼ」で批判され失脚した。1928 年（昭和 3）6 月、三・一五事件に連座して検挙され、1942 年（昭和 17）まで 14 年間、獄中生活を送り、その間に「日本ルネッサンス」研究の着想を得た。獄中期間から浮世絵のフランス印象派への影響についての研究のパイオニアとなり、1955 年（昭和 30）『北斎と印象派・立体派の人々』昭森社を出版し、近世の捕鯨技術の研究も行い、1967 年（昭和 42）『日本ルネッサンス史論』東西書房を出版した⁽¹⁾。1967 年（昭和 42）『日本ルネッ

サンス史論』はルネッサンス（福本は文芸復興ではなく、広く「学芸復興」という）の日本・中国（明・清）・西洋の総合・比較研究であり、比較文化学の本である。福本和夫は日本の比較文化学の先駆者のひとりである。

2 福本和夫について

福本和夫は1894年7月4日、鳥取県久米郡下北条町（現・東伯郡北栄町）に福本信蔵の三男として生まれ、旧制倉吉中学校、旧制第一高等学校を経て、1920年（大正9）東京帝国大学法学部を卒業している。大学卒業後、松江高等学校（現・島根大学）教授に就任し、1922年（大正11）文部省在外研究員として英独仏に2年半留学した福本は、ドイツのワイマールにあるフランクフルト大学社会研究所でコルシュやルカーチからマルクス主義を学び、更に文化史という研究方法を学んで日本におけるその研究の創始者とされている⁽²⁾。ここまでの福本とその時代状況について、以下、より詳しく考察し記述してみたいと思う。

1917年（大正6）3月、第一高等学校を卒業して9月、東京帝国大学法学部政治学科に入学した福本は東大在学中に、吉野作造や新渡戸稲造から授業を受けている。当時はロシア革命（1917年）米騒動（1918年）原敬内閣の出現（1918年）と大正デモクラシーの満開期であった⁽³⁾。

大正期は明治期の連続的進化の意識とは異なり、大正前期、社会の進化発展への根底的疑いや反発が「白樺」派や西田哲学の誕生と哲学青年といった先駆的存在の後、深化され、大正末には質的に新しい社会運動と結びつき始める時期であった⁽⁴⁾。大正期の世界化は海外、欧米の「権威」への屈伏と表裏の関係を思想上、有していて、ロシア革命後の昭和期のソヴィエト・マルクス主義の導入は「権威」の無批判的導入、没主体的屈服が顕著になってきたことの典型的な事象であった⁽⁵⁾。

東京帝大時代、福本は吉野作造から政治史や支那革命史などを学んでいるが、福本の後年の述懐によると、福本は吉野からことさら何かを学んだわけではなく、新聞記事などを素材にして行われる吉野の授業に反発してか、福本はあまり受講熱心な学生ではなかったようである⁽⁶⁾。

1922年（大正11）から2年半の英独仏への留学時代、ドイツのワイマールにあるフランクフルト大学社会研究所でハンガリーの哲学者ルカーチ・ジョルジやドイツの思想家カール・コルシュの指導の下にマルクス主義を学んだことには大きな意義があった。ルカーチやコルシュはマルクス主義の理論を根源的に問い直すことにより主体的人間の復権を目指した、マルクスの論理の新たな地平を開くマルクス主義ルネッサンスを創出していった人々であった⁽⁷⁾。

コルシュ『マルクス主義と哲学』とルカーチ『歴史と階級意識』は1923年に刊行された時から“極左”“修正主義”として“正統派”マルクス主義・コミンテルンによる批判にさらされていて、人間の「社会的存在が彼らの意識を規定する」というマルクス『経済学批判』の序文の一文をコミンテルン・正統派が機械的に意識と存在を対置し、人間主体を経済構造が一義的に規定すると解する考えに立つのに対して、コルシュとルカーチは歴史における人間の意識が存在と結びつき、いかなる役割を担い、どのような意義を持ち変革へ向けての主体の形成を果たすのかを問題とし、意識そのもののありようを強調した⁽⁸⁾。福井眞佐汎(2005)は「福本イズム」批判について次のように述べている。「第二次共産党の中心理論になった「福本イズム」の批判はようやく1927年になって始まる。だがそれは「福本イズム」がコミンテルンから排斥されたコルシュ、ルカーチの“修正主義”的な理論に依っているという批判であり、「福本イズム」に内在してその理論を検討したものではなかった⁽⁹⁾。

1924年9月に留学から帰国した福本和夫は同年12月号の雑誌『マルクス主義』に「経済学批判のうちにおけるマルクス『資本論』の範囲を論ず」を投稿し、その論文は『資本論』の構造を『剰余価値説』（ドイツ語でしか読めない）をみとおして書いたもので、河上肇や高畑素之（『資本論』の訳者）といった日本のそれのまでのマルクス主義学者を総なめに批判したものであった⁽¹⁰⁾。

松田道雄(2005)は福本和夫という人物の魅力は「その新鮮さ」にあったと言い、「福本和夫ほど学生にだけ呼びかけた社会主義者はそれまでになかった⁽¹¹⁾」と述べ、更に「福本和夫が青年のインテリゲンチアをひきつけたのは「敵」の存在をはっきり示したことにあり⁽¹²⁾」り、「福本和夫が私たち学生をとらえたのは、明治支配こそ、われわれの敵であり、これを打ちたおさないかぎり、解放はありえないことをはっきりいったことだ。そして、彼はこの敵に絶対専制勢力という名をつけた⁽¹³⁾」と指摘している。

福本和夫の強みは原典でマルクス、レーニンを読んでいたこと（＝権威）であったが、その「権威」は既述の大正期の欧米の「権威」の表れでもあった。皮肉なことに福本の「権威」はより強いコミンテルンの「脅威」と「権威」によって1927年「日本にかんするテーゼ」として否定されるのである。

1928年6月から1942年4月まで14年間にわたる獄中生活を送った福本和夫は敗戦後、日本ルネッサンス史論の一環として、葛飾北斎の研究成果を出版し、1950年（昭和25）共産党に復党、6月の参議院選挙で鳥取地方区から立候補するが落選し、9月のサンフランシスコ会議で同月4日に、総司令部の命令で逮捕され、23日拘留の後、吉田政府の命令で公職追放となり、55年の六全協まで徳田主流派に対する反対運動を日本共産党統一協議会を

率いて続ける。スターリン批判の後、農業問題に関心を持ち、スターリン主義と徳田主義と「野坂——宮本路線」に対する独自の批判を継続し、日本ルネッサンス史論の大著を完成した⁽¹⁴⁾。

福本和夫が日本ルネッサンスの問題の解明に異常な熱意とエネルギーを傾けた、その一番の出発点は「明治維新政権の性格規定の究明——氏は明治維新はブルジョア革命であるが、できた明治政権は絶対主義君主制とみる——にあるという」⁽¹⁵⁾。そのためには、遡って徳川封建時代をみなければならず、“労農派”“封建派”に異論があった福本は、その誤りを克服するための繞廻・包囲作戦としてルネッサンスの研究が必要だと考えたのが直接の契機であった⁽¹⁶⁾。「福本の目指しているのは人間性の回復、ヒューマンイズムの問題なのである」⁽¹⁷⁾と飯田（2005）は述べている。

3 『日本ルネッサンス史論』について

この章では福本和夫（1967年（昭和42））『日本ルネッサンス史論』東西書房について考察してみたい。当該書の比較文化学の見点を意識的に考察してみたいと思う。

福本の『日本ルネッサンス史論』の特徴は大要、次のようにまとめられる⁽¹⁸⁾。まず、既述のように「ルネッサンス」の訳語を福本は文芸復興ではなく、「学芸復興」としてることからもわかるように、福本の「ルネッサンス」論は「学芸・芸術の分野ばかりでなく政治思想や哲学、経済論や自然科学、技術などにも見られる人間認識の復興」である点で「総合的」な比較文化学である。階級的視点から見ると、ルネッサンスは「町人（市民）階級による文化革命であり、その技術と経済基礎はマニファクチャーの発達にある」。福本はルネッサンスを中世的普遍性によって抑圧されてきた自我や個性の「市民固有の文化への回帰すなわち復古」ととらえ、その波及過程は不均等な発展をとげるとする。福本は日本ルネッサンス現象を「航海貿易、鉱山業、鉱山学、儒学、国学、歌道、医学、兵学、法学、史学、和算、カラクリ技術、化学（錬金術など）、博物学、地学、絵画、印刷術、文学（小説、俳諧、戯曲、詩）、書、辞典、政治学、ユートピア思想、その他多方面」にわたって論証し、西洋ルネッサンスの時期が十五、六世紀（イタリア、フランス、イギリスなど国によって時期に違いがある）であったのに対して、日本ルネッサンスは「復古儒学者による儒教改革の第一声が出てきた寛文初年（1661年）に始まり、著名な学芸復興家が相ついで死去した嘉永三年（1850年。それから三年後にペルリの来航が起こった）に終わったことを明らかにし」、「時期の確定」を行ったのである。福本は「雑学」とその「総合化」を、研究を志す後輩の多くに奨めたという。

以下、『日本ルネッサンス史論』の各章の中から重要点をピックアップして考察してみた

いと思う。

第一章 序説 ではアジアで唯一、日本が植民地化しなかった理由を「その要因の一つは、アジアでひとり日本の近世史にはルネッサンス時代が存在し、したがってまた、マニュファクチュアの成立・発展が見られたという事実のうちに、求められるべきであろう。」とし「日本ルネッサンス史、日本マニュファクチュア史の総合・比較研究の大成が日本の近世史を論ずる上にもっとも重要にして不可欠の研究課題であることに世の注意を喚起したい」⁽¹⁹⁾ と、唯物論者らしくマニュファクチュアという下部構造の上にルネッサンスという文化＝上部構造が日本に存在していて両者が表裏一体であることを述べ、自らの研究姿勢が「総合・比較研究」であると比較文化学的研究姿勢を明確にしている。

第二章 日本ルネッサンスの時代性・階級性・革新性 では、従来の歴史家が家康が元和偃武とともに大いに学問を奨励したので、やがて元禄時代文学の興隆を見るに至った、それが「日本の文芸復興だ」と考えているのに対して、「徳川幕府の武士的な文教政策に対する反抗運動、それが学芸復興の根幹であり、学芸復興のおこらざるをえなかったゆえんである」⁽²⁰⁾ と述べ、日本近世のルネッサンスが「反抗運動の総合にほかならない」とし、林羅山らの朱子学への批判・反抗の第一矢を放ったのが、山鹿素行を先達とする復古儒学であり、それに次いで国学の運動がおこり、書道面でも書道復古家が起こり、狩野派に対して浮世絵版画が創始され、御用医学の御世方に対して、古医方の復古運動が展開された⁽²¹⁾ と具体的に説明している。

第五章 日本近世文芸復興期論前史 日本ルネッサンス史論の方法論 ではその方法論を①中世から近世への過度期における＝近世への黎明における史的範疇として日本ルネッサンスという語を用いていること②多種多様の要素を見出した総合・比較研究であること③始期と終期を決定すること④中国明代並びに清代文化との比較研究であること⑤西洋ルネッサンスとの比較研究であること⁽²²⁾ ——と規定している。また、ルネッサンスは東西でその発生の時期がおおよそ 360 年のズレがあつて、同時期ではなかったことにも言及し、単に同時代の東西を機械的に比較することにより、日本のルネッサンスを論じた高井月郊 (1929) 『日本文芸復興史』上下二巻が日本の文芸復興期を室町時代に始まり安土桃山時代を中期として、徳川の元禄時代に終わるとすることを「根本的にあやまった比較論にすぎない」と批判している⁽²³⁾。

第六章 ルネッサンス期に先行した航海貿易の発達 では唐の太宗の政治・文教施設のスクールとその理念—徳川家康との関係と対比を中心に—で唐の太宗と徳川家康の政策について総合・比較研究を行っている。

唐の政治は周囲の民族に対して、「単なる羈縻^{きび}すなわち、継続的なもので、完全なる領土

というわけではなく、諸民族はそれぞれに独立と自治を失わないで、維持しながら、時々唐に朝貢し、貢物を差し出した。都護府が多少の兵力をもって、それらを控制し、動揺したり侵寇したりしないように、おさえていただけであった⁽²⁴⁾とし、唐の宗教政策も「西方の諸外国から新たに伝来したゾロアスター教、景教、回教等の宗教を、おおらかに受入れて、国内にその布教を許した寛容の態度であり、信教自由の政策である⁽²⁵⁾」とゆるやかなものであったと述べている。

それに対して、徳川家康の「キリシタン弾圧——禁止の政策は太宗の宗教政策とははなはだしく対蹠的であり、鎖国政策もまた、唐の羈縻政策とすこぶる対蹠的で」、「その意味において、むしろ最も肝腎な点で太宗にあやかりそこねた家康であったことは否定しがた」く、「家康の二大失策がここにあった⁽²⁶⁾」と厳しく家康を批判している。既述のように日本ルネッサンスは「徳川幕府の武士的な文教政策に対する反抗運動、それが学芸復興の根幹である」と福本（1967年（昭和42））は述べている。家康の施策を否定的にとらえるのは当然のことであろう。

第七章 日本ルネッサンスと鉱山業・鉱山学・貨幣流通 ではルネッサンスを発生させたのは町人の抬頭であり、町人の抬頭は商業資本、高利貸資本、生産資本の発展によるものであり、それら資本の発展は貨幣経済の普及をその前提条件の一つとしており、貨幣経済の普及には鉱山業・鉱山学の発展が必要であることが述べられ、それは西洋においても、日本においてもルネッサンス期に先行しかつ併行してみられるとし、「戦国時代は、ある意味では鉱山争奪戦の時代といってもいいほど」であり、「佐渡の金山、播州生野の銀山、石州大森の銀山などが争奪の対象であった⁽²⁷⁾」ことが述べられている。

第九章 朱子学にたいする復古儒学その他の抗争とその反動 では幕府の官学——朱子学に対して、不満・抗議の第一矢を放ったのは山鹿素行であり（寛文元年（1661））、第二矢を放ったのは京都の町人出身の儒者、伊藤仁斎であること等が述べられている。山鹿素行の学風の特徴は「その古道学業並びに武士道学において、もっとも顕著」であり、それは国学者の平田篤胤や経済学者の佐藤信淵に影響を与え、幕末の志士吉田松陰によってうけつがれたが、「篤胤に至ってその極に達した国学の弊も、松陰の孟子歪曲による絶対主義イデオロギーの端緒的形成も、その淵源は主として素行の偏狭で、多分にハタハリ性に富んだ学風に由来するといつて差支えあるまい⁽²⁸⁾」と福本は述べている。松陰については第四十九章で再度、論評している。

第二二章 日本に錬金術がおこなわれなかったことの意味するもの では中国、西洋を視野に入れた論が展開されている。総合的な、比較文化学的な論述である。

中国の煉丹術は後漢から晋代、唐代にかけてが最盛時で、煉丹術と仙薬に最も重きを置

く外丹派の葛洪が煉丹法の集成である『抱朴子』内篇二十巻を著したのは、西暦317、8年であるから3、4世紀の時代であったとしてよいが、宋代以後は外丹派に変わって内丹派が世に迎えられ、優勢になった⁽²⁹⁾。宋代は生理的・心理的に神仙を求める傾向が強く、仏教で禅宗が栄え、儒教で朱子学が起こったことも内丹派に有利であり、宋代の大文豪、蘇東坡や陸放翁らが内丹派の傾倒者であったこともあずかって大いに力があり、内丹派が栄えたのであった⁽³⁰⁾。

東洋の煉丹術にあたるものが西洋では、アル・ケミイ（錬金術）と呼ばれ、古代から中世にかけて、ルネッサンス時代の初期に至るまで行われていたが、西洋の錬金術は①身体を病魔から守り不老長寿を守ること②卑金属を金属に転換する方法を有する試薬、または「賢者の石」を求め、これにより無限の富を作り出すこと——という二つの目的を持っていた⁽³¹⁾。

西洋の錬金術には東洋の煉丹術に見られない特色がいくつかあり、それは①西洋錬金術は中世で終わることなくルネッサンス期まで続けられていること②ライプニッツやニュートンという大学者が共に錬金術に深い関心を寄せ一時期これに熱中していること③1890年代になっても西洋には錬金術を試みる者があられていること④西洋の錬金術と近代科学の間には自主的な発展の連続関係が存在すること——である⁽³²⁾と福本は言う。

比較文化学的にみれば、中国煉丹術の主な目的が不老長寿を享受することにあつたのに対して、西洋錬金術は無限の富を得ることを主目的にしていた⁽³³⁾。

日本で煉丹術が行われなかった理由について福本は①日本では仏教が普及し、それが不老長生の思想の発生・発達を妨げたこと②鎌倉時代に導入された禅宗、宋学は内丹派と共通するもので、外丹派＝煉丹術と仙薬を最も重視した『抱朴子』とは相容れないものであったこと③徳川幕府の採用した朱子学の朱子は内丹派の共鳴者、支持者であったこと④徳川時代に広くもてはやされた宋の蘇東坡も内丹派であったこと⑤日本では弁証法的思惟や歴史哲学が強くなかったこと⑥日本では各地で多くの金、銀の算出が続き、卑金属を金銀に転換する作業に熱中しなければならぬ必要がなかったこと等——を挙げている⁽³⁴⁾。

第二六章 日本ルネッサンスの印刷術と中国・朝鮮・西洋の比較 では浮世絵の錦絵版画について次のように述べている。「その多色刷の絢爛・豪華さにおいて、中国版画よりも西洋版画よりもはるかにすぐれ、独自の境地を開いた。（中略）後年、フランス印象派の絵画・音楽・彫刻のおこるのに、直接に大きな示唆と影響・感化を与えたのが、中国の版画でもデューラー等のドイツ版画でもなく、わが浮世絵の錦絵版画であったのは偶然ではない。／前掲の精巧さをきわめた木版画の素晴らしい技術こそは、いうならば、絵画における我が錦絵版画に対応するもの、あるいは、これとうらおもてのごとき関係にあるものと

いってよかろうか」⁽³⁵⁾。

中国で漢文の書物が洋式な鉛活字で本格的に印刷できるようになったのは、1859年以降であろうが、小規模に少しずつではあるが1620年代ないし1790年代から行われていたことは否定できないとし、注意すべき点は①中央で清朝宮廷にとりいていたマテオリッチらイタリア人宣教師が行っていたのではなく、地方各地に活躍舞台を求めていたイギリス人やアメリカ人が行っていたこと②キリシタン厳禁の鎖国日本と違って、中国には欧米人が印刷機とバイブルをもってはいり込む余地があったこと③日本の方が近代的な鉛活字による印刷が本格的に行われるようになったのは中国より2、30年おくれているが、日本では自主的に自ら主体となって印刷を発展させたのに対して、中国では少なくとも清代まではイギリス人、アメリカ人が主体となって発展させたのであって、中国人自身が自主的に発展させたのではなかったこと——であるとし、この第③点の相違は何に由来するのかという点、「日本には徳川時代にルネッサンスがあったが、中国では明代、清代にもルネッサンス時代が存在しなかったためである」⁽³⁶⁾と述べている。

第四七章 中国の明代・清代にルネッサンスがなかったことの傍証 では①漢画に職人尽絵なるジャンルがなく、また日本の浮世絵師にあたる一連の画家の輩出が中国に見られないこと②イギリス・ルネッサンスの世界的巨匠とうたわれているセキスピア（＝シェイクスピア）とともに東西ルネッサンス文学の双璧と称する日本の西鶴に当たるものが明代清代には見られないこと⁽³⁷⁾——の二つは中国明代、清代にルネッサンスがなかったことの傍証となるとしている。内藤湖南は宋代を中国近世（近代）として、宋代は「平民発展の時代」と「政治の重要性減衰」の時代であるとし、前者の例として「文人画」の出現、工芸の平民相手への大量生産の開始などを挙げている⁽³⁸⁾。明代、清代だけでなく宋代も視野に入れないのでは、日本と中国のルネッサンスの比較は成立しないのではないだろうか。

第四八章 ルネッサンス期に次いで日本にも啓蒙期があった では1850年で日本ルネッサンス期が終わった後、1857年（安政4）蕃書取調所が幕府によって開設されてから英米流、仏流の立憲思想並びに国会開設運動の勃興・普及を見るに至った時期までを啓蒙期として取り上げている。その記述において特徴的なのは小節「福沢諭吉の啓蒙思潮とその不備・欠陥」で「福沢には復古儒学や復古医学に対する、したがって日本ルネッサンスに対する理解がまったく欠けていたという厳然たる事実の存在することである」⁽³⁹⁾と福沢の不備、欠陥を明瞭に述べ、続けて福沢の『文明論の概略』第五巻が「日本文明の由来」を論じ、日本の「権力の偏重」「偏重の禍」を強調していることには首肯しつつも、儒学については「復古儒学も朱子学同様にみて、何ら区別していない」⁽⁴⁰⁾とし、福沢の西洋文明、

西洋実学の輸入と啓蒙（＝西洋ルネッサンス文化の輸入と啓蒙）が日本ルネッサンス文化の理解なしで行われたことが、偏重の禍の弊を免れ得なかった理由となった、それは日本の啓蒙化の諸家に共通する現象であった⁽⁴¹⁾と日本ルネッサンス文化を理解しないことによる西洋ルネッサンス文化一辺倒の偏重の弊を指摘している。

福本の福沢評価は次の文章に端的に表現されている。「蘭方一辺倒であった福沢は、やがて英米医学一辺倒にかわり、明治六年には、慶應義塾内に英米流医学所を新設したが、明治政府の石黒忠恵らによるドイツ流医学一辺倒のため圧迫されてうまくゆかず、明治十三年ついに廃校のやむなきに至った。ドイツ流医学と、いうならば、共同戦線をはって、漢方医学の息の根をとめたかれの英米流医学がこんどは、ドイツ流医学に締め出しを食ったというわけだから、皮肉なものである」⁽⁴²⁾。

第四九章 わがルネッサンスが国内へあたえた影響 では日本ルネッサンスが各種生産部門にマニファクチュアの発生をもたらし、その発展を促進したことを最も大きな影響とし（福本は下部構造と上部構造の相互影響を考えていたようである。）、小節「素行学派吉田松陰の「講孟余話」による絶対主義理念形成の端緒」では松陰の松下村塾における『講孟余話』を「儒教の歪曲をあえてすることによって、絶対主義理念の芽生を育成培養したもの」⁽⁴³⁾と批判している。

君臣の関係を売買関係とせず、忠孝一致論、忠孝不二論を力説した松陰の『講孟余話』（ex.「暴君頑父につかえて忠孝なるものに至っては、不孝の至り、まことにかなしむべし。しかれども、これにあらざれば、真の忠孝の誠意をみるに足らず。」）が明治23年の教育勅語で「よく忠に、億兆心を一にして、世のその美となせるは、これわが国体の精華にして」となったとし、それは儒教本来の姿ではないと述べて、仁斎・徂徠らの復古儒学者はもちろんのこと、陽明学者の大塩平八郎も「道の要はただ孝にあるのみ。故に我が学は孝の一字をもって、四書六経の理義を貫く」と大いに孝を強調しているが、忠孝一致論、忠孝不二論ではないと松陰を批判している⁽⁴⁴⁾。次の言辞は福本による松陰への歴史的断罪の言辞である。「もし『講孟余話』が儒教の歪曲によって、君臣父子の関係同一視の理念を展開して、維新後の絶対主義天皇制のイデオロギーを胚胎し培養することがなかったとしたら、日本の歴史は、おそらくこんどの悲惨な一大敗戦を経験しないですみ、あるいは、別の道を辿ったであろう。ある意味では、そうもいえるであろうと思われる」⁽⁴⁵⁾。

4 福本のその他の著作について

既述のように福本和夫には（1967）『日本ルネッサンス史論』のほか（1955）『北斎と印象派・立体派の人々』があり、また捕鯨技術やフクロウについての研究もある。「雑学」

とその「総合化」を研究を志す後輩に奨めた福本和夫は紛れもなく比較文化学の先駆者の一人である。

以下では、福本（1972）『日本ルネッサンス史論からみた幸田露伴』法政大学出版局について若干、述べてみたい。福本は（1972）『日本ルネッサンス史論からみた幸田露伴』の序文で、明治・大正の文豪中、特に露伴を取り上げた理由について次の七つを挙げている。

①福本の言う日本ルネッサンス期の代表的作家であった西鶴と馬琴とを両足にしっかりと踏まえて、そこから出発していること。②露伴の都市計画論という先駆的な偉業を顕彰するため。③露伴の史伝物（「太公望」「王羲之」等）と鷗外の史伝物の比較。④露伴の文芸復興説と福本の日本ルネッサンス史論を比較検討すること。⑤権威・体制に対する態度。⑥学問追及の仕方と見識が非常にすぐれていたこと。⑦露伴の終焉が作家・文学者として、一世の碩学として、まことに立派であったこと⁽⁴⁶⁾。

④については第二十九章、三〇章、三一章で具体的に述べられていて、⑥については第三十五章で例を挙げている。

④の比較検討については、第二十九章 露伴の文芸復興論と私の日本ルネッサンス史論では、露伴の文芸復興は元禄時代を中心とするもので、福本の日本ルネッサンス史論は縦に考察を広げ（寛文初年から嘉永三年ごろまで）、横に観点を文芸のみならず、経済、政治、社会とあらゆる分野にわたって総合的に展望したものであること⁽⁴⁷⁾を述べている。⑥の学問追及の仕方と見識のすぐれていたことについては、第三十五章 露伴の仙道・丹道研究の特色とその意味するもの で露伴には仙人についての一連の研究があるが、（1922）「仙人呂洞賓」を書くことを露伴に思い立たせたのは、邯鄲黄梁一炊の夢の話が謡曲や太平記にあるが、謡曲には夢を見た盧生の名しかなく太平記には夢を見せた呂洞賓の名しかない由来を訪ね、唐の李泌の著した「枕中記」一卷が、この物語を記した最初の文献であることを露伴が見出したことを述べ⁽⁴⁸⁾ 露伴が「いつも稀観の原点を涉猟し、これを立論のよりどころとしていることに、つよい共感をおぼえるとともに驚嘆の念を新たにせずにはいない」⁽⁴⁹⁾と福本は露伴に敬意を表している。

第三十五章の末尾で、福本は露伴への比較文化学的な哀惜の念を吐露している。「このような炯眼と、博搜あくところを知らぬ碩学にこそ、魏伯陽の内丹の書、參同契のみでなく、さらに進んで、葛洪の外丹の書、抱朴子をも取り上げて、東洋錬金術の研究にも先鞭をつけて、その全貌を明らかにすると共に、西洋錬金術との比較検討にまで及んでいただきたいものである。先生ならば、それができたはずである。惜しみても余りあることであつたとおもわずにはいられない」⁽⁵⁰⁾。

5 結語

以上、考察したように福本和夫の研究は古今東西の書の博覧強記によって成立していて、既述のように明治政権を絶対主義君主制と見て、その解明のために前代の徳川封建時代を考察し、日本ルネッサンスの問題の探求に情熱を注いだのであった。明治の福沢諭吉批判（日本ルネッサンスに無知な福沢諭吉）や明治維新前夜の吉田松陰の孟子歪曲の淵源を山鹿素行に見出した福本の知性は鋭く強靱で、明治の絶対主義イデオロギーを強く批判した。福本のルネッサンス研究の根底には「人間性の回復、ヒューマニズムの問題」（飯田（2005）既述）が横たわっており、福本が日本近世のルネッサンスを「徳川幕府の武士的な文教政策に対する反抗運動の総合」ととらえていたところにその問題意識、比較文化学的研究姿勢は明瞭にみてとれる。福本和夫はまちがいになく比較文化学研究の先駆者の一人である。

〔注〕

- (1) 以上の記述は Wikipedia 2018.8.7 に負うところが大きい。
- (2) Wikipedia 2018.7 閲覧による
- (3) 小山弘健（2005）「福本和夫—前衛結晶の論理」小島亮編（2005）所収 p.20
- (4) 清水多吉（2005）「飛翔と不安—福本と三木をめぐって—」小島亮編（2005）所収 pp.201—203
- (5) 清水多吉（2005）「飛翔と不安—福本と三木をめぐって—」小島亮編（2005）所収 p.201
- (6) 清水多吉（2005）「飛翔と不安—福本と三木をめぐって—」小島亮編（2005）所収 p.207
- (7) 福井眞佐汎（2005）「福本和夫と一九二〇年代」小島亮編（2005）所収 p.423
- (8) 福井眞佐汎（2005）小島亮編（2005）所収 p.430
- (9) 福井眞佐汎（2005）小島亮編（2005）所収 p.430
- (10) 松田道雄（2005）「昭和思想史 I 解説〔抄録〕」小島亮編（2005）所収 pp.59—60
- (11) 松田道雄（2005）小島亮編（2005）所収 p.59
- (12) 松田道雄（2005）小島亮編（2005）所収 p.62
- (13) 松田道雄（2005）小島亮編（2005）所収 p.67
- (14) 小山弘健（2005）「福本和夫—前衛結晶の論理」小島亮編（2005）所収 pp.31—32
- (15) 飯田裕子（2005）小島亮編（2005）所収 p.402
- (16) 飯田裕子（2005）小島亮編（2005）所収 p.402
- (17) 飯田裕子（2005）小島亮編（2005）所収 p.403
- (18) 石見尚（2005）「福本和夫と日本ルネッサンス史論」小島亮編（2005）所収 pp.408—410
に負うところが大きい。「 」は石見尚（2005）の引用である。

- (19) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) 『日本ルネッサンス史論』 東西書房 p.10
- (20) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.48
- (21) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.48
- (22) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.98-103
- (23) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.102-103
- (24) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.146-147
- (25) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.147
- (26) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.150
- (27) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.151
- (28) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.167
- (29) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.344
- (30) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.344-345
- (31) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.345
- (32) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.345-347
- (33) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.352
- (34) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.361-363
- (35) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.432
- (36) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.448-449
- (37) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.737-738, p743
- (38) 藤田昌志 (2011) 「内藤湖南の日本論・中国論」 藤田昌志 (2011) 所収 pp.220-221
- (39) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.750
- (40) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.750
- (41) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.750-751
- (42) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.752
- (43) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.768
- (44) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.767-768
- (45) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.770-771
- (46) 福本 (1972) 序 iv-x
- (47) 福本 (1972) p.398
- (48) 福本 (1972) pp.451-452
- (49) 福本 (1972) 序 iv
- (50) 福本 (1972) p.460

【引用文献・参考文献】

- (1) 小山弘健 (2005) 「福本和夫—前衛結晶の論理」 小島亮編 (2005) 所収
- (2) 小島亮編 (2005) 『福本和夫の思想—研究論大集成』 こぶし書房
- (3) 清水多吉 (2005) 「飛翔と不安—福本と三木をめぐって—」 小島亮編 (2005) 所収
- (4) 福井眞佐汎 (2005) 「福本和夫と一九二〇年代」 小島亮編 (2005) 所収
- (5) 松田道雄 (2005) 「昭和思想史 I 解説〔抄録〕」 小島亮編 (2005) 所収
- (6) 飯田裕子 (2005) 小島亮編 (2005) 所収
- (7) 石見尚 (2005) 「福本和夫と日本ルネッサンス史論」 小島亮編 (2005) 所収
- (8) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) 『日本ルネッサンス史論』 東西書房
- (9) 藤田昌志 (2011) 「内藤湖南の日本論・中国論」 藤田昌志 (2011) 所収
- (10) 藤田昌志 (2011) 『明治・大正の日中文化論』 三重大学出版会
- (11) 福本和夫 (1972) 『日本ルネッサンス史論からみた幸田露伴』 法政大学出版局

書 評

清水多吉（2013）『岡倉天心 美と裏切り』中央公論新社

藤 田 昌 志

清水多吉（2013）『岡倉天心 美と裏切り』中央公論新社

FUJITA Masashi

【摘要】

本書は跟時代和世态的关系上展现崭新的岡倉天心像の名著。本書のキーワードは費
諾羅梭、小山正太郎、优美的亚洲、《茶之书》、福本和夫等。作者清水多吉关于这些
关键词的内容展开很有趣的论述。文学和历史是原本应该跟时代和世态的关系上研究
和记述的。

キーワード：フェノロサ 小山正太郎 ^{うるわ}麗しのアジア 『茶の本』 福本和夫

一 序

本書は時代や世相史との関係で新たな岡倉天心像を提示した名著である。副題の「美と裏切り」の「美」とはフェノロサゆずりのヘーゲル流の西欧美学を背景にしつつも、岡倉天心が結局は、文化ナショナリストであったことを示しており、「裏切り」とは旧福井藩主の幕末での裏切り（福井藩主 ^{よしなが}松平慶永（春嶽）が鳥羽・伏見の戦いの際に、親藩・御家門（名家）として本来すべき幕府側、朝廷側の調停をせずに国許に逃げ帰り、朝廷側に付いて会津征討の藩兵を出陣させたこと）をトラウマとして、「自分は橋本左内の生まれ変わり」と語った天心の弁明（言い訳）を内に秘めた心情を表している⁽¹⁾。

文学や歴史は世相との関係で論じられるのが本来の姿であり、時代の空気の醸成を明らかにするのが本来の研究の使命であるように本書を通じて感じる。分析は総合を経て「全体」の姿が明らかになる。分析だけでは権力に親和性のある研究しか生まれえない。

二 本書の構成と内容の要約

本書は十四章に分かれ、「アジアは一つである」、フェノロサの思想、小山正太郎、「麗しのアジア」、浪漫主義的反発、『茶の本』、天心のイメージの変遷などのキーワードに沿って

記述されている。以下、主な章の内容の要約である。

第一章 「アジアは一つである」 では「アジアは一つである」という言辭は天心の 1903 年 (明治 36) 『東洋の理想』ロンドン ジョン・マレー社 の冒頭の一節であるが、①「美学」「美術史的意味」=インド・中国の美意識が融合し、それは仏教美術として日本にもたらされ花開いたという意味=で一つである。②「政治論」的意味=「東洋の覚醒」(明治 35 年 5 月頃執筆。篋底に秘されていた。昭和 14 年、浅野晃が『岡倉天心全集』第二巻に収め、翌年、単行本として出版した。)のようなラジカルな「剣」をとって立ち上がれという意味=の二つがあることが述べられている⁽²⁾。天心は中国(二度)、インド(一度)への旅行を通して、日本がアジアの宗教、美術の一大「博物館」になっていることを確認した⁽³⁾。それは天心にとって①「美学」「美術史的意味」を中心に置くことを意味していた。

第二章 フェノロサから学んだもの では、フェノロサから学んだヘーゲル美学が「精神」(=理念)と「自然素材」(形態、形式)の関係で、「象徴的芸術形式」「古典的芸術形式」「浪漫的芸術形式」という各芸術形式を区別し、「古典的」芸術形式を「形式」と「理念」が理想的に合致している段階(ex.古代ギリシアの古典芸術の時代)とし⁽⁴⁾、天心は中国の唐王朝、日本の奈良朝期の諸芸術を「古典的芸術形式」に当たるとしたことが述べられている。

第三段階の「浪漫的芸術形式」とはヘーゲルによると「理念」が従来の「形式」を超えて、新しい「形式」「様式」を求めていく時代であるが、天心は足利時代の絵画にそれを求め、雪舟や雪村に代表される山水画、水墨画の巨匠を高く評価した⁽⁵⁾。フェノロサは西洋の写実主義を批判し、文人画も「妙想」(=「イデー」「理念」)が「詩文」のそれであって「画術」のそれでないとして批判している。フェノロサは、また自然以上の理想を表現する、陰翳・輪郭線がある、淡白な色彩、簡潔さなどの点で日本画の方が西洋の油絵より優れていると明治 15 年の「美術真説」で述べ、それは竜池会の日本人画家たちを奮い立たせた(清水(2013) pp.62-65)。

第三章 覚三(天心)のトラウマ では小山正太郎は「書ハ美術ナラス」を書き、天心によって「書ハ美術ナラスノ論ヲ読ム」で反論されたが、小山は長岡藩の出身で、長岡藩は奥羽越列藩同盟に加担し、賊軍の汚名を着せられて敗北したこと、長岡藩攻撃の有力軍に北陸路の有力親藩であったはずの越前・福井藩兵が参加していたこと⁽⁶⁾、そのことが小山と天心の生涯の対立に関わっていたであろうことが述べられている。

第七章 「麗^{うるわ}しのアジア」 では、天心の思い描くアジアが平和な農村、農耕社会、手工業の社会、小売商人の社会であり⁽⁷⁾、天心の思い描く「自然」は東洋的「浪漫的芸術形式」の、宋朝-足利時代の山水画、水墨画における「自然」⁽⁸⁾であるとしている。

第八章 文学者グループに囲まれて では、天心の同時代史として日清戦争を経て日露戦争への時期、軽工業から重工業への転換や都市化、近代化といった社会現象に対する「屈折することのない」浪漫主義的反発を代弁するものとして国木田独歩の『武蔵野』などの自然賛美小説が『国民之友』に掲載され、天心もそうした時代のジャーナリズムとかかわりがあったことが語られている。

第十一章 ほほえみの世界—『茶の本』 では天心の利休像は歴史の利休像と異なり、後者が現実の政治世界と対決する美の世界の存在を主張しているかと思われるのに対して、前者、天心の利休像は自分の思い描いてきた「東洋の理想」を千利休の「美の世界」にまで投影した⁽⁹⁾と述べている。

第十四章 後日談 第三十八節 岡倉天心のイメージの変遷 では日本浪漫派の浅野晃は天心の未発表遺稿を翻訳し、「東洋の覚醒」と命名し、「天心ブーム」を煽り立てたが、天心は右翼反動思想や日本ファシストへの原動力となっただけではなく、福本和夫の日本の内発的文化論研究に啓発を与え、福本和夫(1967)『日本ルネッサンス史論』を生む契機になったことを述べている⁽¹⁰⁾。

三 岡倉天心とは何者か

岡倉天心という人は「書ハ美術ナラスノ論ヲ読ム」で「文明開化は利欲の開化なり」と述べているように、文明開化を肯定しなかった。外来文化を総合して自発的文化論に置き換えたという考えが原初的な「天心像」には付随する⁽¹¹⁾と清水氏は本書で述べている。天心の「アジアは一つ」は正確には「アジアは多にして一つ」であり、「多は一であり、一は多である」というアジアが発信する不二一元論の世界観はヴィヴェーカーナンダ（天心がカルカッタで会った宗教指導者）によって教示されたと同時に天心自身が以前から老荘思想を通じて体得した思想である⁽¹²⁾。

橋川文三氏は天心について次のように述べている。「あの戦闘的な『東洋の覚醒』の中に「西洋の光栄はアジアの屈辱」という有名な言葉があるが、天心はその屈辱を屈辱ともしない魂をみざすために、何人の眼をもあざむかない「美」のアジア的普遍性を人々に気づかせようとした。多様なアジアの美は、そうした天心の献身を通じてはじめて一つなるものとして統一されたわけである⁽¹³⁾。天心は東洋美術の西洋美術に対する優位性を主張し、「気韻生動」の重視などの中にその考えは見てとれる。梅原猛氏は天心を評して次のように述べている。天心が東洋画を採り、洋画をすてたのは、一つには「芸術の精神において、東洋画の方が西洋画より、深いと思った」からであり、その理由は「洋画は写生を主とするけれど、東洋画はそうではない」、南齊謝赫の論画六法でも「写生は、せいぜい三番目」

で、東洋画にはそれ以上に大切なもの、つまり「気韻生動」がある。それは「物の中に宿っている霊のいぶきをとらえること」であり、それが「東洋画の本質である」と天心が言うのを梅原猛氏は高く評価する。的確な天心東洋画採用の説明である（藤田昌志（2011）p.167）。

アジアの美の多様性を知悉しつつ、アジア的普遍性（＝牧歌的な、平和な、他者を侵略して従えようとするような西洋流でない、天心の想念としての「麗しのアジア」の持つ普遍性）を人々に気づかせようとした先覚者であったと言えよう。天心は西洋人になった日本人（「黄色いバナナ」）の眼でアジアを見ていない。今の世界をみたら、天心はどう思うであろうか。天心の研究は現在の問題と通底している。

四 時代・世相・時代思潮と天心研究

一 序 冒頭で「本書は時代や世相史との関係で新たな岡倉天心像を提示した名著である。」と述べた。二 本書の構成と内容の要約 第八章 文学者グループに囲まれて は、その具体的記述で、日清戦争から日露戦争へ、軽工業から重工業への転換や都市化、近代化といった社会現象に対する浪漫主義的反発の代行として国木田独歩の『武蔵野』などの自然賛美小説を清水氏がとらえていたこと、清水氏が天心もそうした同時代に生きていたことを述べていたことに言及した。時代思潮と天心の関係については大岡信（昭和50）『岡倉天心』朝日新聞社 朝日評伝選4 が45年ぐらい前にすでに言及しているが、その「時代思潮」はもっとネガティブなもので、美術学校開設後、天心が三顧の礼を尽くして教授陣に迎えた人々の中の一人である「小僧あがりの木彫家」高村光雲のような「たたきあげの職人」を引っ張りだしたとき、天心の周囲に渦まいていた「時代思潮」は「国粹思想の一般的盛りかえしなどというのんきなものではなく、強烈な圧力としてのしかかってくる官尊民卑の思想であり、学問のない職人ふぜいに対するはなからの蔑視、無視という思潮」にはかならず、それは欧化、国粹両方の側にあったものであり、天心の光雲起用は「いかに彼個人の主体的な決意と責任においてなされた勇氣ある行動だったか」と大岡氏は述べている⁽¹⁴⁾。「時代思潮」と言っても明暗両面あることを示唆している。大岡信氏がこうしたことを述べるのは、光雲起用について、明治中期の西洋一辺倒の風潮がようやく下火になり、代わって国粹主義の風潮が勢いを盛り返してきた時代だから、天心はそういう思潮の尖兵として「文明開化主義に対する反動のお先棒をかついだにすぎない、というような見方をする向き」に対して、「それは低俗な見方にすぎない」⁽¹⁵⁾という考えを持っているからであり、天心を時代思潮に乗っかって何かをしでかした人間とはとらえていない。大岡信氏は天心の光雲美術学校招聘を官尊民卑という時代思潮への反発としての「創造的事

業」⁽¹⁶⁾ ととらえている。繰り返しになるが、時代思潮と言っても欧化・国粹のもっと基礎の部分にある「官尊民卑」の思想も時代思潮として大岡氏は考えているのである。こうした視点がないと、宮川寅雄（昭和 42）「明治ナショナリズムと岡倉天心」⁽¹⁷⁾ のような一面的な天心批判が展開されることになる。内藤湖南が一時、批判の対象となったように、イデオロギーで人を断罪する時期がこの国にはあった。イデオロギーと言っても悪ければ、朱子学的善悪決定論のニューマ（空気）が常にこの国を支配してきたのかもしれない。隣国でも、政治的には今もそうではないか。膨大な人口や多民族、異民族同士の確執が伝統となっている地域では外部に敵を作らなければ、まとまらないのかもしれない。

天心が昭和の日本浪漫派などに持ち上げられたのは「アジアは一つ」という言葉が天心の意図とは離れて断章取義で利用されたからである。既述の言葉で言えば、①「美学」「美術史的意味」で言った天心の言葉を②「政治論」的意味で取り違えたのが日本浪漫派であったと言い切るのは図式的すぎるが、当時、一般人は「政治論」的意味で取ったことは確かであろう。そして「アジアは一つ」の中で日本人がアジア人を日本的階層の底辺に位置づけたことも大枠としては認めざるを得ない。満州国では「五族共和」と言いながら、日本人と朝鮮人、満州人では給料が違うという差別賃金制が採用されていた。台湾は親日と言うが中には反日の人もいて、靖国神社に祀られていることを拒否して、親族の遺骨返還要求をする台湾人もいる。韓国も政治家と一般人の感覚、考えはかなり違うようで、そうでなければ日本に年間 750 万人もの韓国人観光客が来ている（2018 年）ことを説明できない。

清水氏（2013）の第七章 「麗^{うらわ}しのアジア」 で述べられた、天心の思い描く「自然」＝東洋的「浪漫的芸術形式」の宋朝一足利時代の山水画、水墨画における自然、その自然の下の平和な農村、農耕社会、手工業の世界、小売商人の世界（既述）が天心の想いの中の「自然」「アジア」であり、そこにおいて「アジアは一つである」というのが天心の想念であろう。しかし、その「自然」「アジア」は西洋の東洋への侵略によって今や崩壊しつつあるという認識も同時に天心は持っていた。亀井勝一郎（昭和 25）「岡倉天心と日本美術」（岡倉（昭和 43）pp. 399-403）は、「東洋ロマンチズムとしての日本美術、これが天心のとらへた核心ではなかったかと思はれる。」とする。「東洋ロマンチズムとしての日本美術」とは、「東洋全体の思想的美術の流れ」のうちに把握される日本美術であり、天心は「その上で日本民族によるその消化の独自性」に説き及ぶ。亀井（昭和 25）は、「天心の胸底深く息づいてゐたものは、東洋ルネッサンスの祈念」であったとしている。ルネッサンスは「廢墟への感傷」に始まり、ついで「発掘の情熱」となり、やがて「復原と再生の祈念」となると言う。天心はフェノロサとともに「廢墟の扉」を開いて行ったとする。

それが西洋の東洋への侵略に対する天心の「抵抗」と日本の「再生」（ルネッサンス）であったのであろう。

天心の美術史は、「足利時代を奈良藤原と並べて重視している」が、そのことは注目すべきであると亀井（昭和 25）は言う。足利期に大陸文化を完全に消化し、日本の独自性が最も端的に現れたと天心が見たようであるとしている。亀井氏の天心評は、天心の基礎的理解として今なお有効であると思う。

竹内好は「アジアは屈辱において一つである」と言い、相互に文化が違い、孤立しているにもかかわらず「アジアが一つでなければならぬのは彼の信ずる普遍的価値のためである」⁽¹⁸⁾と言ったが、その「普遍的価値」とは「美＝精神＝アジア」であろう⁽¹⁹⁾。天心は政治の使徒ではなく美の使徒であったというところに帰ってくるのであるが、そもそも天心の不二元論、ヴィヴェーカーナンダから得たものもさらに研究する必要があるであろう。ブラフマンとアートマン。梵我一如等。影響を受けた道教、老荘思想や仏教、就中、密教との関係も研究しなければならない。天心は三井寺でフェノロサとともに受戒しているのである。

天心の研究は天心のディーラー（美術商）としての面にも及んでいるが、清水氏の言う既述の「歴史の利休像」ではなく「天心の利休像」が天心の「美」＝精神＝アジアを理解する上で重要であろう。『茶の本』で描かれる利休像について清水（2013）は天心が『茶の本』で「微笑みを浮かべながら、利休は未知の国へと旅立って行った。」と述べていることに着目し、「微笑みを浮かべながら」（With a smile upon his face）とは「理想化された東洋の世界の特徴」であることにとどまらず、この「ほほえみ」＝これまでの自分の生き方を肯定し、自分に降りかかっている運命をも受け容れようとする「ほほえみ」はドイツ観念論「美学」におけるフモール（滑稽のもっとも高い境地。）であり、これまでの自己を否定する笑い＝自己に向けられた冷たいアイロニーではない。であるならば、「覚三の「麗しのアジア」「ほほえむ東洋の美しい婦人たちはますますもって彼の「理想化された世界」のものということになる」⁽²⁰⁾と清水氏は述べている。それは「フェノロサが覚三たちを前にして語った「美学」にはそこまで踏み込んだ内容は盛り込まれていなかったはず」⁽²¹⁾のものである。フェノロサと天心の相違についても今後、詳しく研究していく必要がある。

「東洋的」とは「西洋的」に対する言葉であるが、「対立」「闘争」「抗争」を主とする「西洋的」とは異なる「平和」「ほほえみ」「忍耐」をキーワードとするのが「東洋的」なものなのであろう。そうした「東洋」を「停滞」＝「進歩」「進化」のない世界＝「東洋」とし、一元論的進化論で「東洋」を「侵略」し、「文明」の「光」を投げかけてやったのが「西洋」

であると、西洋の侵略者たちは心底、思っていた。今もそうではないか。西洋のルールで世界を支配しようとするので、ひずみが生じて、反発が生じている。「テロ」がいいはずはないが、「テロ」を生じさせている一因が拝金至上主義の自分たちであるという認識が西側にはない。「謙譲の美德」という言葉もアメリカナイズした現今の日本では死語になってしまった感がある。

日本政府観光局（JNTO）が2019年1月16日に発表したデータによると、2018年の1年間に日本を訪れた外国人観光客は約3,119万人であった。国別外国人観光客は以下の順である。1. 中国：838.0万人 2. 韓国：753.9万人 3. 台湾：475.7万人 4. 香港：220.8万人 5. 米国：152.7万人 6. タイ：113.2万人 7. その他：564.9万。日本人より日本の良さを知っているのは「外国人」という現象が起こっている。（2019.5.22 日本政府観光局 報道発表資料 による）

五 結 語

天心は英語に堪能で、まず英語を学んでから漢字で書かれた道路標識を読めないことを恥じて、漢学の勉強を始めたのは、有名な天心幼少時の逸話である。天心には「天心の憂鬱」というものがあって、それは西洋世紀末の象徴派などと呼応するのであるが、英語に堪能で、漢学も身に付け、日本美術の再興を目論んだ岡倉天心という人は「自覚」という言葉が好きで、自らは岡倉「覚三」と名乗ることを好んだという。豪放磊落な面を持つとともに、早くに母親を亡くしたことから「永遠の女性像」を生涯、追い求めたというのはすでに通説となっていると言っていていいであろう。「官尊民卑」の時代に十代で東京帝国大学一期生として卒業した天心の生涯は、波瀾に富んだもので、「官」の世界におとなしくとどまる人ではなかった。1868年の明治維新から1945年の敗戦までの歴史を「欧化」と「回帰」のサイクルの反復として見る視点は西川長夫氏によって提出され、一定の常識となっているが、岡倉天心という人は「欧化」と「回帰」を一身に具現化した人であり、そのことを時代、世相との関係で明らかにしたのが本書、清水多吉（2013）『岡倉天心 美と裏切り』中央公論新社 であると言っても過言ではないであろう。

【注】

- (1) 清水多吉（2013）p.284, p.79, p.83
- (2) 清水多吉（2013）pp.9-18
- (3) 清水多吉（2013）p.26

- (4) 清水多吉 (2013) p.46
- (5) 清水多吉 (2013) pp.47—48
- (6) 清水多吉 (2013) pp.78—79
- (7) 清水多吉 (2013) p.133
- (8) 清水多吉 (2013) p.135
- (9) 清水多吉 (2013) p.219
- (10) 清水多吉 (2013) pp.264—267
- (11) 清水多吉 (2013) p.266
- (12) 中島 (2017) pp.274—275
- (13) 橋川文三 (1986) p.73
- (14) 大岡信 (昭和 50) pp.242—244
- (15) 大岡信 (昭和 50) p.243
- (16) 大岡信 (昭和 50) p.243
- (17) 宮川寅雄 (昭和 42) 岡倉天心 (昭和 43) 所収
- (18) 竹内好 (昭和 37) 岡倉天心 (1976) 所収 pp.369—377
- (19) 藤田昌志 (2010) 藤田昌志 (2011) 所収 p.166
- (20) 清水多吉 (2013) p.217
- (21) 清水多吉 (2013) p.217
- (22) 亀井勝一郎 (昭和 25) 岡倉 (昭和 43) 所収 pp.399—403
- (23) 梅原猛 (1976) 「解説」岡倉天心 (1976) 所収

【引用文献・参考文献】

- (1) 清水多吉 (2013) 『岡倉天心 美と裏切り』中央公論新社 〈中公叢書〉
- (2) 中島岳志 (2017) 『アジア主義—西郷隆盛から石原莞爾へ—』潮出版社 潮文庫
- (3) 橋川文三 (1986) 『橋川文三著作集』7 筑摩書房
- (4) 大岡信 (昭和 50) 『岡倉天心』朝日新聞社 朝日評伝選 4
- (5) 宮川寅雄 (昭和 42) 「明治ナショナリズムと岡倉天心」岡倉天心 (昭和 43) 所収
- (6) 岡倉天心 (昭和 43) 『明治文学全集三八 岡倉天心』筑摩書房
- (7) 竹内好 (昭和 37) 「岡倉天心 アジア観に立つ文明批判」岡倉天心 (1976) 所収
- (8) 亀井勝一郎 (昭和 25) 「岡倉天心と日本美術」岡倉 (昭和 43) 所収
- (9) 岡倉天心 (1976) 『近代日本思想体系 七 岡倉天心集 編集／梅原猛』筑摩書房
- (10) 藤田昌志 (2010) 「岡倉天心の中国論・日本論」藤田昌志 (2011) 所収

- (11) 藤田昌志 (2011) 『明治・大正の日中文化論』 三重大学出版会
- (11) 梅原猛 (1976) 「解説」 岡倉天心 (1976) 所収
- (12) 2019.5.22 日本政府観光局 報道発表資料

調査報告

「異文化理解」科目における共通教科書導入に向けて — ドイツ語授業アンケート調査の分析を手がかりに —

大喜 祐太

Report on the Introduction of a Common Textbook — An Analysis of a Questionnaire Survey on German Lessons —

DAIGI Yuta

〈Abstract〉

In this paper, I report our efforts to introduce a common textbook in the “Foreign Studies I Basic & Seminar (German)” classes at Mie University. In order to correct differences in teaching content, difficulty level, and grammatical lessons between the classes, a common textbook was introduced in 2019 based on the common teaching materials used in 2018. We clarify the educational purpose of and the course content shared amongst different German lessons in the German language courses at Mie University, so that each student can take German lessons according to their own specific needs. At the end of the spring semester in 2019, a questionnaire survey was distributed among students in order to understand their impressions of the textbook. This paper also reports on this questionnaire survey, which was conducted on the lessons.

キーワード：ドイツ語、異文化理解、共通テキスト、共通教科書、授業アンケート

はじめに

大喜（2019）では、三重大学選択必修科目（一年次）である「異文化理解I（ドイツ語）基礎・演習」（以下、各授業を「基礎」「演習」と略記）に関して、三重大学教養教育ドイツ語学科目の取り組みを紹介し、さらに2018年度から導入した共通教材および共通テストについて報告した。とりわけ、その中では「基礎」および「演習」で使用する共通教材の内容や共通テストの実施方法について解説した。異なる授業担当者が共通して利用できる教材や授業履修者の共通試験を実施することによって、クラス間の授業進度や内容のばらつきを軽減するという目的をある程度は達成することができた。とはいえ、2018年度には教科書の選定が各授業担当者に任されていたことにより、共通教材と教科書の進度が必ずしも一致しないという問題点が生じた。そのため、2019年度より、2018年度に使用していた共通教材に加筆・修正を施した「共通テキスト」を導入した。本稿では、2019

年度前期に履修学生を対象に行った「共通テキスト」についてのアンケート結果について報告し、さらに 2020 年度に新たに導入する「共通教科書」についても言及する。

1. 三重大学のドイツ語

大喜 (2019: 63) でも報告されている通り、三重大学の「異文化理解」教育は、一年次(再履修生の受講も可能)の選択必修(人文・教育・医・工・生物資源学部)となっている。ドイツ語については、2019 年度の「基礎」「演習」クラスは、約 340 名の履修学生がいる。ドイツ語の授業は、火・木曜日の週 2 コマで行われ、再履修学生などを除けば、基本的には前・後期通年での履修を想定している。期末試験を含めると、授業は半年で 16 回あり、履修学生は、少なくとも年間 96 時間をドイツ語の授業に費やしている。

「基礎」および「演習」両授業の目的は、言語としてのドイツ語の基本的な構造を把握することによって、ドイツ・オーストリア・スイスといったドイツ語圏の国々の言語や文化に対する理解を深めることにある。具体的に言えば、(1)ドイツ語の基礎的な文法を把握すること、(2)ドイツ語の基本語彙を身に付けること、(3)ドイツ語圏の文化を理解することである。草本 (2019 78-79) でも指摘されている通り、「異文化理解」教育は外国語教育の目的の一つとして広く認知されている。もちろん、そうした「異文化理解」にも複数の解釈があるが、本授業では、いわゆる「ランデスクンデ」(地誌・文化)を手がかりにして、(3)のドイツ語圏やドイツ語自体への理解を深めることに主眼を置いている。

学習者の到達目標は、前期は独検 5 級レベル、後期は独検 4 級レベルと定められており、検定試験に合格した場合当該科目の成績への加点が認められている。また、シラバスには記されていないが、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) の評価指標に準拠するならば、後期終了時には A 1.2 レベルまで到達していることが見込まれる。

2018 年度に行われた共通教材の導入を通して、学生たちにとっては、初級ドイツ語の授業の一年間で学ぶべき文法事項や基本語彙、またはドイツ語圏の文化などは明確になったと言える。加えて、授業担当者側としても、発展的ドイツ語科目履修者のおおよそのドイツ語レベルを学期開始前に把握できるようになった。とはいえ、授業形態の若干の変更に応じて授業運営上の欠点も生じた。たとえば、基礎と演習の授業では担当者が異なるため、両授業が十分に連動していなければ、やはり授業ペアによって足並みが揃わないということもある。しかも、2018 年度の共通テストの際には、授業内で実際に進められた内容より少し物足りないと感じてしまう学生がいるクラスもあったため、2019 年度の共通テストについては実施を見送る方針をとった。

「異文化理解」科目における共通教科書導入に向けてドイツ語授業アンケート調査の分析を手がかりに―

2. 「共通教材」から「共通テキスト」へ

上述の通り、異文化理解（ドイツ語）では、2019年度より、2018年度の「共通教材」に加筆・修正を施した「共通テキスト」を導入した。基本的には「共通教材」に基づいた構成・内容であるが、改訂を行った点を含めてテキストの概要を以下に示す。

先に挙げたドイツ語の基礎的な文法を把握するという目標を達成するために、テキストでは「キーセンテンス」と「文法説明」、さらに「ペア練習」を通じた文法理解の定着を優先事項として定めている。また、各課扉にある「語彙リスト」には、一年次に必要とされるドイツ語の基本語彙が記載されており、合計約600語が収録されている。加えて、「読み物（Lesen）」と「練習（Übung）」では、ドイツ語の読解力向上を目的とする。「アクティビティ」では、各課の語彙や文法事項を実際に使って、ドイツ語でコミュニケーションをとるために利用される。さらに、「ドイツ語圏の文化」では、各課のテーマ毎に、ドイツ、オーストリア、スイスといった国々の地理や歴史、政治などのさまざまなドイツ語圏の文化を理解することを目標としている。吉島・境（2003: 92）でも、外国語教育には「教養」と「実用」の両側面が必要とされると述べられているが、「共通テキスト」は、異文化理解を通じて異文化間コミュニケーションの土台を築くという点では、教養としてだけでなく、実用的な側面にも目を向けたものであると考える。

本テキストは、基本的に週2回のドイツ語基礎科目を受講する授業カリキュラムを想定しているため、異文化理解「基礎」「演習」の2コマ×2週、つまり4回の授業で一つの課を終えることができるように考えられている。次ページの表1はテキスト内で扱う「文法項目」および「テーマ」であり、テキスト末には各課の問題集が付属する。

「基礎」の授業では、語彙リストの確認とキーセンテンスおよび文法説明にある重要項目の習得を目指し、その際、ペア練習や巻末の練習問題を活用して重要なポイントを反復することによって、基礎的な文法事項を理解できるようになっている。

一方、「演習」の授業では、キーセンテンスと文法説明を再度確認しつつ、ドイツ語の読解力と会話力の向上に重点が置かれている。読解力については、Lesen と Übung があり、さらに各課に Lesen 1 と Lesen 2 が設けられているが、Lesen 1 は基礎レベル、Lesen 2 は応用レベルであり、授業担当者の裁量で問題が選択される。また、アクティビティを学生同士で行うことによって、ドイツ語会話力の向上が期待される。その際、語彙リストで単語の意味を確認することによって、よく使われる語彙や言い回しなどの定着を図る。さらに、ドイツ語圏の文化の項目では、言語としてのドイツ語だけでなく、幅広くドイツ語圏の文化に触れることに重点が置かれている。そこで取り上げるテーマは、表1にも記載した通り、1) 挨拶・自己紹介、2) 趣味・余暇、3) 持ち物、4) 住居・数、5) 自然・

表 1: 「共通テキスト」の目次

	文 法 事 項	テーマ
導入	アルファベット・発音・数字	
第 1 課	動詞 (1) 規則変化 (単数と複数) と sein	挨拶・自己紹介
第 2 課	動詞 (2) 不規則変化・名詞の格変化	趣味・余暇
第 3 課	動詞 (3) 不規則変化と haben・3/4 格と結びつく動詞・否定冠詞	持ち物
第 4 課	2 格の用法・複数形・序数・人称代名詞	住居・数
第 5 課	所有冠詞・定冠詞類・命令形	自然・身体
第 6 課	前置詞	街歩き
第 7 課	分離・非分離動詞	交通
第 8 課	話法の助動詞	予定・計画
第 9 課	再帰代名詞・非人称表現・従属接続詞・zu 不定詞句	学校
第 10 課	現在完了形・過去形	過去のできごと
第 11 課	形容詞・日付の表現・比較級	季節
第 12 課	関係代名詞・関係副詞・指示代名詞	政治

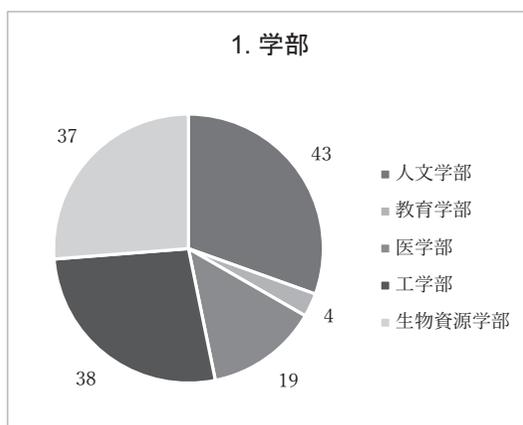
身体、6) 街歩き、7) 交通、8) 予定・計画、9) 学校、10) 過去のできごと、11) 季節、12) 政治であり、基本的には各課の文法事項・テーマに沿った語彙が選定されている。「演習」の授業での目標は、学生がドイツ語圏の文化を理解することにあるため、授業中に、テーマごとに授業担当者がドイツ語圏の文化を紹介すること、また場合によっては学生たち自身がプレゼンテーションなどを行うことを推奨している。もちろん、「演習」で扱うことのできるテーマは基本的には初級者を対象とした一般的なものに限られるものの、今後のドイツ語学習を進めていくために必要とされる知識だけでなく、これまでにあまり馴染みのない文化や慣習を理解するきっかけを提供するような工夫が施されている。

3. アンケート調査

2019 年度の前期授業が終了した時点で、履修学生を対象としたアンケート調査を行なった。当該アンケートは「基礎」および「演習」で使用する「異文化理解 (ドイツ語) 共通テキスト」およびテキストを用いた指導法について検討するために実施されたものである。

3. 1 履修学生

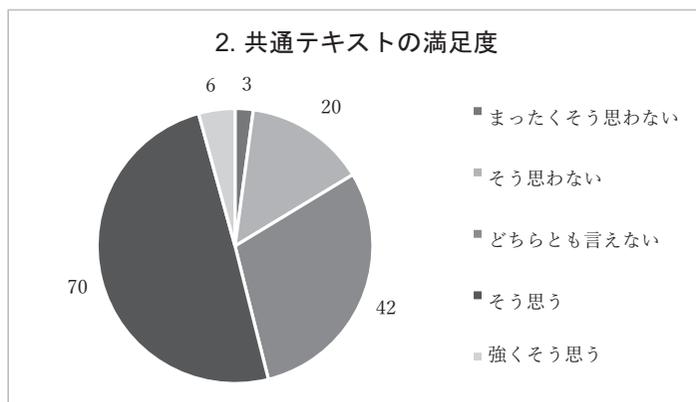
2019 年度前期の異文化理解 I ドイツ語の履修者は、再履修者も含めて約 340 名ほどであるが、最終的に得られたアンケートの回答数は 141 名分である。グラフ 1 の通り、アンケート回答者の学部別内訳は、人文学部 43 名、教育学部 4 名、医学部 19 名、工学部 38



名、生物資源学部 37 名となっている。また、全体の 95 % は一年次生であり、98.6 % が初修外国語としてドイツ語を学ぶ履修者であった。

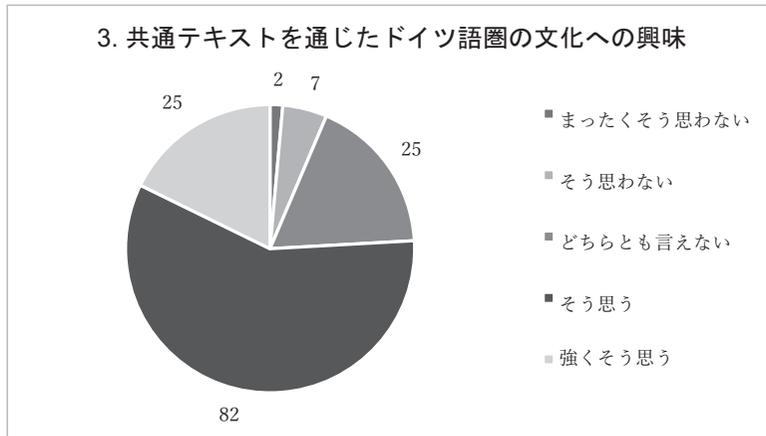
3. 2 「共通テキスト」の満足度

グラフ 2 は「共通テキスト」は全体として満足できる内容ですか」という問いに対する回答である。およそ半数の学生が「そう思う」「強くそう思う」を選択するという結果であった。「まったくそう思わない」もしくは「そう思わない」を選んだ場合、「どのような内容を充実させるべきか」について自由記述欄を設けたところ、以下のような回答があった。たとえば、「もっと文法の解説を増やしてほしい。見やすいレイアウト（表など）にしてほしい」「より具体的な例題や文を入れて欲しい」「いきなり長文を読むのは難しい」というような「共通テキスト」の内容に対するものや、「基礎を習ってすぐ演習というのがついていきにくかった」などのカリキュラム上のもの、さらに「発音の練習、単語読みの為の音声 CD が欲しかった」といった付属資料に関する改善点について言及するものも多く見られた。



3.3 「共通テキスト」を通じたドイツ語圏の文化への興味

グラフ 3 は、「「共通テキスト」を通じて、ドイツ語圏の文化に興味を持ちましたか」という問いに対する回答である。



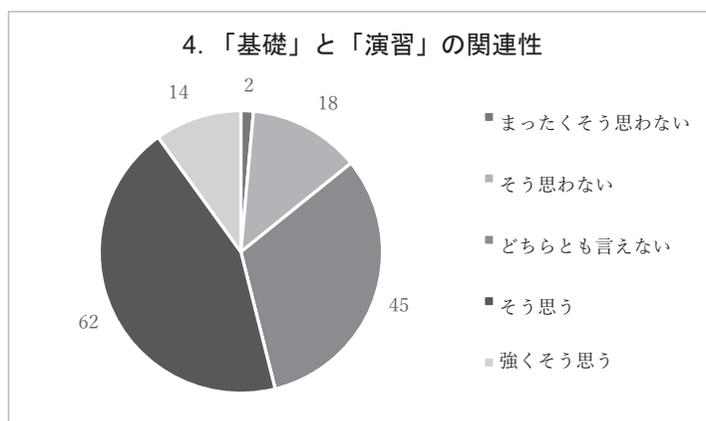
回答の結果、約 4 分の 3 の学生が「そう思う」もしくは「強くそう思う」と答えていることから、多くの学生は「共通テキスト」を通じてドイツ語圏の文化に対して何らかの興味を持ったことがうかがえる。自由記述欄に「教科書に登場する単語に関連したドイツの文化や豆知識を教えてくださいましたので楽しめましたし、覚えやすかった」と記した学生もおり、テキストを用いた授業にある程度満足している履修者も多かった。しかし、「共通テキスト」の項目や内容に対する指摘もいくつかあり、今後テキストの内容を改善していく必要があることが示された。

3.4 異文化理解 I (ドイツ語) 各授業 (基礎・演習) の関連性

先にも示した通り、「基礎」は文法、「演習」はドイツ語圏の文化の理解を中心とした授業として位置づけられている。「基礎」と「演習」では授業担当者が異なるため、仮に両授業でそれぞれ全く関連性のない教科書が採用され、授業が進められた場合、両授業で重複する内容があるか、あるいはどちらでも扱われない項目が出てくる可能性もある。そのような各授業の関連性についての懸念が「共通教材」および「共通テキスト」作成の動機の一つになっている。

そこで、グラフ 4 の通り、「共通テキスト」の導入によって、「基礎」と「演習」の授業内容に関連性があるかどうかについても質問した。半数以上の学生は両授業に関連性を認めているが、約 13 % の履修者は「まったくそう思わない」「そう思わない」と答えており、「共通テキスト」を通じた両授業の結びつきについてさらに検討しなければならない

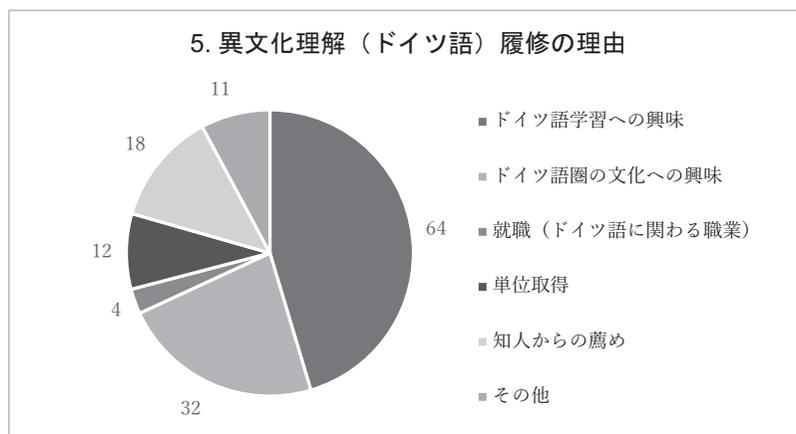
「異文化理解」科目における共通教科書導入に向けてードイツ語授業アンケート調査の分析を手がかりにー



とともに、教材以外の方法を用いて両授業の連携（授業進度の調整など）を強化する必要性も明らかになったと言える。

3.5 異文化理解（ドイツ語）履修の理由

アンケートの最後に、異文化理解科目においてドイツ語を選択したきっかけを尋ねたところ、グラフ5のような回答となった。



ドイツ語に限らず「異文化理解」の授業が必修科目となっているとはいえ、「ドイツ語学習への興味」や「ドイツ語圏の文化への興味」といった積極的理由を挙げる履修者が多かった。その他には「英語との共通点」を挙げる回答や「会話中心というのに惹かれた」「声楽をやっていてドイツ歌曲を扱いたいから」「好きな芸能人がドイツ語を話せるから」といったものも見られた。

4. 「共通教科書」の導入に向けて

2019 年度には、「共通教材」を加筆・修正した上で「共通テキスト」を作成し、当該テキストにおける修正すべき箇所の精査および学生へのアンケート調査の結果を踏まえ、2020 年度より新たに「共通教科書」を導入する。当該教科書は、「共通テキスト」の内容に加え、さらに二次次以上で学ぶべきとされる応用的な文法事項（受動態・形容詞の名詞化・分詞・接続法）も含んだものである。読み物やアクティビティについては、「共通テキスト」の内容では前期の時点では少し難易度が高いと感じる学生が多かったため、課を追う毎に徐々に問題のレベルが上がっていくように配慮した。また、アンケート調査でも改善案が提示されていたが、発音練習のための音声ファイルも付属する予定である。

おわりに

アンケート調査では、「共通テキスト」の内容にある程度満足している履修者がいる一方で、各項目の詳細について改善を希望する回答も多く見られた。調査結果からもわかるように、多くの場合学生たちはドイツ語圏の文化やドイツ語学習自体に興味を持ち、異文化理解科目にドイツ語を選択している。ドイツ語学科目では、これまでの「共通教材」および「共通テキスト」といった教材開発の目的や内容を念頭に置いて、2020 年度以降「共通教科書」を導入する。「共通教科書」は、「共通テキスト」と同様に、基本的には総合教材（文法説明と基本語彙の習得、アクティビティや読み物の充実、ドイツ語圏の文化の理解）として位置づけられるが、「基礎」および「演習」の両授業での目的をそれぞれ明確にし、各授業で具体的な到達基準を与えられるようなカリキュラム・教材作りを目指している。今後も担当教員間での話し合いや、学生へのアンケート調査などを定期的に行い、学内の異文化理解・ドイツ語教育の充実を図りたい。

引用・参考文献

- 草本品 (2019) 「外国語教育と「異文化理解」」ドイツ語教育 23, 日本独文学会ドイツ語教育部会, 75-80.
- 菅利恵, 大喜祐太, 大河内朋子, 井口靖, 鶴田涼子, Bartholome Sebastian. (2019) 『三重大学異文化理解 (ドイツ語) 共通テキスト』三重大学ドイツ語学科目.
- 大喜祐太 (2019) 「「異文化理解」教育の充実を目指して - ドイツ語共通教材導入の取り組み」三重大学高等教育研究 25.
- 吉島茂, 境一三 (2003) 『ドイツ語教授法 - 科学的基盤作りと実践に向けての課題』三修社.

2018年度三重大学ベトナムフィールドスタディの意義と課題

奥田 久春・松岡知津子

Significance and Challenges of Mie University Vietnam Field Study 2018

OKUDA Hisaharu, MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

This article reports outcomes of Vietnam Field Study 2018 and what students learned, then considers ways to be improved. This 10-day short-term study abroad program was implemented in 2019 March at Ho Chi Minh City University of Pedagogy. Five students participated in this program which consisted of three major cooperative activities with Vietnamese students; Vietnamese studying and participating in Japanese classes, conducting field studies on students' own initiative which aim to equip them with independent personalities and cross cultural communication skills, and visiting museums to study Vietnam War and Vietnamese culture. This article illustrates from students' report that they had an opportunity to think of their ways of life and identity stimulated by Vietnamese students. They also experienced some communication hardships and learned how to overcome them. This article also mentions further outcomes that Japanese students have continued their friendship with Vietnamese students who came to Mie University after the program.

The short-term study abroad program, which students can experience to overcome their hardships of cross-cultural communication and to build their independent personalities, will be required for the international understanding so that students can communicate and have respect for international students. This article suggests that we should appeal this program and develop a system for budgetary support.

キーワード：ベトナム、フィールドスタディ、主体性、異文化コミュニケーション、短期海外研修

1. はじめに（背景、VFSの目的と目標）

本稿は、三重大学で行われている全学的な短期海外研修の一つである、ベトナムフィールドスタディ（以下、VFS）の2018年度の成果と学生の学びを報告し、意義と今後の課題を検討していくものである。

このプログラムは、三重大学と大学間交流協定のあるホーチミン市師範大学において、ベトナム語やベトナム文化の授業をベトナム学生と受講しつつ、学生が主体となって、ベトナムに関連するテーマを設定し、現地調査（フィールド調査）を行うことを特徴として

いる。そしてそれらを通じて、グローバルな視点や国際感覚を持ちながら主体的に行動することや、参加メンバーと協力しながら活動を進めること、また異文化にあって積極的にコミュニケーションを図る姿勢など、グローバル人材に求められる能力・資質を育成することを目的としている。

VFS は、2010 年に開始されたものであるが、年に 1~2 回学生派遣を行っており (長縄・江原 2015)、2018 年度で 12 回目になる。2016 年度より指導および引率に携わる教員が変更になったことから、内容を変更して継続してきた。それまで、ホーチミン市師範大学でのフィールド調査は、数ある VFS のプログラムの中の一つとして短期間で行われ、他に国際協力機構 (JICA) のプロジェクトサイトやストリートチルドレンなどの福祉施設の訪問、ハノイへの移動も含まれていた。しかし、2016 年度からはホーチミン市師範大学での学生交流とフィールド調査をメインのプログラムに据え、各施設訪問などは、フィールド調査に必要であれば訪問するというように、学生が主体的に考えることとした。むしろ重視したのは、ベトナム学生と共に授業を受け、共に考え、共に調査できるものとすることであり、PBL 型の協同学習の研修を目指した。また、ベトナム学生に教わりながらベトナム語を学ぶ点も強調した。これによってベトナム学生が話してくれる日本語や、また国際語だからといって英語だけに頼るのではなく、異文化に対する尊敬の念を持ち、理解に努めるようにした。

2016 年度からの VFS (事前研修を除く) は、具体的には大きく 3 つのプログラム内容から構成されている。1 点目はホーチミン市師範大学におけるベトナム語学習、2 点目はフィールド調査、3 点目は戦争証跡博物館、クチ・トンネル、歴史博物館の見学と水上人形劇の鑑賞といった文化体験である。これら全ての活動に共通する要素として、ホーチミン市師範大学のベトナム学生と共に行動することが挙げられる。これらは、あらかじめ決められたプログラムに参加するだけの「受け身」の姿勢になることや日本人同士で固まって行動することを防ぎ、ベトナムという異文化にて学生の興味関心に沿って、コミュニケーションを意識しながら主体的な学びを進めることを狙いとしているためである。

このような学生交流を重視した短期海外研修は、他大学でも事例が見られる。確かに短期海外研修の効果や意義については、語学などのコミュニケーション能力の向上、異文化理解の体験などが挙げられるが、それらを超えるものとして、単にあらかじめ組まれたスケジュールに沿って、受動的にプログラムをこなすのではなく、何らかのコミュニケーション・タスクを与えて学生が積極的に異文化にかかわるようにしている研修 (藪田 2013) や、現地の学生との PBL 型の研修も見られる (又吉 2016)。また、藤原・栗山 (2013) が、短期海外研修は単なる観光のような「見る旅」ではなく「学びの旅」へと変貌を遂げ

たと述べているように、海外研修のあらゆる場面で学びの機会となることが求められつつある。また、短期海外研修ではないが、国内での留学生との協働作業による学びを国際共修として注目するものもある（末松 2019）。

VFS でも研修全体において学生交流を重視し、目的を持って積極的に関わる学びを重視しているが、特に主体性、実践的なコミュニケーション、異文化理解の涵養を重視しているのが特徴である。

では、こうした理念で行われている VFS において、2018 年度に参加した学生は、実際にどのような学びを得たのだろうか。本稿では『2018 年度ベトナムフィールドスタディ報告書』に参加学生が寄せた感想から、学生の学びを読み解いていきたい。その際、特に本研修の狙いでもある「主体性」、「異文化コミュニケーション」の 2 点に着目していきたい。

2. VFS 実施の経緯

2018 年度の実施に向けて学生募集を開始したのは 11 月に入ってからであった。これは、例年 9 月末に公募をかけ、10 月には募集説明会を実施したのと比べて遅いスタートである。この要因として、前年度まで配分されていた予算の終了に伴って、VFS 継続に関する検討に時間を要したからであった。このため 11 月 29 日に募集説明会を行ったが、出席者は少なかった。その後、学生への全学情報伝達のポータルサイトによる学生への案内、

表 1. 2018 年度 VFS 行程表

	日 程	午 前	午 後
1	3 月 10 日	出発（中部国際空港にて集合）	ホーチミン市到着 サイゴン大聖堂、中央郵便局
2	3 月 11 日	開講式、学生交流、 フィールド調査のグループ活動	ベトナム語の授業 ベトナム市場、ドンコイ通り
3	3 月 12 日	フィールド調査のグループ活動	統一会堂、戦争証跡博物館
4	3 月 13 日	2 年生の日本語授業に参加 フィールド調査準備	歴史博物館、水上人形劇
5	3 月 14 日	初級日本語クラスのアシスト	フィールド調査
6	3 月 15 日	フィールド調査	日本語クラスにて日越文化紹介
7	3 月 16 日	クチ・トンネル	自由行動
8	3 月 17 日	自由行動	自由行動
9	3 月 18 日	発表準備	最終発表会・修了式、出発
10	3 月 19 日	帰国（中部国際空港にて解散）	

筆者の授業受講者への案内を通じて周知を図り、参加希望者 5 名を得た。

今回の参加者は医学部看護学科 2 名、生物資源学部生物圏生命化学科 2 名、同資源循環学科 1 名の 5 名で、2 年生が 1 名、残り 4 名は 1 年生であった。また、女性が 3 名、男性が 2 名であった。日程は 2019 年 3 月 10 日から 19 日までの 10 日間で、詳細は表 1 のとおりである。

3. VFS 内容 (日本で行ったもの)

3.1. 事前指導

VFS の事前指導は、すべての学生の時間が確保できる放課後に行った事前研修と、昼休みに行ったベトナム学生によるベトナム語研修があり、それらは独立して行われた。

3.1.1. 事前研修

VFS では、これまで出発までに 4 回～5 回の事前勉強会を行ってきた。これは、渡航準備や基本的な持ち物、集合時間、海外安全研修といった基本事項を伝達するオリエンテーションやフィールド調査の準備のためだけでなく、出発に向けた学生の意識向上を目指しているものである。学生の主体的参加を促すために、出発日や日数といったことまで学生と相談しながら決めるようにしている。2018 年度は 4 回実施し、いずれも 18 時から 1 時間～1 時間半程度行った。各回、必ずフィールド調査のテーマや調査方法について検討するようにしたが、それ以外は主に次の内容を行った。

表 2. 事前勉強会の主な内容 (フィールド調査についての検討除く)

第 1 回	1 月 15 日	自己紹介、研修日程相談、研修概要・渡航前手続き説明、事前学習担当割り当て
第 2 回	1 月 22 日	事前学習「ベトナム料理」発表。行程・航空券手続き等確認、ベトナム史概説
第 3 回	2 月 12 日	事前学習「観光地」「おみやげ」発表。携行品や緊急連絡先、持ち物等相談
第 4 回	3 月 5 日	事前学習「観光地」発表。海外安全講習、集合時間と場所など最終確認

3.1.2. ベトナム語講座

また、VFS では出発までにベトナム留学生によるベトナム語講座を行っている。これはベトナムへの興味関心を高め、ベトナム語での簡単な挨拶などができるようにするためだけでなく、1 章に述べたように、日本人学生もベトナム語を学ぶことによって、相手の文化や社会を尊重する気持ちを養うためでもある。例年は前節で述べた事前勉強会において 2 回行う程度だったが、2018 年度は三重大学国際交流チームの協力のもと、また同職員の研修も兼ねて、1 月後半の昼休みに計 6 回行われた。講座では 2 名のベトナム留学生に交代で講師を務めてもらい、市販のテキストを用意し、発音、人称、挨拶、数字やお金

(ベトナム通貨のドンは何桁が大きい) の数え方、道の聞き方、タクシーの乗り方などを学んだ。

4. ベトナムにおける実際の活動

4.1 ホーチミン市師範大学の学生との交流

VFS では学生との交流を重視しているが、これが可能なのはホーチミン市師範大学日本語学科にて、本研修に全面的に協力してくれるベトナム人学生がいるからである。ベトナム人学生が参加するのは、ホーチミン市師範大学の授業の一環と位置づけられており、単位取得に繋がるだけでなく、「実践的な日本語を学ぶ機会でもある」ためであり、多くのベトナム学生が積極的に参加してくれている(参加学生の意見より)。

実際の活動としては、主に1章に述べた3つのプログラムを実施した。しかし、これまでと異なったのは、ホーチミン市師範大学でのベトナム語学習が、教員による講義ではなく、ベトナム学生による授業となったことである。これは学生らしい工夫を凝らしたもので、具体的には、まず、ベトナム学生とペアになり簡単な自己紹介をすることで、特に難しいベトナム語の発音を学ぶことができた。次に、ペアでの練習成果を発揮するために、全体で輪になり、風船が回ってきたら自己紹介するといったゲームも行われた。更に街中でベトナム語を使用できるよう、実物を教材として用いた買い物ゲームが行われ、実践的なベトナム語学習が実施された。ここには20名ほどのベトナム学生が参加しており、多くの学生との交流に繋がった。その一方で、これまで実施して頂いていたベトナム文化に関する講義については、担当して頂いていた東洋史が専門のLieu教授が退任されたことにより開講されなかった。学術的な内容として過去の参加学生には好評ではあったが、その分、今回はより学生交流に重点を置くことにつながった。

2点目のフィールド調査については、今回は「保健医療の日越比較」、「食文化の日越比較」、「ベトナムの果樹栽培と水の利用」という3つのテーマに分かれて、それぞれ1名から2名の三重大学生と、4名程度のホーチミン市師範大学生がグループを作った。まずは三重大学生が希望する調査テーマの趣旨を説明することから始まり、お互いに意見を出しながら、具体的問いの設定、調査内容と方法の検討、調査計画の立案、調査地への連絡、調査実施、調査結果のとりまとめと分析、発表内容の検討とスライドの作成、発表という手順で行われた。

保健医療をテーマとするグループは、病院を訪問し、施設を見学するとともに、看護師へのアンケート調査を実施した。食文化グループは、ホーチミン市師範大学の学生を対象にアンケートや聞き取り調査を実施し、また近隣のベトナム料理店を訪問して料理や食文

化マナーの観察を行った。ベトナム果樹栽培グループは、スーパーにてベトナム特産の果樹について調査した上で、今回の研修をコーディネートしてくれたホーチミン市師範大学生の実家である農家を訪問し、栽培方法と水利用について視察、聞き取り調査を実施した。いずれも日本とベトナムを比較する内容でまとめられ、最終日に協同で発表が行われた。

3 点目は例年どおりではあるが、戦争証跡博物館、クチ・トンネル、歴史博物館の見学と水上人形劇の鑑賞である。いずれも見学にとどまることなく、ベトナム文化を尊重し、理解するとともに、ベトナム戦争について学ぶ機会になっていた。また、参加したホーチミン市師範大学生にとっても初めて訪問するものであったことから、両者にとって学び合いの場となったようである。

以下は、水上人形劇と戦争証跡博物館訪問時に関する三重大学生の感想である。

「伝統的と聞くと堅苦しい感じがしますが、水上人形劇は、そのような重々しい雰囲気を感じられず、いろいろ工夫が凝らされていて、発見や独特の雰囲気、そして笑いのある劇を味わう事が出来ます」(I.T 水上人形劇鑑賞の報告)

「大変な障害を持ちながらも懸命に生きようとしている人々の姿に胸が熱くなりました。この戦争証跡博物館の訪問によって、改めて戦争の恐ろしさを再認識し、我々のような若い世代が二度とあのような悲劇を起こさないようにしていくという意識が大切であると強く思いました」(K.S 戦争証跡博物館訪問の感想)

これら 3 点のプログラム内容には 2018 年度にいくつかの変更点があったことを述べたが、更に追記すべき変更点は、ホームステイが廃止されたことである。これは、これまで同大学の学生家族の自宅に 1 泊 2 日間受け入れて頂いたものだが、今回の研修をサポートしてくれた学生の中で自宅通学している人数が少なく、調整が困難だったことによる。その結果、家庭生活を体験することができなかったが、その時間を自由時間として、学生たちの主体的な行動を促すことにつながったことを補足しておきたい。

4. 2. ホーチミン市師範大学における日本語授業への参加

4. 2. 1. 日本語授業参加への意義

今回、三重大学において日本語教育を担当する教員が指導・引率に加わったことから、初の試みとして、ホーチミン市師範大学日本語学部における日本語授業に参加することとなった。具体的には、(1)三重大学教員が主体となって授業を行うもの、(2)ホーチミン市師範大学の教員主導の授業ではあるが、三重大学生が事前に準備し、発表するもの、(3)

ホーチミン市師範大学の教員が行う日本語授業の見学があった。このような日本語授業への参加は、以下のいくつかの点において意義があると考えられる。まず、三重大学教員主導の日本語授業に関しては、将来、交換留学生として三重大学への留学を希望する学生にとって、三重大学教員の授業に参加することで留学後の留学生活がある程度具体的にイメージできるということが挙げられる。これは、ホーチミン市師範大学生の三重大学への留学動機を高めることにもつながりうると考えられる。なぜなら、留学先の教員による授業をあらかじめ体験することは、学生たちの留学に対する不安を減らすことにつながりうるからである（松岡・服部 2017）。次章でも詳しく触れるが、日本語授業に参加する三重大学学生にとっても、同年代の大学生たちの教育環境および学習姿勢に触れることは、自らを省みる機会となると考えられる。すなわち、ベトナムの大学生が限られた日本語知識および運用能力で、一生懸命に日本語でコミュニケーションを取る姿に、同じ大学生として学ぶべきものがあると考えられるからである。

学生のみならず、教員側にも大きな意義がある。まず、両大学の教員にとって、それぞれの大学がどのような環境で、どのような教育を行っているかを垣間見る機会となる。すなわち、三重大学教員にとっては、現在三重大学に在籍する交換留学生たちが、どのような環境でどのような教材を用い、いかにして日本語を学んできたのかを知ることができる貴重な機会であるし、ホーチミン市師範大学の教員にとっても、ホーチミン市師範大学の学生が三重でどのような授業を受けているかを知ることにもつながる。

次節では、三重大学教員が担当した2年生の日本語授業と、三重大学学生が発表を行った3年生の授業についてさらに詳細に述べていく。

4.2.2. 日本語授業について

今回、日本語授業を行うにあたり、事前にホーチミン市師範大学のコーディネーターを通じて三重大学教員および学生が主体となって行う授業の学年や大まかな人数、授業名、教室の設備といった情報が伝えられた。まず、2年生のクラスは、学生たちがおよそN5終了レベルであるとの情報から、簡単な語彙や文型を用いた三重大学及び三重県に関するクイズを行った。クイズの形式は○×や選択問題であり、写真や画像を多く用いることで、日本語が聞き取れなくても理解できるよう配慮した。それでも理解できない語彙や表現については、上級生のサポート学生やベトナム人教員の助けを借りた。次に、グループに一人、三重大学または引率教員が必ず入るようにしてグループを作成し、グループごとに日本語またはベトナム語で自己紹介を行った後、互いに質問し合った。学生同士が初対面であること、会話能力のレベルが不明であったことから、「好きな色は何ですか」「趣味は

何ですか」「歌を歌ってください」といった簡単な質問・指示が書かれたカードをグループごとに事前に準備し、それらを用いてコミュニケーションを取るようにした。ホーチミン市師範大学の 2 年生の学生たちは、限られた語彙・文法を用いて、積極的に三重大学生に質問したり、三重大学生の話を理解したりしようとしていた。

3 年生のクラスにおいては、三重大学生が渡航前に準備した「日本の年間行事」「日本の食べ物」といったテーマについての発表をパワーポイントで行ったり、「日本の遊び」について、実際にデモンストレーションを行ったりするなどして紹介した。その後、グループに分かれて、それぞれのテーマについてのディスカッションを行った。

三重大学生たちは、これまでに日本語学習者と接した経験が少なかったことから、はじめはどうすれば自分の話したいことが伝わりやすくなるのか、より分かりやすくするためにはどんな工夫が必要なのかと試行錯誤していた。しかし、時間の経過とともに「シンプルな言葉で話す」「言葉を短く切って話す」「絵や写真、身振り手振りを使って示す」「言葉を言い換える」といった方法を体得していき、徐々にスムーズにコミュニケーションが取れるようになっていった。

5. 報告書にみる学生の学び

VFS では参加学生に報告書の提出を義務付けている。2018 年度も各訪問先の内容と感想について担当者を決めて記述することと全体の感想をまとめてもらった。いずれも帰国後、半月以内に提出されたものである。この学生の報告書から、学生の学びを読み解いていきたい。

5.1. 主体性

主体性とは、積極的な取り組みができるという意味だけでなく、他者との出会いを通じて自己の確立を図ろうとする姿勢と捉えたい (奥田 2017)。VFS では、異文化の他者であるベトナム学生との交流に重点を置いているが、単に交流を通じて仲良くなるというだけでなく、自己の確立のために、自身の生き方に何からの影響を受けることを期待している。次の感想からは、そうした学生の学びや影響を読み取ることができる。

「このように、多くの面白い発見があったベトナムフィールドスタディですが、一番の成果は、一緒に参加して、色々なことに対して切磋琢磨しながら取り組んだ仲間と、ベトナムにきた自分たちをもてなしてくれて仲良くなったベトナムの学生たちと、友達になれたことです。みんなを見ていて、今後何を努力・習得していくかなどを深く考える事が出来ました。本当にいい経験・思い出・目標をこのフィールドスタディを通して得られました」

中略「そんな元気な学生たちと交流することで、少しずつこの積極的な雰囲気をも自分の中に取り込んでいきたい、普段の授業に対しても前向きな気持ちで楽しんで取り組みたいと思えるようになりました」(I.T 全体の感想)

「ホーチミン市師範大学の学生が一生懸命勉学に励む様子に刺激された。私も負けていけない。今できることを精一杯頑張ろうと強く思った」(S.M 全体の感想)

「今回の研修でベトナムの方々に温かく接していただけたことは、私の中でとてもありがたく、日本に帰ってからの外国の方との接し方に変化を与えてくれる体験でした。大学内や街で出会う外国の方と、こちらから勝手に壁を作るようなことはしないで、積極的に声をかけたり、困っている様子であれば手をさしのべたりしたいと思います」(A.M 全体の感想)

これらからベトナム学生から刺激を受け、自分の生き方を考える機会になった様子がかがえる。VFS 終了後、現地でサポートしてくれた学生のうち 5 名が 2019 年 4 月から三重大学へ交換留学生として留学してきた。VFS に参加した 5 名の学生が歓迎会や誕生会を主催するなど、現在も交流が続いている。さらに、留学生全般の支援を希望し、チューターを申し出る学生も複数出てきている。

5.2. 異文化コミュニケーション能力の向上

これまで、どの参加学生もベトナム語を学んだ経験がなく、今回初めて同年代のベトナム人学生から学んだ。講師を担当してくれたベトナム人学生らも、日本語が専門であり、ベトナム語を教えるプロではなかったが、事前研修におけるベトナム語講座も、現地で受けたベトナム語講座も、様々な工夫が凝らされており、コミュニケーションを重視した内容となっていた。そのため、学生の中には、到着後すぐにベトナム語で自己紹介をする学生もいた。以下、ベトナム語学習に関する学びについて触れたものをいくつか紹介したい。

「自分一人で勉強するのと、教えてもらいながら楽しく勉強するのとは、覚える量も違うし、忘れにくいのではないかと感じました」(K.N ベトナム語学習についての感想)

「自分の国の言語ではない言語をしゃべるとき豊富なボキャブラリーはもちろん大切ですが、失敗を恐れず伝えようとする気持ちがコミュニケーションの第一歩であると感じまし

た」(S.M ベトナム語学習についての感想)

次に 4 章で触れた日本語授業に参加する中でも学びを得ていることを紹介したい。

「ベトナムの学生が何を伝えたいのかわからないときや、逆に自分の伝えたいことが伝わらないときがあり、困ったときもありました。しかし、お互いにジェスチャーや絵を駆使してコミュニケーションを図りやっとの思いで伝わったときは達成感を感じるとともに心が通った感覚がしてとても嬉しい気持ちになりました」(S.M 日本語授業に参加した感想)

これらのように、外国語を学ぶ環境や姿勢についての気づきを述べたものや、以下のよう
にコミュニケーションの本質についての気づきを得たものもあった。

「これから近い未来、AIが発達してどんな言語であっても瞬時に翻訳できるかもしれない。しかし、人と人とのコミュニケーションの中で、身振り手振りで伝わったときの喜びは何にも代えがたいものだった。私はその人と人とのつながりを大事にしていきたいと強く感じた。このベトナムフィールドスタディで得られたものはとても大きく、私の人生の指針となるに違いない。この十日間の経験が、将来のために有意義な大学生活を送ろうと努力するエネルギーになると思う。(S.M 全体の感想)

「日本では当たり前のことが当たり前ではなかったりすることを知れて、面白かったです。うまく意思疎通ができないときもありました。しかし、言葉を言い換えてみたり、例を出してみたり、伝えようとしてくれること、伝えたいことをお互いが理解していく、わかりあえた時はうれしいと思うと同時に目には見えない絆のようなものを感じました」(K.N 全体の感想)

現代は、機械翻訳がますます発達し、それによって容易に論理的意味が伝えられる時代となってきている。しかしながら、参加学生たちは、機械翻訳の助けを借りつつも、相手と心と心を通わせることがいかに重要かを述べている。また、同じ大学生として、異国の学生たちが熱心に取り組む姿を間近で見ることができたことは重要な意味を持つことが分かる。

また、以下の感想からも、単なる情報の伝達ではなく、相手を尊重する姿勢やコミュニケーションの内容から認知的な学びを伴っていることが見受けられる。

「今回は初めて、相手の方に思いを伝えたい、相手の方がこんなによくしてくださったから、恩返しをしたい、という気持ちで、言語を習得したいという思いが芽生えました」(A.M 全体の感想)

「教えるだけ、教えてもらうだけで終わるのではなく、日本のことを伝え、ベトナムのことを学べるという、これこそが交流だと感じました」(K.N 全体の感想)。

更に、次の感想からは、言語以外のコミュニケーション行為がとれていたり、学んだばかりのベトナム語を実際に使用したりするなど、行動に結びついていることが窺える。

「1年生との交流の時には日本語が伝わらないことも多かったのですが、写真を見せたり、ジェスチャーをしたりすれば解決することが多かったです。また、ホーチミン市師範大学の学生は英語を使える人が多かったので、日本語で伝わらなくても、簡単な英語を使って言い換えれば伝わることもありました。学生たちとの交流の時間以外の生活の時のコミュニケーションは、お店なら習った簡単なベトナム語は通じましたし、もし通じなくてもメニューを見せながら注文すれば大丈夫です」(K.S 全体の感想)

最後に VFS 全体に関するコメントから、学生の学びを考察していきたい。今回、参加者5名のうち4名が1年生であったが、海外経験が豊富でない学生が多く、出発前には不安を抱えている学生もいた。しかし、研修後には次の感想のように、自信をもって VFS に参加したことがよかったとしていることが読み取れる。

「ベトナムフィールドスタディに参加してみて思ったことは、本当に参加して良かったということです。ベトナムという国が心から好きになりました。日本とは環境や文化が違うところが多いので、車で移動している間に目に映るものすべてが新鮮で楽しかったです。(中略) 私にとってベトナムは未知の国で、ベトナムフィールドスタディに参加するのは勇気があることでしたが、今では参加を決めて本当に良かったと思っています」(K.S 全体の感想)

「ベトナムでの10日間は、楽しかったこと、困ったこと、もどかしかったことなど全て含めて、人生で大切な経験になりました。この経験を、将来の仕事やこれからの人生に必ず活かして生きていきます」(A.M 全体の感想)

「日本に帰ってきてから、ベトナムが恋しく感じています。もう一度ベトナムに行きたいです」(K.N 全体の感想)

これらから、全体的にはコミュニケーションの難しさ、その克服の大切さと意義を体感しながら学んでいることが分かる。また他者との交流および仲間を見ることによって自己の発見に繋がっていることも分かった。

また、内容的には同様であっても、誰一人同じ文面で表現している者はいない。つまり、単に「楽しかった」、「勉強になった」などの具体性のない、ありきたりの感想ではなく、それぞれがそれぞれの言葉で表現していることから、各自がそれぞれの学びを得たということができよう。

6. まとめと今後の展望

以上、ベトナムフィールドスタディの事前研修から現地における活動、学生の振り返りを見てきた。

そして、事前学習および現地でのホーチミン市師範大学生との共修から生まれる学びの成果を考察してきた。学生の感想のみならず、帰国後の学生たちの実際の活動からも、本研修の効果が確認できる。すなわち、5.1. でも触れたように、研修が終わったらそこで交流が終わってしまうのではなく、その成果が帰国後の主体的な交流にもつながっている点、また、チューターとしてほかの留学生の支援も始めている学生が多い点などから、本研修が有意義であるといえよう。

また、今後ますます国際化が進む現代において、日本にいながらにして外国人と接する機会は増えていくはずである。三重大学においてもおよそ 300 名の留学生が在籍しており、三重大学生たちが留学生と接する機会も出てくるであろう。その際に、相手をどのように理解してコミュニケーションを図るのが課題となってくるであろう。そうした場面では、「異文化への尊敬」「恩返し」といった気持ちが自然と出てくるような、異文化でのコミュニケーションの難しい壁を克服した体験が役立つはずである。そしてこうした体験の機会を学生自ら設計できるような短期海外研修が、今後ますます求められてくるのではないだろうか。

今後の課題として、まず、フィールドスタディの実施形態とその時期及び費用について検討することが挙げられる。近年、三重大学で実施する他の海外研修と重なっていることや、今回ベトナムフィールドスタディの実施の決定が遅れたことなどから、参加者募集に苦慮した。最終的には 5 名の意欲ある参加者が集まったが、このような現象は近隣大学で

も起こっているという。しかしながら、これからの社会において、学生の国際力、コミュニケーション力の養成には、このようなフィールドスタディは重要であると考えられることから、今後は三重県下の高等教育機関と連携するなどし、海外フィールドスタディを続けていく道を模索する必要がある。また、本研修には奨学金等が付与されていないことから、安価で気軽に海外に行ける昨今、わざわざ大学の研修旅行で行かなくてもよいと考える学生もいるのではないかと思われる。実際には、通常の観光旅行では体験できない同世代の大学生との交流、大学における体験等があるのだが、それらの魅力を十分に伝えていく必要があるだろう。

次に、これまでの事前研修ではベトナム人学生には語学学習においてのみ関わってもらっていたが、今回の事前研修では、ベトナム語学習以外にもフィールド調査の準備などでも一部かかわってもらうこととした。それにより、フィールド調査の準備において、日本語だけでは難しい情報収集などもより有効に行うことができた。また、サポートに入ったベトナム人学生たちも、これまでの日本留学において、いつも助けられたり教えられたりする立場であったのが、サポートできる立場に立てたことに喜びを感じていた。今後、事前研修段階におけるベトナム学生との交流の機会を増やし、現地においてのみ交流するのではなく、出発前から留学生と交流することで、よりよい研修が作り上げられるものと確信している。これらの活動を通して、単なる交流協定校の留学生の受け入れ及び送り出しといった関係からさらに発展し、より強い関係を構築していきたいと考えている。

謝 辞

本研修を実施するために、全面的にご協力くださったホーチミン市師範大学の Chi 先生および Nga 先生をはじめとするホーチミン市師範大学の先生方、そして全ての日程で暖かく接してくださったホーチミン市師範大学生の皆さんに心よりお礼申し上げます。また、VFS 実施に際し、チケットや保険、海外安全講習等の面でサポートしてくださった国際交流チームの皆様にもお礼申し上げます。

参考文献

- 奥田久春 (2017) 「アクティブラーニングが大学生の留学動機に与える影響に関する予備的考察」『三重大学高等教育研究第』 vol.23、pp 125-128.
- 長縄真吾・江原宏 (2015) 「ベトナムでの海外体験学習を通じた参加学生の意識変化—グローバル人材育成の観点からの一考察」『三重大学国際交流センター紀要 2015』 vol.10、pp.137-152.
- 藤原孝章・栗山丈弘 (2014) 「スタディツアーにおけるプログラムづくり—『歩く旅』から『学ぶ旅』への転換」『国際理解教育』 vol. 20、pp.42-50.

又吉斎 (2016) 「交流活動の活発化を図るプロジェクト型学習 (PBL) - 沖縄女子短期大学海外研修プログラムの事例紹介 -」ウェブマガジン『国際交流』5月号 vol.62、pp.26-35.

松岡知津子・服部明子 (2017) 「ドイツ人留学生の三重大学へ留学動機」『三重大学高等教育研究』第 23 号、pp.89-98.

藪田由己子 (2013) 「短期海外研修におけるコミュニケーション・タスクを用いた異文化交流プログラムの試み」『清泉女学院短期大学研究紀要』vol.31、pp.62-78.

実践報告

産学官連携による SDGs 教育とグローバル人材育成事業の実践 ～中部国際空港協議会/県庁との海外渡航啓発事業第 2 弾～

栗 田 聡 子

The potentials and challenges of globally competent human resources education through promotion of SDGs by industry-university-government collaboration

KURITA Satoko

〈Abstract〉

In 2019 December, the Center for International Education & Research of Mie University invited Ms. Madoka Tatsuno, a well-known educator in the field of global education with focus on “global citizenship” for sustainable development goals (SDGs). The event was supported by collaboration with Chubu International Airport Promotion Council and Mie Prefectural Government, which started from last year. The success of the event largely owes to Ms. Tatsuno’s coaching style of teaching as well as her attractive personality and life stories. Besides, our clear target setting of participants was crucial for the success. More than half of 130 participants who had not been strongly motivated to participate in such educational events attended the event for their class credits. The importance and challenges to promote global education through SDGs by collaborations with industries are discussed.

キーワード：グローバル人材育成、国際教育、産学官連携、SDGs、コーチング教育

1. はじめに

2019 年 12 月、「現代用語の基礎知識選 2019 ユーキャン新語・流行語大賞」が発表された。大賞に選ばれたのは、ラグビー・ワールドカップ（W 杯）で日本代表を率いたジェイミー・ジョセフ・ヘッドコーチが掲げた「ONE TEAM（ワンチーム）」。7 カ国 15 人の海外出身選手を含む 31 人の選手は「桜の戦士ワンチーム」として快進撃を続け、日本ラグビー史上初の決勝トーナメント進出を成し遂げた姿に列島が熱狂した。その他、流行語大賞のトップ 10 を飾ったのは、「軽減税率」「スマイリングシンデレラ/しぶこ」（42 年ぶりにゴルフ海外メジャー制覇を果たした洪野日向子選手の愛称）、「タピる」（タピオカ入り食品を食べる）、「免許返納」、「令和」、等である。

一方で、世界はどうだろうか。Oxford 辞典の編集者らは、11 月に “Oxford Word of the Year 2019”（2019 年を代表する言葉）として Climate Emergency を発表した。「気候変動

を抑制・停止させるため、および気候変動による復元不可能な環境被害を避けるために緊急の行動が必要な状況」という意味である (Oxford dictionary, 2019)。このフレーズは今年に入って使用例が急増しており、9 月には前年の 100 倍以上に増加したという。最終選考に残った言葉も地球環境に関連するものが中心で、climate action, climate denial (気候変動が人類の活動により引き起こされることを否定すること、または気候変動が人類の繁栄や文明への重大な脅威になることを否定すること) ecocide (故意または不注意な人間の活動で自然環境を破壊すること) extinction (動植物が絶滅すること)、などがあげられている (Oxford dictionary, 2019)。

2019 年、世界は気候変動による影響とみられる史上最強の台風や大雨、洪水や山林火災に見舞われた年となった。日本は最も甚大な自然災害に遭った国の一つであり、千葉県を中心とした関東では 9 月以降の台風と大雨の影響で 50,000 以上の世帯が全壊、もしくは一部破損、床上 (下) 浸水し、何十万人もの人々の日常が奪われた。そのような自然災害に喘ぐ日本に居住しながら、日本人の多くがグローバル規模の環境問題を他人事のように捉え、ラグビーやタピオカ飲料に夢中でいられたのは何故だろうか。もちろん、スポーツは時に政治よりも求心力があり、人々の結束を強める力は無視できないのであるが。危機的な状況にある地球規模の環境問題に意識が向かないとすれば、私たちが育った環境や受けた教育に起因している可能性がある。

昨年 10 月、三重大学国際交流センターは、初めての産学官連携事業として若者層の渡航促進をすすめる中部国際空港協議会と協議会メンバーの三重県庁地域連携部交通政策課との共催で三重大生を主に対象とした「グローバル人材セミナー」を開催した。講演者は「知の巨人」と称される立命館環太平洋大学 (APU) の出口治明学長であった。出口学長は自分自身の価値観を築きあげるためには、「人と会うこと、本を読むこと、旅をすること」で様々な情報と体験を得ることが欠かせないことを説かれ、多くの参加学生にとって、将来につながる「今」を懸命に生きることの大切さに気付く貴重な機会となった。

今年度は産学官連携によるグローバル人材育成事業も 2 回目となることから、「環境先進大学」を掲げてきた三重大学が注力している「SDGs 教育 (または ESD) (持続可能な開発を目標とする教育)」を通して学生の渡航促進を実施することとなった。最終的なゴールの 1 つは学生の海外渡航だとしても、その動機づけとして世界規模の環境問題や貧困問題を自分ごとのように受け止めることの大切さを知ることは重要である。その目的達成のために招聘した講師は、近年「グローバル・シチズンシップ (地球志民)」をテーマにグローバル教育の分野で全国的に活躍されている辰野まどか氏であった。

本報告では、「グローバル人材白熱教室 2019『未来を創るのは私たちだ。』」と題して開

催した辰野氏のセミナー内容と結果を報告し、グローバル人材育成（国際教育）における SDGs 教育の重要さと親和性、そして課題について検討する場とする。

2. 若者層の渡航促進事業と国際教育の親和性

今回の「グローバル人材白熱教室 2019」の開催を可能にしたのは、中部国際空港（セントレア）利用促進協議会（以下、協議会）とそのメンバーである三重県地域連携部交通政策課との産学官連携であった。協議会は 2001 年に設立され、東海 3 県と名古屋市、（一社）中部経済連合会、名古屋商工会議所、中部国際空港（株）および関係企業・団体等から構成されている。「中部国際空港が、その機能を十分に発揮していくことが可能となるよう、地域が中心となって、同空港の利用促進・活用等の取り組みを一体的に推進していくこと」を目的としている（中部経済連合会，2019）。

セントレアが 4 月に発表した内容によると、2018 年度の航空旅客数は LCC の新規就航や増便が相次いだこともあり、国際線旅客における前年度比は 110% で 609 万 9,796 人となり、5 年連続増加で過去最高を記録したとのことである（Fly Team News, 2019）

だが、1997 年以降、全体的に 20 歳代の出国者数が減少しており、1997 年と 2016 年対比で 37% 減（▲169 万人）との報告がある。若者層に限れば、中部三県は平均出国率の 17.3% よりも低い 15% であり、三重（13%）はその中でも最低の比率となっている（愛知 18%、岐阜 14%）（国土交通省，2019）。本県は南北に長くセントレアまで距離があるといえども、津からセントレアは船で 45 分のアクセスもあることから、地理的な問題だけではない可能性がある。協議会は、アウトバウンド需要を持続的に成長させるためには、地域の若年の利用を促進させることが最も重要と認識しており、地域の自治体等と取り組むべき課題として認識を共有してきた。2016 年度以降、愛知県下では「大学」×「セントレア」×「LCC（航空会社）」という産学（官）連携の施策のもと様々なタイアップ企画や授業が実施されている（国土交通省，2019；セントレア，2019）。

それらの授業やイベントは航空会社にとっては経済的利益追求のための促進事業であるが、大学は学生の国際感覚を高め、海外留学を含めた海外渡航へ踏み出す動機を強めることができる。留学生とのワークショップでは、日本人学生が英語などの語学を通じたコミュニケーションスキルを高め、国際交流が促進される。これだけの利点だけでも、国際空港の利用を推進する機関と大学とのタイアップはグローバル人材育成を推進していく上で大いに親和性があると考えられる（栗田，2019）。

昨年 10 月、協議会のメンバーである三重県庁は県の若者層のセントレア利用拡大（出国率上昇）を目的に、本学国際交流センターとタイアップして「グローバル人材セミナー」

を開催した。招聘した講師は津市出身で、ビジネスや歴史の分野で多くのベストセラー書籍を執筆してきた前述の出口治明学長（立命館環太平洋大学（APU））であった。そのセミナーの成功を受け、今年度も引き続きセミナーが産学官連携のもと開催されることになった。今年度は昨年とは異なるアプローチをとったのだが、次のセクションでその経緯を記す。

3. 招聘講師の選定とプロセス

3.1. 持続可能な開発目標（SDGs）

グローバル化が加速する世界は、情報技術の発展にともない地球規模で人やモノ、資本が移動しており、「一国の経済危機が瞬時に他国に連鎖するのと同様、気候変動、自然災害、感染症といった地球規模の課題も連鎖して発生し、経済成長や、貧困・格差・保健等の社会問題にも波及して深刻な影響を及ぼす時代になってきている」（外務省，2019）。

国連は、2015年9月に国連サミットで「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を採択、「持続可能な開発目標（SDGs）」として2030年を期限とする開発目標を記載し、「誰一人取り残さない（no one left behind）」社会の実現を目指している（国連開発計画，2019）。SDGsでは具体的に17の項目と169のターゲットが設定され、ミレニアム開発目標（MDGs）で達成できなかったものを全うすることが目標とされている。経済、社会および環境を「調和するべき3つの側面」と定義し、「地球」「繁栄」「平和」「パートナーシップ」を4つの軸としている。平和なくしては持続可能な開発はあり得ず、国境を越えた地球規模のパートナーシップがなければ、地球も人間も危機的な状況から脱することはできず、未来は持続しない、という警告である。よって、SDGsの17項目は先進国も含めて国際社会全体で取り組むべき喫緊の課題（官邸，2019）であり、日本においても、政府や教育組織だけでなく社会のあらゆる主体が積極的な役割を果たすことが期待されている（文部科学省，2019）。

3.2. SDGsの推進と日本の現状

安倍総理は9月に開催されたSDGサミット2019において「次のSDGサミットまでに、国内外における取組を更に加速させる」との決意を表明し、G20大阪サミットの成果を含む過去4年間のSDGs推進の実績や「SDGs未来都市」の取組を紹介した（外務省，2019）。一方で、同じく9月に開催された国連気候変動枠組み条約第25回締結国会議（COP25）に参加した小泉進次郎環境相は、温暖化対策の取り組みについて具体策を説明するかわりに「セクシーでなければ」と発言、各国から失笑に近い形で注目を浴びた。さ

らに、二酸化炭素の排出量が多い石炭火力発電所の新設を計画している日本に対する批判も高まり、世界の環境団体で作る気候行動ネットワークから地球温暖化に消極的な国に贈る「化石賞」をまたもや受賞（2 回目）した。気候ネットワークの国際ディレクターである平田仁子（きみこ）氏が指摘するように、今、日本に求められているのは「言葉ではなく行動」（木村，2019）なのであろう。

だが、そのためには、未来を担う日本の若者の意識を教育で高める必要がある。各国の教育機関は、2015 年以降 SDGs を取り入れた教育プログラムの作成に尽力することを国連から期待されており（国連開発目標，2019）、グローバル人材教育（国際教育）に明白なかたちで加わってきたのは当然のことと言える。

3.3. グローバル人材育成と SDGs 教育

2012 年、政府は「グローバル人材育成推進会議」を設置、国家の成長を支えるグローバル人材の育成と活用が重要な課題であると提言した。バブル崩壊以来、経済的・社会的な停滞に陥った経験を持つ日本においては、国の牽引力になりうる国際的に活躍できるグローバル人材は、ビジネスの世界だけでなく政治や学術を含めた様々な分野で必要と考えられている。それは、「産業・経済の急速な高度化・グローバル化の中で、我が国がこのまま極東の小国へと転落してしまう」（官邸，2012）ことを回避するためでもあるとされた。しかし、温暖化問題を筆頭とする地球規模の緊迫した課題がついに顕在化された現在、グローバル人材を育成する必要性は、もはや自国ために世界の中で闘うに十分な競争力を持つ若者を育てるため（だけ）にあるのではない。SDGs の達成が叫ばれる現在、地球規模の問題解決に立ち向かうために国を超えて人々とパートナーシップを結び、行動できる人材を育てることへ重点が移動している。よって、教育機関、とりわけグローバル人材育成（国際教育）を担う教育関係者は SDGs 教育の必要性を理解し、率先して推進していく責任があるだろう。この意味で、グローバル人材教育と SDGs 教育は極めて親和性が高いと言える。

3.4. 「先進環境大学」としての三重大学

三重大学は「三重の力を世界へ」をスローガンに、地域創生貢献大学としてのナンバー・ワンを目指しており、グローバルな視野から地域の課題に取り組む「グローバル」な思考ができる「グローバル人材」の育成に力を入れてきた。一方で、本学は「地域創生貢献大学」を目指す以前の 2006 年度から、当時の豊田学長をはじめとした教職員らの考えにより「環境先進大学」を実現するための長い道のりを歩んできた（三重大学，2019）。本学

が環境に力を入れてきた経緯は、三重県が四日市公害に代表されるような深刻な公害問題を経験した歴史にあり、教員は学識的な観点から県の環境審議会等に参加するなど、その解決に向けて貢献してきたことによる。2007 年には環境に関する国際標準規格 (ISO 14001) の認証を取得することにより地域をリードし、「科学的地域環境人材 (SciLes) の育成」プログラムを実施している。その「環境の文化が根付く大学づくり」をモットーにした本学の環境マネジメントは、国立大学法人評価委員会により「非常に優れている法人の取組例」として取り上げられた (三重大学, 2019)。

なお、2019 年 1 月には国連と世界の高等教育機関とのネットワークである国連アカデミック・インパクト (UN Academic Impact : UNAI) に加盟し、4 月にはイギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education (THE)」が発表した「THE 大学インパクトランキング 2019」の SDG 12 (つくる責任つかう責任) において、日本国内で 1 位、世界で 31 位にランクインした (Times Higher Education 日本版, 2019)。この意味でも、「先進環境大学」を目指す三重大学が取り組むべきグローバル人材教育の方向性は確実に SDGs の線上にあると言えるだろう。

3.5. 参加者のターゲットと二極化問題

上記のような経緯から、2 回目の産学官連携によるグローバル人材育成事業は SDGs 教育に精通している専門家に講演を依頼することとなった。国際教育を推進する上で、学生にとって刺激となるような講演者を招聘するためには予算が必要である。地方の国立大学での予算では実現が難しい事業も、産学官連携により可能になることもある。

その利益を享受するのは全てのステークホルダーなのであるが、特に参加学生らが受ける恩恵は測り知れない。昨年招聘した出口治明 APU 学長は、卓越した教養と「一期一会」を志とする人柄の魅力で学生らをひきつけた。文系軽視で不安を抱えている学生らの心も読みながら、「知の巨人」はりべラルアーツを軽視しがちな日本や高等教育機関にファクトとロジックから警告を与えた。熱心に出口学長の言葉をノートに書き記す参加者が多く見られたのは、参加を「希望者」に限定したからでもあった。昨年のセミナーは既に世界や留学に向けて意欲的で向上心の高い学生が参加者の大半を占めていたと言えよう。

一般的に、国際教育をテーマにしたイベントは、他の教育関連のイベントと同様、多くの参加者を集めることが困難であり、学生の「二極化」という課題 (学研, 2012) がある。グローバル化が加速する中、海外留学を経験してみたいと思う学生が増えている一方で、全く海外に関心のない学生も多い。昨年の出口学長のセミナーに参加した学生らの多くは前者に属していたわけだが、今回は試験的な意味もあり、参加者のターゲットに後者を重

点的に含むことにした。そのため、会場の収容人数を昨年よりも増やし、日本人学部生の 1 年生が多く履修する授業（著者の担当）を含め、他の教員からの協力も求めて参加を促した。その結果、日本人学生の 6 割以上は授業単位がインセンティブの参加となり、国際教育や SDGs といったテーマに対して特に関心のない層が多く含まれていた（事前アンケートより）。

3.6. 講演者の選定について

上記で説明したターゲット設定により、SDGs が掲げる 17 項目のいずれかに精通する専門家よりも、学部生の若い心に刺激を与え、海外留学へのモチベーションを上げることができる話し手の方が適切であると判断した。

著者が国際交流関連の研究者や機関に問い合わせたところ、辰野まどか氏（グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）社団法人代表理事）が最適な候補としてあがった。辰野氏は 2015 年より「持続可能な開発のための教育（ESD）円卓会議」の委員を務め、東洋大学食環境科学研究科客員教授でもある。「トビタテ！留学 JAPAN」高校生コースでは事前事後研修を担当、名古屋国際交流センター（NIC）でグローバル人材育成アドバイザーとしても活躍されている。GiFT が教育機関や企業を対象として実施しているグローバル教育は「グローバル・シチズンシップ」育成を掲げており、GiFT の HP には以下のとおり説明されている。「GiFT では、一人でも多くの人が自らの世界をよりよくする志である、『グローバル・シチズンシップ（地球志民）』と繋がり、次世代を意識して行動できるようにするための教育を大切にしています。人類という共通項を示すことで、平和な社会・多様性を尊重する社会を作っていくということ。そして、地球規模の課題に取り組める人材を育成し、次世代を意識して教育を考えていくことの持つ可能性を、身を持って感じているからです」（GiFT, 2019）。この提言の強みは、「リーダーシップ」や「英語コミュニケーション能力」など多くの項目から曖昧な定義になっている「グローバル人材」という概念を「自らの世界をよりよくする志」、「グローバル人材教育」を「他の志とつながり、次世代を意識して行動できるようにすること」と容易に理解しやすい言葉に置き換えている点である。さらに、SDGs 教育がグローバル人材教育の核として明白に示されている点も、SDGs 教育の推進が求められる各教育機関が進むべき方向性と合致していると言える。

加えて、コーチングファームでの勤務経験がある辰野氏に対して、「コーチング」という対話を重ねるコミュニケーションの手法がどのように使用されるのか、果たして（内向きな傾向のある）学生の心を捉えて「やる気」を引き出すことができるのか、それらの点

についても教育者の立場から興味があった。

従来の大学では教員の一方的な知識の伝達を受ける「受け身型」の授業が一般的であったが、近年では学生が能動的に学ぶことができる「アクティブ・ラーニング」手法が推奨されている。教員からの「知識の伝達」の重要性と軽視についての議論は別として、コーチングの手法をアクティブ・ラーニングに活用して授業を活性化するコーチング教育がオランダを中心に高い効果を実証されている（菅原・石川，2015）ことから、実際に有効なのであれば学ぶ機会になると考えた。

以上の理由で、今年度のグローバル人材事業は辰野まどか氏に託され、毎年 12 月に実施している「国際交流 Days」のメインイベントとして 12 月 5 日（木）夕方に開催するに至った。辰野氏のコーチング形式のセミナーが参加学生の心を刺激することを期待し、タイトルは「グローバル人材白熱教室 2019」とした。

4. 「グローバル人材白熱教室 2019」の開催結果

4.1. 主催と共催について

今年度の産学官連携によるグローバル人材育成事業は本学が教育の指針としている SDGs を海外渡航へのインセンティブとしていることから、共催として本学の「国際環境教育研究センター」と「SDGs・ESD 教育開発・推進プロジェクト」が加わった。なお、本学は新制として創立 70 周年を迎えたことから、記念行事として開催することとなった。当日は、中部国際空港協議会（県庁）から海外渡航を促進するグッズやパンフレットが各参加者へ提供された。

4.2. イベントのポスター作成

大学と県庁の HP で掲載する周知用のポスターは、「海外」と「SDGs」そして「航空機」を融合させるものとした。デザインは、昨年のセミナーで趣旨に合う美しいポスターを作成してくれた本学の大学院生に依頼した。参加者の年代に近いことから、若者にアピールできるデザインやキャッチコピーも心得ている。今回の「グローバル人材白熱教室 2019」の副



図 1. イベントのポスター



図 2. SDGs ポスター

タイトルとして「未来を創るのは、私だ。」というコピーが加えられた。「私」という単語により、SDGs の課題が持つ喫緊性と求められる主体性が表現され、世界地図と航空機が海外渡航を想起させるイメージの作品となった (図 1)。また、会場を SDGs 17 項目のカラフルなイメージと先進環境大学を目指す三重大学、そしてセントレア空港のロゴを組み合わせたポスター (図 2) を作成し、会場を SDGs の雰囲気です飾った。

4.3. 参加者について

12月5日の「グローバル人材白熱教室」講演会に参加した人数は、約130名(正規生65名(うち院生7名)、留学生約20名、教職員約20名、一般20名、県庁関係者5名)であった。

正規生の大半は学部1年生で、約6割が授業の一環として参加していた。留学生の日本語のレベルは「中級2以上」であり、彼らの多くは「日本語の向上」を目的として日本語教員に促されての参加であった。出身国は中国とベトナムを中心にドイツなどヨーロッパ諸国も含まれていた。全参加者の大半は google form から申し込んでおり、一般からの参加者は本学の HP や他の教員からの紹介で参加してくれた高校教員や県庁関係の方々である。ちょうど高校の期末テストと重なった時期だったとのことで、残念ながら高校生の参加は皆無であった。

4.4. 司会について

講演会の司会は、昨年も司会を担当してくれた日本人の女子大学院生(生物資源研究科)と友人であるサモアからの留学生(同研究科で研究員)が務めてくれた。グローバルで和やかな国際交流の雰囲気を期待したとおり、二人の掛け合いによる司会で、イベントは微笑ましい雰囲気の中で進められた。



司会をしてくれた大学院生

4.5. セミナーの内容について

冒頭の国際交流副センター長による開会挨拶に続き、県庁交通政策課の職員よりセントレアとLCCの利便性について説明があり、学生時代に海外への渡航を経験する大切さについて話題が提供された。

続いて拍手の中、辰野まどか氏が登壇、自己紹介とSDGsについての話題の後、人生のターニングポ



セミナーで話す辰野まどか氏

イントになった 17 歳の原体験について語られた。英語が苦手勉強を放棄していた 17 歳の誕生日に、母親から「ひとりでスイスの国際会議にでる権利をプレゼントします！」と言い渡され、環境問題等が話し合われるような大規模な国際会議に参加したとのこと。クライマックスは、国際会議の最終日での出来事。参加者がグループになり一人一人感想を述べる順番がまわってきた時、17 歳の辰野氏は会議の素晴らしさについて語り、「これからもこのような場が続いてほしいと思います」と言った。その瞬間、「何言っているの!?! あなたが続けるんでしょう!?!」と厳しい口調で年配の女性に叱責されたのだ。その衝撃的な経験が、グローバル・シチズンシップ教育を始めさせたきっかけであり、その後の様々な困難を乗り越えさせた原動力であったとのことである。

後半で、辰野氏は「30 年後の 2050 年、自分は何をしているのでしょうか? 妄想してください」と参加者に課題を与え、その内容を隣席の人に語る、という指示を与えた。「妄想は実現不可能でもオッケーです。語る方は自由に、聞き役は全力で聞いてくださいね」。ワクワクした表情で自分の 30 年後について妄想し、初対面の人々に臆せず語る参加者たち。会場は楽しく、ポジティブな活気にあふれた。辰野氏は、「世界や社会がかかえる課題
「30 年後の自分」について話す参加者ら
を自分ごとのように感じ、人々と協働して行動することは難しい。だから、まず自分について知り、受け入れることが大事」と、参加者にメッセージを伝えた。



質疑応答では、留学や人生経験に関する質問に対して丁寧な返答があり、最後は参加者全員で記念撮影をした後、セミナーは盛会のもと終了した。

5. 事後アンケート

県庁交通政策課が受付時でアンケートを配布し、回収した回答結果 (76 名) の一部を紹介する。

5.1. セミナーの満足度について

「今回のセミナーはいかがでしたか。その理由もお教えてください」という問いに対して、54 名 (70.1%) もの参加者が「大変満足」、15 名 (19.5%) が「やや満足」と答え、辰野氏の講演に対する満足度が全体的に極めて高いことがわかった。「大変満足」した学生らがあげた理由は、以下のとおり大きく 3 つに分類することができる。

<辰野氏と生き方に刺激されたから>

- 型にはまっていない、素敵な生き方に憧れました。
- とても辰野さんの生き方に刺激を受けました。とにかく「行動」したいと思いました！
- 今までに聞いたことのない経験談だったので、とても面白かった。世界に出ることで全く世界の見方が変わるんだと感じた。
- お話の仕方が面白くすごく引き込まれた。海外に少しでも興味はあったけど、話を聞いて、より海外に飛び立ってみたいと思った。
- (今まで) 受動的に行動してきたが、少しは能動的に行動しようと思った。
- 人生スムーズにいかないことが多くても、夢をあきらめずに追いかけてみようと思ったからです。
- 若いころから自分がしたいと思っていることをする大切さがわかったから。

<自分について見つめ直す機会を得たから>

- 知らない人とのワークを通して自分を見つめなおす機会になりました。
- グローバルなどの言葉を聞いたとき、世界を見てしまうが、まず自分を見つめるのが大事ということが心に残りました。
- お話がとても面白く、1時間経つのが早く感じました。自分がこれからどのような人生を送りたいのか、考え直してみたいです。
- 学生のうちから活動をされていた方の、経験を基にした講演を聞くことができ、今の生活の過ごし方について改めて考えさせられたから。

<(SDG 等について) 学べたから>

- SDGs は大変小難しいものと考えていましたが、大変分かりやすく楽しく学ぶことができましたからです。
- グローバルについて分かりやすく教えていただきすごくためになる講演会でした。
- かなり自分の知らない情報が得られた。

一方で、満足度が低かった学生からは、「結局、SDGs, SDGs と呪文のように聞かされただけで中身は伝わらなかった」「参加方が苦手です」との感想や、留学生からは「2時間の航空会社の広告を見なければならないことは全然ダメです」と若者の海外渡航を促がす目的を含むイベントに対して批判的な意見が2件見られた。

上記からわかるように、本セミナーにおいては、参加者の満足度は主に辰野氏の生き方から刺激を受け、現在の自分と未来について見つめ直すことができた事に起因していた。

それは、辰野氏の特別な国際経験からだけでなく、観客と対話をするように語る辰野氏の卓越したコーチング力と人柄の魅力によるものであったと推測される。

5. 2. LCC へのイメージについて

「今回のセミナーを受講して、LCC（格安航空会社）のイメージは変わりましたか（利用したいですか）？」との問いに関しては、一番多数は 38 名（49.4%）の「やや変わった」であり、「大変変わった」と答えた参加者は 14 名（18.2%）であった。低価格のために安全面で疑われることの多い LCC に対するネガティブなイメージが「変わった」と答えた参加者が、約 7 割に達していた。「大変変わった」と答えた参加者からは、「もっと遠いと感じていた飛行機を身近に感じた」「友達とたくさん旅行しに行きたいなあと思いました」等のコメントが含まれていた。この結果は、LCC 向けの新ターミナル（第 2 ターミナル）を 9 月にオープンし、LCC の利用を促進している中部国際空港協議会にとって一定の成果があったと言えるだろう。ただ、留学生からは、「大学で広告を見せることはダメです」との批判的なコメントも見られた。

5. 3. 海外旅行や留学について

「今回のセミナーを受講して、海外旅行や留学をしたいと思いましたが？」という問いは、主催である本学国際交流センターにとって一番効果を期待する項目であった。嬉しいことに、38 名（49.4%）もの学生が「大変思った」、26 名（33.8%）が「やや思った」を選択していた。今回のイベントに参加したことで、参加者の約 83% が海外経験に対して積極的になったことを意味しており、期待した効果が確かに得られたことが示された。

6. 考察

本稿では、12 月に三重大学国際交流センターが産学官連携のもと開催した「グローバル人材白熱教室 2019」の概要と実施結果について報告した。この事業は、中部国際空港協議会が近年繰り返し広げている若年層渡航促進事業の一環であり、その事業に携わる三重県庁交通政策課との連携により昨年本学ではじめて実現され、今回で 2 回目となった。

6. 1. 国際教育におけるコーチング教育の有効性と課題

セミナーの数日後に著者が担当する授業で聞いた参加学生らに感想を求めても、辰野氏によるセミナーの評判は極めて高かった。「先週の辰野先生のお話について聞きます。1 が「まったくつまらなかった」5 が「大変良かった」であれば、どのレベルですか？」と

口頭で聞いたところ、5 の「大変良かった」で 9 割の学生の手が挙がったのである。確かに、セミナーで見られた参加学生らの眼の輝きは、残念ながら普段の授業で見られることは少ない。基礎知識をインプットしていく専門の授業であれば仕方のないことかもしれないが、コミュニケーションやアクティブ・ラーニングを推進する授業では、学生らをウキウキと高揚した心理状態にもっていくことが目に見える成果とも言える。

彼らの「大変良かった」は、教育関係者にとって重要な意味を持つ。昨年招聘した出口学長（2017）の考えによると、「人材は育てる」というよりも「見つけ出すもの」であり、「育てる」という考え自体が傲慢であるとのこと。人には様々な個性や資質があり、「海外留学」「グローバル人材」という言葉に関心を示さない学生も多い。だが、潜在的には「海外で新しい経験をしたい」「自分を変えたい」のような想いを抱いているとすれば、それらの存在に気付かせる機会が必要となる。今回の「大変良かった」という感想は、その「気付き」であり、自分の新たな面を発見できた事に対する満足感からきている可能性がある。ある学生は、以下のように感想を書いた。「今まで世界は広く海外の話なんてそんなんに関係ない、そう思っていた私の考えが180度変わりました。（中略）自分から世界の問題について知っていこうという姿勢を忘れないようにしていこうと思います。」

辰野氏は次のように語っている。『『世界とつながる前に、まず、自分の思いであるモヤモヤ、ドキドキ、とつながる』というプロセスを大切にしています。心のどこかで感じワクワクを見つめ、何が起きているのか、なぜ自分は海外に出たいのか、なぜ学ばなければならないのか、どんな人生を送りたいのかを考えます。自分を振り返り理解し、自分自身を受け止めることが、多様性あふれるこれからの地球社会において自分の軸を持ち生きるために不可欠です』（GiFT 2019）と。

つまり、学生の二極化において一見「向上心が低い」「消極的で内向き」グループは、辰野氏の言葉を借りていえば、まだ「自分とつながっていない」学生を多く含んでいる可能性が高い。「世界とつながる前にまず自分自身とつながること。その先に、世界とのつながりが見えてくる」（GiFT, 2019）のであり、自分自身を理解していない段階で、「世界に視野を拡げよう」と促されても無理がある、ということなのだ。

教育心理学的な観点から言えば、自分の考えを客観的に理解する「メタ認知」（Metacognition; e.g. Flavell, 1979）を活動させることが重要である。辰野氏は参加者に「30年後の自分」を妄想してそれを記述して可視化させ、他の参加者との対話を通して彼らのメタ認知を鍛えた。その結果、彼らの自己肯定感を高めることに成功したのだろう。参加者らのいつにない瞳の輝きと満足感は、この自己肯定感と多に関係しているものと推測できる。

今後、彼らがこのメタ認知を日常的に働かせることができれば、過去のネガティブな自動的思考(例:「どうせ自分は無理」)から脱却し、行動を含めた問題解決をとることを習慣とすることができるかもしれない。この理解が正しければ、今回のようなコーチング形式の国際教育セミナーは、「内向き傾向にある」と言われることの多い現代の若者らの心に響く教育方法であることが考えられる。

その一方で、「SDGs について学術的な情報が少なかった」「講師の個人的な体験や人生観に終始した印象がある」等の批判的な意見が一部の参加者からのコメントに見られた。彼らの感想はもっともである。なぜなら、当初から SDGs の課題に対して学術的な情報を求めるような層をターゲットにしていなかったからである。そして、辰野氏の言葉を借りて言えば、彼らはすでに「自分とつながっている」人々であるので、今回のようなコーチング形式のセミナーは不向きであったかもしれない。ただ、教職員の方々には、辰野氏によるコーチング形式のセミナーが多く参加者のモチベーションを上げた事実を認識し、学生の二極化問題に対する一つの方策として参考にしていただければと思う。イベント内容を差別化することは、海外留学だけでなく、就職活動への準備プログラムを企画する上でも有効であるだろう。

6.2. 産学官連携の有効性と課題

前述したように、産学官連携事業による有効性は大きく、セミナーを提供する側としては参加者の LCC へのイメージ改善や海外渡航に対する興味の強化において数値的に見る限り成功したと言える。参加者のターゲットは昨年と今回では異なるものの、効果は昨年とほぼ同等であったことは興味深い。LCC へのイメージ改善では昨年から引き続き約 65%、海外渡航に対しては約 85%もの参加者にポジティブな方向で効果があったことがわかった。この効果を実際の行動(海外渡航、留学)に向けて実現させるために、主催者側は継続して海外留学や研修プログラム、渡航キャンペーン等の周知をしていく必要があるだろう。

ただ、「海外渡航促進の広告」と捉えて異議を唱えた留学生 2 名が存在していたことは無視できない。彼らは欧州からの留学生であるが、アジア諸国と比較して初等教育から高いレベルのメディア・リテラシー教育が身につけている。大学という極めて公共性の高い組織が産学官連携を通じてビジネスに関与することに対して不快感を持ったことがうかがえる。空港も含めて企業の本質的な行動原理は私的経済利益の追求であり、大学が得ているような公的な経済的支援なく自助努力を基本としている。この意味で、欧州からの留学生が伝えた不快感は正当な反応であり、逆に宣伝とも言える情報を素直に受け入れる日本人学生やアジア諸国からの留学生の方が危ういかもしれない。

しかしながら、昨年から実施している中部国際空港協会との本事業は利益相反には当て

はまらないだろう。本事業は、「特定企業との連携を深めていく中で、その期待される役割の公共性とのバランスをいかに取っていくかが重要な課題となる」（文部科学省，2003）ことを理解した上で、企画されてきたからである。昨年度、参加者は出口学長から「グローバル時代の中でイノベーションを起こせるような人材」について学び、今年度の辰野氏からは「国際性と SDGs に対する意識を涵養するために必要な自己肯定感」を強めることができた。そのような機会を学生に与えることは大学に期待される役割であり、その線にある海外渡航や留学は彼らにとって大きな学びの一つである。ただ、今後は留学生を含めた参加学生に対して、その趣旨をさらに明確に伝える義務があることは確かであろう。

最後に、SDGs と航空会社の関係について言及する。現在、世界の航空会社全体が排出する CO₂ の量は全ての CO₂ 排出量の 2% を占めることから、削減を含めた具体的な行動を求める SDGs（第 13 番目）の実現に対して厳しい立場にある。北欧では、スウェーデンの高校生で環境運動家であるグレタ・トゥーンベリさんの影響で、今や飛行機に乗ることは「飛び恥」という言葉も生まれているほどである。6 月には、KLM オランダ空港が“Fly Responsibly”（責任ある飛行）計画の一貫として、企業 CM で「飛行機の代わりに電車で移動することはできませんか？」という内容を流し、世界の航空会社に衝撃を与えた（Business Insider, 2019）。エルバース社長によると、「航空業界はまさに弱肉強食の世界」であり、「常に（環境問題に対して）責任を果たし続けないと生き残れない」時代に突入しているのである（加藤，2019）。今後は日本の航空業界でも SDGs の推進が活発化していくことが予測される。その意味で、今回の「グローバル人材白熱教室 2019」は極めて時代に即した試みであったと言えるのではないだろうか。

7. おわりに

今後も、本学を含めた三重県下の教育機関において、SDGs を意識した国際教育が、様々なかたちで産学官連携のもと継続されることを望んでいる。その連携に支えられた教育が、地球や社会が抱える様々な課題を「自分ごと」と捉え、自ら行動し、解決する意欲にあふれた人材を多く輩出することを期待してやまない。

最後に、中部国際空港利用促進協議会と三重県庁地域連携部交通政策課の皆様、そして協力してくれた学生と教職員の方々に、厚く御礼を申し上げる。

<参考文献>

外務省（2016）「SDGs 実施指針改定版」2019 年 12 月 23 日アクセス
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/advocacy.pdf>

- 学研 (2012) 「特集：留学への関心度は二極化短期プログラムで増加なるか？」2020 年 1 月 3 日アクセス <<http://www.gakuryoku.gakken.co.jp/pdf/articles/2012/7/p6-9.pdf>>
- 加藤ニール (2019, 10 月 24 日) 「逃げ恥、飛び恥、赤っ恥～飛行機に乗るのは恥ずかしい？」NHK News Web 2020 年 1 月 5 日アクセス
<<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20191024/k10012146491000.html>>
- 官邸 (2015) 「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」2019 年 12 月 27 日アクセス <<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/dail/sankou3.pdf>>
- 官邸 (2012) 「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」2019 年 12 月 27 日アクセス <<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>>
- 木村正人 (2019, 12 月 9 日) 「セクシーじゃないね」化石賞に輝いた日本の石炭依存度」News Week 日本版 2020 年 1 月 3 日アクセス <https://www.newsweekjapan.jp/kimura/2019/12/post-68_1.php>
- 栗田聡子 (2019) 「『グローバル人材育成』における産学官連携の可能性 ～出口治明氏 (立命館アジア太平洋大学学長) を迎えて～」『三重大学国際交流センター紀要』第 14 号 pp.67-83.
- 国土交通省 (2017) 「若年層による海外旅行市場の活性化に向けた中部国際空港の取り組みについて」2019 年 12 月 27 日アクセス <<https://www.mlit.go.jp/common/001270472.pdf>>
- 国連開発計画 (2019) 「持続可能な開発目標」2019 年 12 月 27 日アクセス <<https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals.html>>
- 菅原秀幸・石川尚子 (2015) 「アカデミック・コーチングが教育イノベーションを実現する可能性：オランダのコーチング主体型教育から考える」開発論集 (95) pp.13-28.
- セントレア (2019) 「セントレアの産学連携」2020 年 1 月 3 日アクセス
<<https://www.centrair.jp/corporate/torikumi/industry-collab>>
- 竹下郁子 (2019, 10 月 15 日) 「『飛行機でなく電車移動を』捨て身の呼びかけする航空会社。欧州では「飛び恥」という動きも」Business Insider 2020 年 1 月 3 日アクセス
<<https://www.businessinsider.jp/post-200561>>
- 中部経済連合会「中部国際空港利用促進協議会」2019 年 12 月 27 日アクセス
<<http://www.chukeiren.or.jp/outline/organization/2013/09/post-9.html>>
- 三重大学 (2019) 「国際環境教育研究センター」2019 年 12 月 27 日アクセス
<<http://www.gecer.mie-u.ac.jp/center/greeting.html>>
- 文部科学省 (2019) 「持続可能な開発目標 (SDGs) 採択に至る経緯」2019 年 12 月 27 日アクセス
<https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/07/01/1418526_001.pdf>
- 文部科学省 (2003) 「今後の産学官連携のあり方」2020 年 1 月 3 日アクセス <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu8/toushin/attach/1332041.htm>
- Flavell, J. H. (1979). Metacognition and cognitive monitoring: *A new area of cognitive-developmental inquiry. American Psychologist*, 34 (10), pp.906-911.
- Fly Team News (2019) 「セントレア、2018 年度旅客数は 7 年連続で増加 過去最高を記録」2019 年 12 月 27 日アクセス <<https://flyteam.jp/news/article/109300>>
- GiFT (2019) 「グローバル・シチズンシップ (地球志民)」2019 年 12 月 27 日アクセス

産学官連携による SDGs 教育とグローバル人材育成事業の実践～中部国際空港協議会/県庁との海外渡航啓発事業第 2 弾～

〈<https://j-gift.org/about/global-citizenship-education>〉

Oxford dictionary (2019) “About Word of the Year” 2019 年 12 月 27 日アクセス

〈<https://languages.oup.com/word-of-the-year/word-of-the-year-faqs>〉

THE 世界大学ランキング日本版 (2019) 「THE 大学インパクトランキング発表！日本の大学の社会貢献度は？」 2019 年 12 月 25 日アクセス

〈<https://japanuniversityrankings.jp/topics/00105>〉

三重大学国際交流センター紀要 [投稿規定]

2014年3月13日改定
国際交流センター運営会議

1. (名称及び目的)

本紀要の名称は『三重大学国際交流センター紀要』とし、主として三重大学や三重県内の地域社会において実施する国際教育、国際研究、国際交流、語学教育に関わる内容の、研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告、書評等を発表する場を提供することを目的とする。

2. (編集委員会)

三重大学国際交流センター内に、三重大学国際交流センター紀要編集委員会（以下、編集委員会）を置く。編集委員会は、三重大学国際交流センターの専任教員1名と学部選出の委員1名（いずれも任期1年）によって構成され、内1名を編集委員長とする。編集委員会が国際交流センター紀要の出版に際し、すべての責任を負う。

3. (投稿資格)

本紀要への投稿資格は、三重大学に勤務する専任教員あるいは非常勤教員であることを原則とする。但し、編集委員会が特に認めた場合はこの限りではない。

4. (原稿規定枚数)

原稿の枚数は、研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告については、原則として13枚（1枚＝40字×32行、ただし20%の増減を認める）、書評については3枚以上9枚以内とする。図表、写真等も規定枚数内に含める。

5. (使用言語)

本紀要に掲載する研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告、書評等は、日本語または英語で執筆したものとする。執筆の詳細は「執筆要領」に別途定める。

6. (原稿論文等の採否)

投稿された原稿については、編集委員会にて以下の審査を行った上で採否（条件付き採択を含む）を決定し、投稿者に通知する。

- (1) 投稿原稿の内容が、本紀要の発刊趣旨、対象領域に合致していること。
- (2) 投稿原稿の構成、文体が紀要にふさわしく、投稿規定に則っていること。
- (3) 未発表であること、論文作成にかかる不正がないことが誓約されていること。

尚、原稿の種別にかかわらず、当該学術領域の専門家による内容評価は行わない。

7. (投稿の受付)

編集委員会は投稿申込みおよび原稿提出の締切を定める。締切日までに提出され、採用された原稿は、原則として当該年度の号に掲載する。

8. (論文等の公開)

掲載された研究論文等は、原則として電子化し、インターネット上でも公開する。

本規定は 2014 年 4 月 1 日より運用を開始する。

三重大学国際交流センター紀要 [執筆要領]

2011年6月15日改定

国際交流センター紀要編集委員会

1. 原稿は、A4用紙を使用し、マイクロソフト・ワードで作成する。

[和文の場合] 1頁：一行40字×32行

[英文の場合] 1頁：32行（行数のみ指定・1行の文字数は指定しない）

[ページ余白]（和文・英文とも）上下左右30mm

2. 注は、⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾のように本文中に通し番号を付け、脚注または後注とする。

3. 引用・参考文献は、著者名又は論文執筆者名、（当該著書刊行年又は論文発表年）、書名または論文名、出版社又は当該論文発表誌名、巻数及び頁数を記す。

【例】山田祐二（1995）『日本論』河人社

山本幸夫（1996）「日本の民間習俗」『〇〇大学紀要』vol.21、pp.30-42.

Riggs, Fred W. 1966) *Thailand: The Modernization of a Bureaucratic Polity*.

Honolulu, HI: East-West Center Press.

Psathas, G. (1986) The organization of directions in interaction, *Word*, 37 (2), pp. 54-66.

4. 原稿は、次の順序で執筆する。

[和文の場合]

- ①論文名と執筆者名（日本語）
- ②論文名と執筆者名（英語又はその他の言語）
- ③要旨（英語又はその他の言語で200語以内）
- ④キーワード（日本語で5語以内）
- ⑤本文
- ⑥後注
- ⑦引用・参考文献

[英文の場合]

- ①論文名と執筆者名（英語）
- ②要旨（日本語で400字以内）
- ③キーワード（英語で5語以内）
- ④本文

⑤後注

⑥引用・参考文献

5. 執筆者は、次のものを期限までに提出する。

①打ち出し原稿（A4用紙に印字）

②原稿の電子ファイルを記録したUSBメモリー・スティック

（USBメモリーには執筆者名を記し、ファイル名は「論文名＋執筆者名」とする）

6. 校正は、執筆者本人が再校まで行う。校正段階での内容の変更は認めない。

執筆者一覧

三重大学地域人材教育開発機構

藤田昌志 准教授

松岡知津子 准教授

三重大学人文学部

大喜祐太 講師

三重大学教養教育院

奥田久春 特任講師

三重大学国際交流センター

百瀬みのり 非常勤講師

栗田聡子 准教授

編 集 後 記

『三重大学国際交流センター紀要』第15号（留学生センター紀要より通巻第22号）をお届け致します。今回は、研究論文3本、調査報告1本、実践報告2本、研究ノートと書評が各1本の合計8本となりました。内容は、日本文化論から言語学、ドイツ語授業、国際交流センターが長年にわたり実施しているホーチミン市師範大学への海外研修、そして昨年引続き開催した産学官連携によるグローバル人材育成事業とSDGs（持続可能な開発目標）、と多岐にわたっております。

また、今年度をもって、留学生センター時代から永きに亘り国際交流センターを支えてこられた藤田昌志先生がご定年を迎えられます。藤田先生には、刊行当初から論文規定の草案作りだけでなく、著者としても洞察に溢れた論文や書評等を多数投稿頂き、本紀要を守り立てていただきました。簡潔ではありますが、益々のご活躍を祈念するとともに、深く御礼を申し上げます。

次年度も国際交流センターホームページにて論文を掲載して参りますが、引き続きよろしくご願ひ申し上げます。

（栗田聡子・松岡知津子）

三重大学国際交流センター紀要 第15号（通巻第22号）

2020年3月31日 印刷

2020年3月31日 発行

編集委員：栗田聡子（国際交流センター）
松岡知津子（地域人材教育開発機構）

発行者 三重大学国際交流センター
〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

印刷所 伊藤印刷株式会社
〒514-0027 三重県津市大門32-13
TEL 059 (226) 2545 FAX 059 (223) 2862

BULLETIN

OF

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH

MIE UNIVERSITY

Vol. 15

Contents

Articles

- Japanese "Perception of China" (15) (2018.9–2019.8)
- Case Studies in Comparative Culture— FUJITA Masashi (1– 16)
- 谷崎润一郎和《支那趣味》 FUJITA Masashi (17– 31)
- Frequency of Fillers *de, anoo, ee, maa*, on Spoken in Television Interviews
..... MOMOSE Minori (33– 47)

Research Notes

- 福本和夫论 —比較文化学の先驱、福本和夫— FUJITA Masashi (49– 61)

Book Review

- 清水多吉 (2013)『冈仓天心 美和背叛』中央公论新社 FUJITA Masashi (63– 71)

Research Reports

- Report on the Introduction of a Common Textbook
— An Analysis of a Questionnaire Survey on German Lessons — DAIGI Yuta (73– 80)

Practice Reports

- Significance and Challenges of Mie University Vietnam Field Study 2018
..... OKUDA Hisaharu, MATSUOKA Chizuko (81– 94)
- The potentials and challenges of globally competent human resources education
through promotion of SDGs by industry-university-government collaboration
..... KURITA Satoko (95–111)
- Information on Subscription of the Bulletin (113)
- Instruction to Contribution (115)
- Authors (117)
- Postscript by the Editor

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH
MIE UNIVERSITY

2 0 2 0